や。忙豁勒の騸馬ども痩せたりと云はれたり。我等は、部衆に阿勒台山（親征錄案臺元史按臺）を越えさせ退かせ動きて、軍を整へて、彼等を誘ひて行きて、阿勒台山の下に到るまで

狗の鬬ひ

狗の鬬ひを鬬ひて行きて、我等の騸馬どもは肥えてあり、腹を引起させ、忙豁勒の騸馬どもを疲れさせ、彼等の面の上に水注けん、我等」と云ひて遣りき。（阿勒台の東南幹山は、東に向ひて烏蘭郭馬山となり、奇勒稽思泊の北を繞り、又東南に向ひ白勒克那克科克依山となり、又東〜て杭愛山の陽に接す。白勒克那克科克依山の南麓に今烏里雅蘇台城あり。塔陽罕は、蓋その邊に駐牧せり、こゝに阿勒台山と云へるは、その杭愛山に接する邊を指せるなり。）その言につき、古出魯克罕言はく「彼等にかく婦人塔陽心怖ぢて、この言を言へり。忙豁勒の多きは、いづこよりか來けん。忙豁勒の大半は、札木合とこゝに我等の處にあり。孕婦（坤都額霞）の更衣の地に出でたること無き、車下（合札兒）の犢（古兒敦）の草喫ふ處に到れること無き婦人塔陽（古唵）は、心怖ぢて、この言を言ひておこせたるに非ずや」とて、使に依り、父を痛むるまで疚むるまで、言ひて遣りき。この言につき、塔陽罕は、己を婦人とせらるべく言はれて、塔陽罕言はく「力あり勇ある古出魯克、到り合ひ殺〜合ふ日に、必ずこの勇を勿失ひそ。到りあひ合ひ畢へば、離るゝこと必ず難くあるぞ」と云へり。その言につき、塔陽罕の下を管れる大官人豁哩速別赤（親征錄元史火力速八赤）言はく「亦難察必勒格罕なる爾の父

父を罵る古出魯克罕

君を罵る豁哩速別赤

は、同等の敵に男の背、騮馬の臀を見せざりき。今爾朝早く便ちいかんぞ心怖ぢたる、爾。（朝氣銳、昼氣惰、暮氣歸」と孫子曰へり。今早朝に〜て惰歸の氣あるは、恒怯甚〜きなり。）爾をかく心怖づるを知りたらば、合屯の人にもあれども、爾の母を古兒別速を伴れ來て軍を治めしめざらんや。（親征錄「昔君父亦年可汗、勇戰不回。士背馬後、未嘗使人見也。今何怯邪。果懼之、何不令菊兒八速來」。この譯は、簡に〜て質なり。元史は修飾を加へ「先王戰伐、勇進不回。馬尾人背、不使敵人見之。今爲此遷延之計、得非心中有所懼乎。苟懼之、何不令后妃來統軍也」と改め、頗る雅馴なる文となれり。）嗟惜けくも可克薛兀撒卜喇黑に老いられたり。いかにも我が軍の法度は怠慢になれり。忙豁勒の天時氣運とぞ爲れるに非ずや。嗚呼、懦き塔陽、臆病の如くのみあり、爾」と云ひて、その箭筒を打ちて別れ驅け去れり。

塔陽罕の奮進

逆戰の敕

その時塔陽罕怒りて言く「死ぬる命、苦む身は、すべて一つなるぞ（苦まんよりは死なんとの意）。〜かあらば戰はん（明譯人死的性命辛苦的身軀都一般。您那般說呵、咱迎去與他厮殺）」と云ひて、合池兒の水より動きて、塔米兒河（水道提綱の他米勒河、會典の圖の塔米爾河）に沿ひ行きて、斡兒桓河を渡りて、納忽の崖の東の裾を過ぎ、察乞兒馬兀惕に到りて來つる時、成吉思合罕の斥候見て、「乃蠻到りて來つ」と云ふ報を致〜たれば、この報を致さる〜と、成吉思合罕勅あるには「多きよりは多く、少きよりは少く損失になるぞ（多き乃蠻には死傷多く、寡き蒙古には死傷寡からん）」と云ひて、「彼等の迎へに出馬〜て、彼等の斥候

叢行き海立合ひ鑿戰ひ

を逐ひて、軍を整ふるに、叢「の如き」行きを行きて、海「の如き」立合ひを立合ひて、鑿「の如き」戰ひを戰はん」と云ひ合へり。（叢行きは、廣がり行くこと、海立合ひは、廣がれる陣立、鑿戰ひは、烈〳〵き突擊なり。黑韃事略に「其行軍、常恐衝伏、雖偏師、亦必先發精騎四散而出、登高眺遠、深哨一二百里間、掩捕居者行者、以審左右前後之虛實」と云へるは、即ち謂はゆる叢行きなり。「其陣、利野戰、不見利不進、動靜之間、知敵强弱、百騎環繞可裹萬衆、千騎分張可盈百里」と云へるは、即ち前鋒、衽革當先、例十之三」と云ひ、又「交鋒之始、每以騎隊徑突敵陣、一衝纔動、則不論衆寡、長驅直入、敵雖十萬、亦不能支」と云へるは、即ち謂はゆる海立合ひなり。）かく云ひて、成吉思合罕自ら先鋒となりて、合撒兒に中軍を整へさせて、斡惕赤斤那顏に從馬を整へさせたり。乃蠻は、察乞兒馬兀惕より退きて、納忽の崖の前なる山の裾に緣りて立ちき。かくて乃蠻の斥候を我等の斥候は逐ひて、納忽の崖の前

乃蠻の退き蒙古の進み

なる彼等の大中軍に遇ふまで逐ひて到りき。かく逐ひて到れるを塔陽罕見て、札木合はそこに乃蠻と共に出陣〳〵て來合ひて、そこに居て、塔陽罕は札木合に問ひけり。「彼等はいかに。多き羊を狼追ひて圈に到るまで追ひて來るが如きは、これらはいかなる人かかく追ひて來ぬる」と問へり。札木合言はく「我が帖木眞安荅、四つの狗を人の肉にて養ひて、鎖つけて繫ぎて、居るなりき、彼等。我等の斥候を追ひて來ぬるは、彼等なるぞ。彼等四つの狗は、銅（失咧門）の額あり、鑿（失兀赤）の嘴あり、錐（失不格）の舌あり、鐵（帖木兒）の心あり、環刀の鞭あり、露（失兀迭兒）を喫みて、風に乘りて行く、

塔陽罕札木合の問答

人肉にて養へる四狗

彼等。殺〜合ふ日は、人の肉を喫ふ、彼等。到り合ふ日は、人の肉を糧とす、彼等。鎖を解かれて、今繋がれず〜て居るを喜びて、かく涎垂れ來ぬ、彼等」と云ひき。「それら四つの狗、誰誰はそれら」と云へば、「者別、忽必來二人、者勒篾、速別額台二人、それら四人なり」と云ひき。塔陽罕言はく「但それらの下人より遠く立たん」と云ひて、退り引きて、山を負ひて立てり。その後より躍りて繞りて來ぬるものどもを見て、又塔陽罕は、札木合に問ひき。「彼等はいかに。朝に放てる駒、母の乳を咂ひて、母の廻りを疾く走る駒の如く、いかんぞかく繞り來ぬる、彼等」

哈剛 古温 古揑速 古倫 額客 額客

躍り繞る兀嚕兀惕忙忽惕

と問ひき。札木合言はく「彼等は、鎗ある男を追ひて、血あるもの（生きたる人）を剝ぎに剝ぐ、環刀ある男を逐ひて、倒して殺〜て、財を剝ぎ取る、兀嚕兀惕、忙忽惕と云はる、彼等。今「繋がれ」ず「〜て居るを」喜びて、かく躍りて來ぬ、彼等」と云ひき。それより塔陽罕言はく「但〜かあらば、それらの下人より遠く立たん」と云ひて、又退り山に登り立てり。「その後より來ぬる、貪る鷹の如く涎垂れて前みて來ぬるは、誰なる」と、塔陽罕は、札木合に問ひき。札木合言はく「この來ぬるは、我が帖木眞安荅。彼の總身は、銅にて鍛へられたるもの、錐を刺すに隙間無く、鐵にて

赤谷 兀勒都 赤孫 兀納合 忽勒迭 失列克迭 失不格 帖木兒 失咧 木

貪る鷹の如き帖木眞

疊みあげたるもの、大針(帖別揑)を刺すに隙閒無き我が帖木眞(苔卜塔)安荅、貪る鷹の如く、かく涎垂れ來ぬるのみ。見たりや、汝等。乃蠻の眾は「忙豁勒を見ば、子羊の蹄皮も餘さじ」と云ひたりき。汝等見よ」と云へり。(親征錄に「汝等見案荅舉止英異乎。乃蠻語嘗有言「雖駁革去皮、猶貪不捨」豈能當之」と云へるは、こゝの語を譯〳〵て修飾を加へたるに似たれども、文は甚だ蹇拙なり。元史に「乃蠻初舉兵、視蒙古軍、若殺羸羔兒、意謂蹄皮亦不面。今吾觀其氣勢、殆非往時矣」とあるは、親征錄の文に似ず〳〵て、却て祕史の文に似たり。蓋元史のこの條は、親征錄に據らず〳〵て、大德七年に成れる太祖實錄に據りそのまゝに譯〳〵てあり〳〵なるべし。)この言につき、塔陽罕言はく「但畏山に登り立たん」と云ひて、山に登りて立ちけり。又塔陽罕は、札木合に問ふに、「又その後より厚く(大衆を率ゐて)來ぬるは、誰なる」と問へり。札木合言はく「訶額侖額客は、一

大蟒の如き拙赤合撒兒

人の子を人の肉にて養ひてありき。三尋の身あり、三歲の頭口を喫ひ、三重の甲を被て、三匹の强牛を拽きて來るぞ。箭筒(豁兒)ある人を都て(豁脫剌)を嚥むとも、喉(豁斡來)を碍へられず。全き男を呑むとも、心臟(斡咧)に障らず。怒れば、昂忽阿(古卜臣)(箭の名)の箭を拽きて放てば、山を越えてある(阿兀剌)十人(阿魯思)廿人の人(哈兒班)を穿つほどに射る。鬬ふ敵を(哈剛)(客咧勒都)嘖野を(客額兒)隔ててあるものを客亦不兒(客咧勒都)(箭の名)の箭を拽きて放てば、連ぬるほどに穿つほどに射る(明譯)將人連穿透(客勒乞)。大に拽きて射れば、九百尋(也孫札兀惕)の地に射る。減〳〵拽きて射れば、五百尋(也客迭)の地に射る。人人(塔斉札兀惕)(古溫古溫)より違ひ、古咧勒古(塔壇)(蟒の一種)なる蟒に生れたる拙赤合撒兒と

肝ある斡惕赤斤

札木合の心がはり

云はるゝは、彼なるぞ」と云ひき。それより塔陽罕言はく「但然あらば、山の高みを爭はん。上へ登れ」と云ひて、山に登り立てり。又塔陽罕は、札木合に問ふに「彼の後より來ぬるは、誰なる」と云ひき。札木合言はく「彼は、訶額侖額客の末の子斡惕赤斤、肝ありと云はるゝなり。早く睡り曉に起き、黑闇（巴噶安）よりも後れたること無く、立處（巴亦荅勒）よりも後れたること無し」と云ひき。塔陽罕言はく「然あらば、山の頂の上に上らん」と云ひけり。

札木合は、塔陽罕にこの言をかく言ふと、乃蠻より離れ、別れて出でて、成吉思合罕に報告を入れて遣るに、

乃蠻の潰敗

塔陽の虜はれ古出魯克の走り諸部落の降り

「安荅に言へ」とて言ひて遣るに「塔陽罕は、我が言に昏（兀格兀窟）みて、上り爭ひ驚きて上れり。口にて殺されて、怕れて山に登り上れり。安荅戒愼せよ。彼等は、山に上れり。この人どもは、逆ふる氣色なし。我こそは、乃蠻より離れたれ」と云ひて遣りき。成吉思合罕は、日晩になられて、納忽の崖の山を取卷き軍立〳〵て宿れり。その夜乃蠻は躲れ動かんとし、納忽の上より墜ちて、上に上に重なり合ひて、骨髮を碎き倒れ合ひて、爛木「の如く」立つまで壓〳〵合ひて死に合ひけり。その明朝塔陽罕を窮めて拿へたり。古出魯克罕は、別に居たるにより、僅の人にて背

き動きて、追驅けらるゝ時、塔米兒河に駐營〜けり。その團營を立てかれて、動きて走りて出でて去れり。乃蠻の民の部落を阿勒台山の前に窮めて收めたり。札木合と居たる札荅嚩、合塔斤、撒勒只兀惕、朶兒邊、泰赤兀惕、翁吉喇惕等、そこに又降れり。（元史は火力速八赤の言を叙べたる次に「太陽罕怒、卽躍馬索戰、帝以哈撒兒主中軍、時札木合從太陽罕來、見帝軍容整肅、謂左右曰云云、遂引所部兵遁去。是日帝與乃蠻軍大戰、至晡禽殺太陽罕、諸部軍一時皆潰、夜走絕險墜崖死者不可勝計、明日餘衆悉降。於是朶魯班塔塔兒哈荅斤散只兀四部亦來降」と云へり。これは、太祖實錄と親征錄卽ち聖武開天記とに本づきて、修飾を加へたるものにて、文は甚だ雅健なれども、事實は原本祕史と稍違へり。來降の部落の名にも誤りあり。塔塔兒の諸部は、前に已に殲滅せられたれば、この中に加はらざる方事實なるべし。）塔陽の母古兒別速を成吉思合罕は、伴れ來させて言はく「汝は、忙豁勒の氣息惡〜と云ひて居らざり〜か。今いかで來

古兒別速の召され

ぬる、汝」と云ひて、成吉思合罕は娶りけり。

その鼠の年秋、合喇荅勒忽札兀兒（合喇荅勒の源。親征錄）迭兒惡河源、別咧津塔兒河）に篾兒乞惕（親征錄蔑兒乞部、元史蔑里乞部）の脫黑脫阿別乞（親征錄元史脫脫）と成吉思合罕對陣〜て、脫黑脫阿を動かゝて、撒阿哩客額兒に彼の人民住具部落を虜へたり。（この撒阿哩原は、蒙古の舊庭の地と異なるに似たり。塞北には同名の地甚だ多し。親征錄には迭兒惡河源不剌納矮胡之地とあり。）脫黑脫阿は、忽都赤剌溫なる子どもと、僅の人にて、身を以て逃れて出でたり。かく篾兒乞惕の民虜へらるゝ時、豁阿思篾兒乞惕（卷二卷三の兀洼思篾兒乞惕、親征錄兀花思蔑兒乞部）の荅亦兒兀孫（親征錄元史）帶兒兀孫（親征錄忽蘭哈敦、元史后妃表忽蘭皇后）は、息女忽闌合屯を成吉思合罕に見せまつらんとて伴れ

篾兒乞惕の剿討

荅亦兒兀孫の女忽闌合屯の拜謁

て來ぬるに、路にて軍士どもに妨げられて、巴阿鄰の納牙那顏（卷五なる你出古惕巴阿鄰の納牙阿）に遇ひて、荅亦兒兀孫言く「この息女を成吉思合罕に見せまつらんとて來ぬ、我」と云ひき。そこに納牙那顏言く「汝の息女を我等俱に見せまつらん」とて止めけり。止むる時、荅亦兒兀孫に「汝獨にて往かば、路にて軍士ども亂るゝ時に、汝をも活さず、汝の息女をも亂すべし」と云ひて、三日三夜止めけり。そこより忽闌合敦と共に荅亦兒兀孫を率ゐて、共に納牙那顏は、成吉思合罕に致せり。それより成吉思合罕は、納牙に「いかんぞ妨げて居たる、汝」とて、甚だ怒りて、嚴〳〵仔

納牙阿の忠謹

細を問ひて、「法にあてん」とて問ひつゝある時、忽闌合敦言はく「納牙阿は言ひき。成吉思合罕の大官人なり、我は。我等俱に汝の息女を合罕に見せまつらん。路にて軍士ども亂さん」とて勸めけり。今納牙阿より別なる軍士どもに遇はば、亂に「又は」正に入りけんか（明譯若不遇著）。納牙留住呵、如今也不知如何）。この納牙阿に遇ひたるは、我等の幸となれり。今納牙阿を問ひ給ふに、合罕恩賜せば、上帝の命にて父母の生みたる皮膚を問ひ給はば」と奏さゝめけり。納牙阿は、問はるゝ時「合罕より外に我が面は「向ふこと」無くあるぞ。外國（合哩）の民の腮（合察兒）美〳〵き

女子妃（合屯合兒含）、臂節好き騮馬に遇へば、「大君（合罕）のもの「それ」も」と云ひて居り〳〵ぞ、我。これより外に我が心あらば、死なん、我」と云ひき。成吉思合罕は、忽闌合敦の言上を善〳〵と〳〵て、その日に便ち審べ試みれば、忽闌合敦の奏〳〵たるに違はず〳〵て、成吉思合罕は、忽闌合敦を恩賞〳〵て愛みたり。納牙阿の言違はず〳〵て、「成吉思合罕は」善〳〵と〳〵て、「實の言ある「人」なりき」と云ひ、「大なる勾當を委れん」とて恩賞せり。

成吉思汗實錄卷の七終り。

幹歌歹の妻となる朶咧格捏

峯の寨の攻撃

成吉思汗の長追

成吉思汗實錄卷の八。

篾兒乞惕の民を虜へて、脫黑脫阿別乞の大子忽都の合禿惕（合屯の複稱）禿該朶咧格捏二女より朶咧格捏（元史后妃表）脫列哥那六皇后、乃馬眞氏、追謚昭慈皇后）をそこに斡歌歹合罕（卷六の斡闊歹）に與へたり。篾兒乞惕の半の部衆反きて、峯の寨（蒙語台合勒豁兒合、語譯山頂寨子、文譯台合勒山寨、親征錄泰安寨、元史泰寒寨）に據りき。そこに成吉思合罕勅ありて、鎖兒罕失喇の子沈白（親征錄赤老溫拔都の弟闊拜）を官人と〳〵て、左手の軍にて、寨に據れる篾兒乞惕を攻めさせに遣りぬ。脫黑脫阿は、忽都赤剌溫なる子どもと共に、僅に身をもて背きて出でたるを、成吉思合罕追驅

額兒的失河不黑都兒麻河の解

けて、阿勒台山の前に冬籠〜て、牛の年（我が元久二年乙丑、宋の寧宗開禧元年、金の泰和五年、西紀一二〇五年、太祖四十四歳の時）春、阿喇嶺により越えて往けば、乃蠻の古出魯克罕は、部衆を取られて、かく背きて出てたるにより、僅の衆にて篾兒乞惕の脫黑脫阿と二人合ひて、額兒的失河の［濁水なる］不黑都兒麻河の源に會〜て、軍を整へて居りき。（額兒的失河は、親征錄元史太祖紀に也兒的石河、憲宗紀に葉兒的石河、武宗紀に也里的失河など見え、水道提綱には額勒濟斯河、西域水道記には額爾齊斯河、露西亞の地圖には伊兒齊斯河とあり。上流の二源を庫伊兒齊斯喀喇伊兒齊斯と云ふ。庫は黃、喀喇は黑なり。二水合ひたる後も、喀喇伊兒齊斯と云ふ。阿勒泰山の東南幹山の西南麓の諸水を合せて、齊桑諾爾に入り、諾爾より北に流れ出でてより伊兒齊斯河と云ふ。不黑都兒麻河は、西域水道記の布克圖爾瑪河にして、露西亞の地圖には布合塔兒瑪河とあり。科布多の西北なる阿勒泰山頂の西麓より出で、北緯四十九度の北を西に流れて、伊兒齊斯河に入る。蒙古地方より布合塔兒瑪の源に往くには、科布多河の上流なる索果克河の源より阿兒古特嶺の南端を踰ゆる路順なれば、阿喇嶺は、即ち阿兒古特嶺などの古名なるべし）

脫黑脫阿の戰死

成吉思合罕到りて對陣〜たれば、脫黑脫阿はそこに流箭に射られて倒れき。彼の子どもは、彼の骸を取りかれて、彼の身を持ちて去りかれて、彼の頭を斷ちて持ちて去りき。そこに乃蠻篾兒乞惕共に會〜て對陣する能はず〜て、逃れ動く時、額兒的失河を渡る時、溺れて多數を水に死なしめき。僅に出でたる乃蠻篾兒乞惕は、額兒的失河を渡り畢へて、離れ動きけり。乃蠻の古出魯克罕は、委兀兒台、（卷三なる畏忽惕また委兀惕、親征錄元史畏吾兒、唐の回紇の遺種にして、その都は、唐の北庭都護府の址なる別失八里城、今の濟木薩の稍北にあり、その地は、天山の南北に跨れり。布合塔兒瑪河の源より委兀兒の地に往くには、その河に沿ひて西に下らず〜て、喀喇喀巴河に沿ひ南に下りて、喀喇伊兒齊斯河を渡り、猶南に進みて、委兀兒の西境に入りたるなるべし。）合兒魯兀惕を過ぎて、（合兒

乃蠻の古出魯克罕の奔竄

魯兀惕は、親征錄元史本紀に哈剌魯、地理志に柯耳魯、卽ち唐書の葛邏祿に〜て、國は今の伊犁の西北にあり き、委〜くは卷十一に言ふべし。）撒兒荅兀勒の地に垂河に居る合喇乞荅惕の古兒罕に合ひに往きけり。篾兒乞惕の脫黑脫阿の子ども忽都、合惕、赤剌溫が頭となれる篾兒乞惕は、（忽都赤剌溫は、前に見えたり。忽都は、速不台の傳に豁都、土土哈の傳に火都とあり。合惕は、下文に合勒とあり。元史巴而朮阿而忒的斤の傳には「脫脫之子火都赤剌溫馬札兒禿薛干四人」とありて、合惕又は合勒に似たる名なし。元史類編に親征記を引きて、脫脫の四子の名を擧げたるは、巴而朮の傳と同ドけれども、今の親征錄には、只「脫脫之子四人」とありて、その名なし。洪鈞の別咧津を譯〜たるには、忽都赤剌溫、赤攸克、呼圖罕、蔑兒根とあり、その呼圖罕を多遜は庫圖罕と書けり。不咧惕撒乃迭兒は、別咧津を引きて、脫克塔の六子の名を擧げたるに、呼圖罕を呼勒圖罕と書けり。合惕は、呼圖罕又は庫圖罕の下略にて、下文の勒は誤寫ならんか。又は合勒は、呼勒圖罕の下略にて、こゝの惕は誤寫ならんか。）康鄰を欽察兀惕を過ぎ去りけり。（康里欽察の名は、元史に屢見えたり。康里は、漢代の康居の遺種にして、康克里とも康合里とも云ひ、阿喇勒湖の北、今の乞兒吉思曠野の地に居りし人種なり。欽察は、下文には正〜く乞卜察克ともあり、康里の西隣にて、今の露西亞の南部、佛兒戛河の左

蔑兒乞惕の誅滅

右に廣がり〜人種なり。）そこより成吉思合罕は回りて、阿啦嶺により越えて舊營に下馬せり。沈白は、峯の寨に據れる篾兒乞惕を窮めき。そこに篾兒乞惕をば、成吉思合罕勅あり、彼等の皆殺〜を殺さ〜めて、（皆殺〜を行はめての意なり。）彼等の殘れるをば軍士どもに虜へさせたり。又先に降りたる篾兒乞惕は、舊營より反き起りき。舊營に居たる我等の家人ども、彼等を敗りき。そこに成吉思合罕勅あるに「聚りて居らゝめんと云ひ〜に、彼等只反きけり」とて、篾兒乞惕を各に盡くるまで分けさせたり。

鐵車の勅

その牛の年、成吉思合罕勅ありて、速別額台を鐵の

搜討の暨

車にて（親征錄には以鐵裹車輪とあり、洪鈞は以鐵釘密布於車輪、庶行山路不易壞と譯せり。）脫黑脫阿の忽都、合勒、赤剌溫等なる子どもを追はゝめに遣る時、速別額台に成吉思合罕勅ありて宣らするには、脫黑脫阿の忽都、合勒、赤剌溫等なる子どもは、去り驚きて回り射合ひて、套竿を帶びたる野馬、箭に中れる鹿となりて去れり。（幹敦 幹黑札惕 合鄭 合兒不察）彼等を、翅あるものとなりて、飛びて天に上らば、汝速別額台は、海青となりて飛びて捕へずや。土撥鼠となりて爪にて爬ひて地に入らば、鍬となりて鑿りて尋ね追ひ上げずや。魚となりて騰吉思の海に入らば、汝速別額台は、旋網拖網となりて撈ひて收めて取らずや、

遠征の心得

汝。（何秋濤の朔方備乘に、この條の明譯文を約めて下の如く極めて簡古なる漢文に譯せり。）箋兒乞、吾深仇也。敗而遠遁、如馬帶竿、如鹿負箭。若飛、汝作鷹鸇。若入穴、汝作鋤。若入海、汝作網、與汝鐵車、以堅汝志。）又高き峠を越え、寬き河を渡りに遣りぬ、汝を。地の遠きを想ひて、軍の馬ども痩せざるに撫れ。糧を盡さざるに惜め。騸馬痩せ畢へば、撫るとも成らず。糧盡〻畢へば、惜むとも成らず。汝等の路に獸多くあるぞ。過ぎんと思ひて行く時は、軍の人を獸に勿走らせそ。限無く勿圍獵せそ。軍の人に糧を添へ櫓蓋となれとて圍獵せば、限りて圍獵せよ。（櫓蓋の蒙語汪格古、解り得ず。明譯に從へり。獸の皮にて作る天幕の屋なるべし。）限ある圍獵より外

は軍の人の鞍の鞦を勿繫けさせそ。轡を搭けず口を閊めず〜て行け。かく定め合ひて行けば、軍の人馬を驅ることいかで出來ん。かく定めて、便ち法度を越ゆるものを拿へて打て。我等の勅を越ゆるものを、我等に認めらるゝ如きものを、我等に與へておこせよ。我等に認められざるあまたをば、只そこに便ち斬ら〜めよ。河の木隨あなたに相離れん、汝等。只道理によりて行け。山のあなたに相別れん、汝等。外をば別に勿想ひそ。長生の上帝に力勢を添へられて、脫黑脫阿の子どもを手に入れば、我等に持ち來るまでも何あらん、そこに汝等棄てよ」

赦すべからざる深き讎

と勅ありき。速別額台に又成吉思合罕言へらく「汝を、出征せさするは、我小き時に、三つの篾兒乞惕の兀都亦惕に不兒罕合勒敦を三たび繞らせて怕れさせられたりき、我。かゝる讎ある民を「今又口舌を放ちて去りき。長兀兒き梢に深き底に到り合へよ（明譯我欲教你追到極處）」と。て、追はゝむる極端まで、鐵の車を造りて、牛の年出征せ〜めたり。我等を、背處にありても對面の如く、遠きにありても近きが如く思ひて行かば、上なる天帝にも祐護せられんぞ、汝等」と勅ありき。（この鐵車の勅は、卷十なる速別額台の篾兒乞惕を窮むる處に書くべきものなり。親征錄も喇失惕の史も、速別額台の鐵車の遠征をこの年より十二年後なる丁丑の年に載せたり。卷十なる速別額台の遠征は、年を掲げざれ

ども、卽ち丁丑の役なるべし。蒙古人は、年を繰るに、十二支の象のみを用ひて、十干を用ひざり〜故に、年紀誤り易し。祕史の作者は、この勅を牛の年と記憶〜たるに由り、偶誤りて十二年前の牛の年、卽ち太祖卽位の前年なる乙丑の年に載せたるなり。)

従士に捕はれたる札木合

[成吉思合罕は、]乃蠻、篾兒乞惕を窮め畢へたれば、札木合は、乃蠻と居りてそこに部衆を取られたれば、但五人の從者ある賊となりて、儻魯山(元史地理志の唐麓嶺、阿勒泰山の東北幹山なる今の湯努山)の上に上りて、羱羊を殺〜て燒きて喫ふ時、そこに札木合は、從者どもに言ひき。「誰が子どもぞ、この日羱羊を殺〜てかく喫へる」と云ひき。その羱羊の肉を喫ひ居る閒に、五人の從者は、札木合を手に掛けて捕へて、成吉思合罕の處に伴れ來ぬ。札木合は、從者どもに捕へて來られて、合罕安荅に白さく「黑き老鴉(合喇額)は、黑鴉眞鴉(合藍伯)を捕へたり。下郎(合剌出)の奴は、君(合罕)に手(合兒)を致〜たり。大君(合罕)なる我が安荅は、いかんぞ差らん。靑き忽剌都(鳥の類の一種の名)(孛嵯)は、孛兒臣莎那(鴫の一種の名)を捕ふると爲(孛勒)れり。奴(孛斡勒)なる家人は、本(不敦)の主を圍みて襲ひて捕ふると爲(孛勒)れり。賢き我が安荅は、いかんぞ差(孛莎)らん」と言へば、札木合のその言につき、成吉思合罕勅あるには「正主の君に手を致せる人をいかんぞ存らせられん。かゝる人は、誰にか伴とならん。正主の君に手を致せる人をば、その族に至るまで斬ら〜めよ」と勅ありき。すぐ札木合の面前にて、彼を手に掛けた

不忠の臣の誅せられ

舊友を憐む成吉思汗の寛厚

る人どもを斬らゝめて與へたり。成吉思合罕は、札木合に言へとて言はく「今我等二人合へり。伴とならん。片方の轅となり合ひて過ぎたれば、別になり離れんと思へり、汝。今一つに合ひ住みて、忘れたるを心附け合ひて、睡りたるを覺ゝ合ひて住まん。別れて外に行けども、福あり吉事ある我が安荅なりき。實に死合ふ(戰ふ)日には、心を痛めたりき、汝。外に別れて行けども、殺ゝ合ふ日には、肺心を痛めたりき、汝。いつと云へば、客咧亦惕の民と合刺合勒只惕の沙漠に戰へる時、王罕なる父に言へる言を告げておこせたるは、汝の恩なるぞ。又乃蠻

幹額咧 兀馬兒塔 幹額兒迷赤運 幹咧額列 兀都兒 兀忽勒都 兀年 幹咧 阿刺勒都 昂吉荅 兀勒澤 稔塔 阿兀失吉

札木合の慚悔

の民を言にて死なゝめ、口にて殺ゝて怕れさせたるを比較せよと云ひて、報告を汝のおこせたるは、恩となりゝぞ」と

言へば、札木合言はく「先の日小き時に、豁兒豁納黑主不兒に罕安荅と共に安荅と云ひ合へる時、消化れざる食物を食ひ合ひて、忘られざる言を言ひ合ひて、衾を分け合ひて住まれゝぞ。傍の人に唆されて、横の人に獵かれて、離れ畢へて、緊要ある言を言ひ合へり(言ひ合へるを守らず)とて、黑き面皮を剝がれたるより、近づきかれ、罕なる安荅を暖かき顏を見る能はずゝて行きたるぞ、我。忘ら

款多列都 闊乞兀勒迭 合勒只兒忽 合合源 合咧 合兀勒荅 合里敦 合咧溫 合荅合 兀馬兒塔

れざる言を言ひ合へりとて、赤き面皮を剝かれたるよ（兀格思　兀古列勒都　忽剌安　兀卜赤克迭）り、長き心ある安荅を誠の顏を見る能はず〜て行き（兀兒禿　兀年　兀匪）たるぞ、我。今我が罕安荅恩賜〜て、我を伴とせんと云ひき。伴となるべき時に、伴とならざりき、我。今安荅は、

思の外に潔き姦雄の末路

圓なる國を平げたり。外國どもを併せたり、爾。罕の位（脫歇里該　合哩　合尧惕合）は、爾に定れり。天下今定になれる時、伴となりて何の助とならん、我。却て安荅の黑き夜の夢に入らん、我。明き日に爾の心を苦めん、我。爾の領の蝨、爾の底襟の刺とならん、我。寬厚なる嫗あるなりき、我。安荅より攜れんと思へる頃に病になられたりき、我。今この生涯に、安荅（阿兒賓　阿勒只阿思　札合　札兒温　阿魯昔）

命を知り命に安ずたる札木合の善言

我二人の關係に由りて出づる日より沒る日に至るまで我が名は到りたるぞ。安荅は、賢明なる母あり、生得俊傑に生れて技能ある弟どもあり、勇猛なる侍に七十三の騸馬にて侍はるゝこと」となりて、「我は」安荅に勝たれたるぞ。我は、母父より幼くて後れて、弟ども無く、我が妻は話好き（蒙語　朶抹黑赤、どもりくち吃口には非ず、我等の幹沙別哩、周詩の謂はゆる婦有長舌、維厲之階）にて、賴なき從者あり、かるが故に上帝より命ある安荅に勝たれたるぞ。安荅恩賜せば、我を疾く逝なせば、安荅心を安めんぞ、爾。安荅恩賜〜て殺さ〜むるには、血を出さず殺さ〜めよ。（血を出さず殺すとは、首を斬らず、袋に入れて絞め殺すことを云ふ。絞めらるゝは、斬らるゝよりも苦しか

るべけれども、首の離れざるを幸とするなり。蒙古の俗に、皇族の罪ある者を殺すには、多くこの特典を用ひたり。）死にて臥さば、

我が死骸は高き地にて永く遠く爾の子孫の子孫に至るまで護りて與へん。幸はふる［鬼］となるぞ、我。根原の別なる生殖あるものなりき、我。（札荅嗣氏は、孛端察兒の裔に非ず、孛兒只斤氏と異なるが故に、根原異なりと云へり。）許多の生殖ある安荅の威靈に壓されたるぞ、我。

情あり義あり禮ある處分

我が言へる言を忘れず、晩く早く想ひて語り合へ。今我を疾くせよ」と言へば、これに依り彼の言に成吉思合罕言へらく「我が安荅は、外に行きても、我等を口一杯に謂ひ（譏り）て命に害を彼の考へたることを聞かざりゝぞ。學ばるゝ人なりき。［然れども］彼肯かず（明譯）是可以

學的人、他不肯活、待教他死）。死なゝめんと云へば。卦に入らず。（已むを得ず殺さんとて占ふすれば、殺すべゝと云ふこと、卦に現れず。蒙韃備錄に凡占ト、吉凶進退殺伐、每用羊骨、扇以鐵椎火椎之、看其兆坼、以決大事、類龜ト也と云ひ、黑韃事略に其占筮、則灼羊之枚子骨、驗其文理之逆順、而辨其吉凶、天棄天予、一決於此、信之甚篤、謂之燒琵琶、事無纖粟必占、占不再四不已と云へるは、蒙古のト法なり。耶律楚材の傳にも帝每征討、必命楚材ト、帝亦自灼羊胛、以相符應とあり。）理由なく命に害を爲さば善からじ。重き道理ある人なり。この必ず（このは理由に、必ずは言へに掛かる。）彼の［殺さるべき］理由を言へ。［前に］捌只荅兒馬刺、台察兒二人の馬羣を奪ひ合ひたる故に、札木合安荅、汝は、直に敵對ゝて來て、荅闌巴勒主惕に戰ひて、者咧揑の隘に追ひ入れて、我をそこに怕れゝめざりゝか、汝。今伴とならんと云へば、肯かず、汝の命を愛め

ば、從はざりき、汝」と言へ。「今汝の言により、血を出さず逝なせん」と言へ」と云ひて、「血を出さず逝なせて、彼の骨を面前に勿棄てそ。善きに取れ」と勅ありき。札木合をそこに逝なせて、彼の骨を取らゝめたり(明譯仍以禮厚葬了)。

幹難河の源なる二たびの卽位九脚の白纛

かく毛氈の帳裙ある國民を平げて、虎の年(我が土御門天皇建永元年丙寅、宋の寧宗開禧二年、金の泰和六年、西紀一二〇六年、太祖四十五歳の時)、幹難河の源に聚會ゝて、九つの脚ある白き纛を立てて、(親征錄元史みな九斿の白旗とあり、喇失惕を洪鈞の重譯ゝたるにも九脚の白旗とあれども、洪鈞は之を打消ゝて「白き馬の尾九つを旄纛とせるにて、旗に非ず」と云へり。脚とは、白旄の垂れたるを云へるにて、斿に非ず。蒙古源流に、九人の烏爾魯克卽ち九猛將の稱ありて、親軍九隊の帥を云へり。訶渥兒斯は、これに依りて「大なる纛を建て、白旄九つを重ねて繫けて、九烏爾魯克を表ゝたるなり」と云へり。されども九烏爾魯克の稱は、他の書に更に見えざれば、信ど難し。阿不勒哷自の書に「蒙古は九の數を尙ぶが故に、贈物にも九を用ふ。その制は、突兒克より出でたり」とあれば、白旄の九つなるも、たゞめでたき數を用ひたるなるべし。)

二次卽位の考證

成吉思合罕に罕の號をそこに奉れり。(これにて成吉思汗は、二たび合罕の位に陞れり。元史本紀に「元年丙寅、帝大會諸王羣臣、建九斿白旗、卽皇帝位於幹難河之源、諸王羣臣、共上尊號曰成吉思皇帝」とあり。錢大昕の秘史の跋に「當太祖幼時、勢甚微弱、賴王罕札木合二人、假以徒衆、羽翼漸成、始立名號、紀但云丙寅歳、羣臣上尊號曰成吉思皇帝、不知成吉思罕之號、蓋已久矣、其後遣使詣責、案彈火察兒等、謂昔者吾國無主、汝等推戴吾爲之主、者正指此事也。先稱合罕者、一部之主、後稱皇帝、乃爲羣部之主、豈可略稱罕一節而不書乎」と云へるは、洵に卓見なり。但錢氏は、前後の名號を合罕と皇帝とに分けたれども、この丙寅の卽位も皇帝と稱ゝたるにはあらで、前と同ゝく合罕と云へるなり。親征錄元史のみならず、宋人の記錄などにも、成吉思皇帝とあるは、當時蒙古に仕へたる漢臣等の漢譯ゝたるに本づきたるにて、蒙古にて〜か稱ゝたるには非ず。先後の合罕の異なる所は、先には蒙古部の主となり、今は迭列該(天下)の主、卽ち眞の合木渾合罕となれるなり。すべて創業開國の君にゝて二たび卽位の禮を行へるは、珍〜き事に非ず。晉の代の羣雄には、初に天王の位に卽き、後に皇帝の位に卽きたる人甚だ多し。後魏の道武帝は、初に魏王と稱し、登國と建元し、後に皇帝となれり。遼の太祖は、初に契丹可汗の位を嗣ぎ、後に天皇王となりて神冊と建元せり。清の太祖は、初に金國汗の位に卽き、天命と建元

し、太宗その位を繼ぎ、天聰と改元し、後に大清國皇帝となりて、崇德と改元せり。これらは、みな初に小國の主となり、後に大國の主となれるにて、成吉思汗の二たびの卽位もその類なり。また初の卽位は、合罕とは稱すれども、金朝に貢賦を納め、金の封爵を榮とし、小國の主なることを自らも認め居れども、後の卽位に至りては、天下の主となれる積りなれば、元史にこの寅の年を太祖の元年と立てたるは、至當の事なり。されども建元と云ふ事は、蒙古人の知れることに非ず。この寅の年より後も、祕史と喇失惕の史とは、十二支の象を用ひ、親征錄は、甲子を用ひて、元年二年など云へることなし。黑韃事略に「其正朔、昔用十二支辰之象、今用六甲輪流」皆漢人契丹女眞敎之。若韃之本俗、初不理會得。只是草靑、則爲一年、新月初生、則爲一月、人問其庚甲若干、則倒指而數幾靑草」と云へり。彭大雅のこの書を著せるは、太宗の時なるに、その言猶かくの如くなれば、太祖の朝に建元の事なきことは知るべく、この年を太祖の元年と名づけたるは、後の世に、大方は世祖の朝に、追定したる事なるべし。また蒙古源流に「戊戌年、特穆津年十七歲、布爾德哈屯甫十三歲、遂爾匹配。特穆津年至二十八歲、次己酉、于克魯倫河北郊卽汗位、稱索多博克達靑吉斯汗」とあり。孛兒帖を娶れる年と初の卽位の年とにつきては、源流の外に據るべきものなし。孛兒帖の十三歲は、祕史に「帖木眞より一歲大きく」とあるに違へれども、帖木眞十七歲の初婚は、蒙古の早婚の風俗にしては事實なるべし。克魯倫河の北郊とは、不兒罕嶽の前なる桑古兒小河の舊營を云へるなれば、この卽位は、初の卽位にして、斡難河の源の大會に非ざること論なし。源流の敍事は荒誕の說に富みて、その紀年も誤り多けれども、この二事だけは、幸に祕史の闕漏を補ふに足れ

太祖建元の追定

太祖の初婚初立の年

木合黎の王號

り。然るを洪鈞の「源流固爲囈語、祕史亦屬妄談」と云へるは、何たる放言ぞや。）

木合黎に國王の號をそこに又賜ひたり。

（國號無しの王爵なり。元史木華黎の傳に「丁丑八月、詔封太師國王、承制行事、贈誓券黃金印、曰子孫傳國、世世不絕」とあり。丁丑は、太祖十二年なり。親征錄蒙古集史は、皆十三年戊寅の事とすれば、修正祕史に然あり〳〵にて、原本祕史の作者は、こゝにても虎の年を十二年前のに誤れるに似たり。然れども元史百官志に「太祖十二年、以國王置太師一員」とあるは、國王は前よりありて、それをその年に太師に〳〵たるが如くも聞ゆれば、修正祕史は却て誤りて十二年後の虎の年と〳〵たるも知るべからず。）

者別の西征

佐命の功臣

蒙力克

者別を、乃蠻の古出魯克罕を追はしめに、そこに又出征せしめたり。忙豁勒の國を定め畢へて、成吉思合罕勅あるには、國を立て合ひ行ひ合ひたる者（諸共に國を立て事を共に〳〵たる者）には、千を千と〳〵して、千戶の官人を任〳〵て、恩賜の言を言はん」と勅ありき。千戶の官人を任〳〵名ざせるは、蒙力克額赤格（晃豁壇氏、察喇合額不干の子、卷一より見えたり。親征錄には蔑力也赤可とあ

孛斡兒出
木合黎
豁兒赤
亦魯該
主兒扯歹
忽難
忽必來
者勒篾
禿格
迭該
脫欒

り、元史忠義傳には伯八の祖父、明里也赤哥、晃合丹氏とあり。）**孛斡兒出**（阿嚕剌惕氏、納忽伯顏の子、四傑の一人、卷二より見えたり。元史本傳に、博爾朮、阿兒剌氏、納忽阿兒闌の子とあり、蒙古源流には阿爾拉特の博郭爾濟諸顏とあり。）**木合黎國王**（札剌亦兒氏、帖列格禿伯顏の孫、古溫兀阿の子、四傑の一人、卷四より見えたり。元史本傳に木華黎、札剌兒氏、孔溫窟阿の子とあり、蒙古源流に札拉伊爾の摩和賚とあり。）**豁兒赤**（即ち豁兒赤兀孫、額不干、巴阿嘲氏、卷三より見えたり。）**亦魯該**（功臣の第五に列する程なれば名高き人なるべきに、他の書に見えざるは訝し。又札剌亦兒の阿兒孩合撒兒は功勞多き人なるに、功臣の中に見えざるも訝し。卷十に阿兒孩合撒兒を阿兒孩とのみ書き、親征錄元史本紀にも阿里海とあるを見れば、この亦魯該は、阿兒孩の誤りにあらずやと思はる。蒙古字にては、アとイと形混らはしく、カイとガイとも誤り易し。）**主兒扯歹**（兀嚕兀惕氏、卷四より見え、濁水の誓に與れり。元史本傳に朮赤台、兀魯兀台氏とあり。）**忽難**（格你格思氏、卷三に見えたり。）**忽必來**（巴嚕剌思氏、四狗の一人、卷三より見えたり。親征錄元史太祖紀には虎必來とあり。）**者勒篾**（兀哷罕氏、札兒赤兀歹額不堅の子、四狗の一人、卷二より見えたり。親征錄元史太祖紀には折里麥、忙哥撒兒の傳には兀良罕哲里馬、蒙古源流には烏梁庫特の濟勒墨とあり。）**禿格**（即ち統格、札剌亦兒氏、帖列格禿伯顏の孫、赤剌溫孩赤の子、木合黎の從弟、卷四に見えたり。）**迭該**（別速惕氏、卷三より見えたり。）**脫欒**（即ち脫侖扯兒必、晃豁壇氏、蒙力克額赤格の子、卷七に見えたり。元史忠義傳に伯八の父、脫倫闊里必、

汪古兒
出勒格台
孛囉忽勒
失吉忽禿忽
古出
闊闊出
豁兒豁孫
許孫
忽亦勒荅兒
失魯孩

晃合丹氏、明里也赤哥の子とあり。）**汪古兒**（即ち翁古兒、乞顏氏、巴兒壇巴阿禿兒の孫、蒙格禿乞顏の子、卷三より見え、親征錄に雍古兒寶兒赤とあり。）**出勒格台**（即ち赤勒古台、速勒都思氏、卷三に見えたり。）**孛囉忽勒**（即ち孛囉兀勒、宣懿太后の養子、四傑の一人、卷四より見えたり。元史本傳に、博爾忽、許兀愼氏とあり。錢大昕の考異に「元明善の洪陽忠武王の碑には許愼氏に作り、孛朮魯翀の河南淮北蒙古軍都萬戶府の增修公廨の碑には旭申氏に作れり」と云ひ、輟耕錄の蒙古七十二氏の中には忽神と書けり。その名も、太祖紀に博羅渾、孛羅歡、鉢魯完など書き、蒙古源流には烏古新の博維郭勒とあり。）**失吉忽禿忽**（即ち失乞刊忽都忽、塔塔兒の人、宣懿太后の養子、卷四より見えたり。親征錄には忽都忽那顏、蒙古源流には塔塔爾の錫吉呼圖克とあり。）**古出**（即ち曲出、篾兒乞惕の人、宣懿太后の養子、卷三より見えたり。）**闊闊出**（別速惕氏、宣懿太后の養子、卷三より見えたり。）**豁兒豁孫**（卷十に豁兒合孫とあり。元史撒吉思の傳に火魯和孫とあるは、この人なり。）**許孫**（元史列傳に哈散納、怯烈亦氏と云ひて、濁水の誓に與れる人あり、その文は卷六の注に引けり。許孫は、哈散と轉じ、竟に哈撒納となれるなるべし。）**忽亦勒荅兒**（即ち忽余勒荅兒、忙忽惕氏、卷四より見え、元史本傳に畏荅兒、忙兀氏、畏翼の弟とあり、食貨志に慍里荅兒薛禪ともあり。合剌合勒只惕の戰に傷を負ひて已に死にたれば、このたびの任命は、贈官にして、卷九なる勅語に依れば、千戶の職はその子孫に襲がせたるなり。）**失魯孩**（元史麥里の傳に「麥里、徹兀臺氏。祖雪里堅那顏、從太祖與王罕戰、同飲班眞河

者台
塔孩
察合安豁阿
阿剌黑
鎖兒罕失喇
不魯罕
合喇察兒
闊可搠思
速亦客禿

水、以功授千戸」とある雪里堅）**者台**（卽ち哲台、忙忽惕氏、卷三より見えたり、卷三なる帖木眞卽位の條に哲台多豁勒忽徹兒必兒は、この失魯孩の轉なるべし。）弟二人箭筒を帶べりとあるは、哲台徹兒必多豁勒忽徹兒必二人と云ふべきを略きたるなり。その後文に多歹扯兒必は奴婢を統ぶとあるは、別なる人の如く聞ゆれども、卷七なる扯兒必六人任命の處に朶歹扯兒必多豁勒忽扯兒必と連書〳〵てその後哲台の名見えざれば、多歹朶歹は卽ち哲台なるべし。）**塔孩**（卽ち塔乞、速勒都思氏、亦勒古台の弟、卷三より見え、元史阿塔海の傳に「阿塔海、遜都思人、祖塔海拔都兒、驍勇善戰、嘗從太祖同飲黑河水、以功爲千戸」とあり。）**察合安豁阿**（卽捏兀歹察合安兀洼、捏兀思氏、又赤那思氏、卷三より見え、荅闌巴勒主惕の子、納嚕戰に死にたり。これも贈官に〳〵て、卷八なる勅語に依れば、その子納嚕脫斡哩兒にその職を襲がせたるなり。）**阿剌黑**（你出古惕巴阿嚕氏、失兒古額禿額不堅の子、卷五に見え、元史伯顏の傳に「伯顏、蒙古八隣部人、曾祖述律哥圖、事太祖、爲八隣部左千戸、祖阿剌、襲父職、兼斷事官」とあり。）**鎖兒罕失喇**（速勒都思氏、四傑の一人なる赤老溫の父、卷二より見え、蒙古源流に蘇勒都斯の托爾干沙喇とあり。九十五の千戸の中に赤老溫の名見えざるは、その父猶存〳〵て、現に千戸となれるが爲ならん。）**不魯罕**（元史忽林失の傳に「忽林失、八魯剌解氏、曾祖不魯罕罕劄、事太祖、從平諸國、充八魯剌思千戸」とあり。罕劄は、一種の稱號なるべし。その義は、考へ得ず。）**合喇察兒**（巴嚕剌思氏、速忽薛禪の子、卷三にも見え、卷十にも見ゆ。）**闊可搠思**（卽ち闊闊搠思、巴阿嚕氏、卷三に見え、卷十に闊客搠思ともあり。）**速**

乃牙阿
冢率
古出古兒
巴剌斡囉納
荅亦兒
木格
不只兒

亦客禿（卽ち雪亦客禿徹兒必、晃豁壇氏、卷三より見えたり。）**乃牙阿**（卽ち納牙阿、你出古惕巴阿嚕氏、失兒古額禿額不堅の子、阿剌黑の弟、卷五に見え。）**冢率**（卽ち種索、卷三に見えたり。卷三の譯文には種篩とあり。卷十には種賽とあり。）**古出古兒**（卽ち窟出古兒、別速惕氏、迭該の弟、卷三に見えたり。卷九の勅語に依れば、古出古兒は、札荅喇惕の木勒合勒忽と二人にて一つの千戸となれるなり。）**巴剌斡囉納兒台**（札剌亦兒の巴剌に別たんが爲に、姓を加へたり。錢大昕の元史氏族表に、元統癸酉進士錄を引きて、濮州の蒙古軍戸なる買閭は、斡羅台氏にして、その曾祖八郎は、千戸となれりとあり。八郎は卽ち巴剌、斡羅台は、卽ち斡囉納兒台なり。）**荅亦兒**（兀洼思篾兒乞惕の荅亦兒兀孫、卷二より見えたり。豁兒赤兀孫も、只豁兒赤とのみも云へば、荅亦兒兀孫とも云へるなるべし。初は敵なれども、女忽闌合屯を獻じて寵せられたる故に、外戚を以て功臣の列に入りたるならん。親征錄には、兀花思蔑兒乞部長帶兒兀孫、已に降りて復叛き、闘拜等に討ち平げられたりとあれども、祕史には荅亦兒の叛けること見えず、叛けるものは、篾兒乞惕の他の部衆なり。又喇失惕額丁の部族考に客咧亦惕の人荅亦兒あれども、この荅亦兒とは異なり。）**木格**（卷十に蒙客とあり。元史孛蘭奚の傳に「孛蘭奚、雍吉烈氏、世居應昌、祖忙哥、以后族備太祖宿衞」とある翁吉喇惕の忙哥なるべし。）**不只兒**（元史に布智兒と書きて、短傳あり。蒙古の脫脫里台氏、紐兒傑拔都の子にして、父子ともに太祖に事ふと云へり。脫脫里台も塔塔兒なるべし。憲宗紀に憲宗卽位の初「以牙剌瓦赤不只兒某某等充燕京等處行尙書省事」とあ

る不只兒は、卽ちこの人にして、本傳には「憲宗以布智兒爲大都行天下諸路也可札魯忽赤、印造寶鈔」とあり。大都は卽燕京、札魯忽赤は斷事官なり。世祖紀に「憲宗令斷事官牙老瓦赤與不只兒等、總天下財賦于燕」とありて、不只兒等の濫刑を世祖の責めたることを記せり。昔里鈐部、布魯海牙、月乃合三人の傳には皆卜只兒と書けり。）

蒙古兀兒（卷十に蒙客兀兒とあり。）

朶羅阿歹（外には見えず。）

孛堅（元史忽都の傳に「忽都、蒙古兀羅帶氏、父孛罕事太祖備宿衛云云」とある孛罕なるべし。兀羅帶氏は、輟耕錄に兀羅歹とあり。）

忽都思（巴嚕剌思氏、忽必來の弟、卷三に見え、卷七には忽都思合勒瀑とあり。）

馬喇勒（外には見えず。）

者卜客（札剌亦兒氏、帖列格禿伯顏の子、古溫兀阿の弟、卷四に見え、卷十にも見ゆ。卷四には「者卜客を合撒兒に與へたり」と云ひ、親征錄に犍河の會の前に、哈撒兒その麾下哲不哥の計に從ひ、弘吉剌部を掠めて、太祖に深く責められたりとあり。）

余嚕罕（元史奧魯赤の傳に祖朔魯罕とある人か。朔魯罕は、札剌亦兒の人にて、父豁火察と共に太祖に事へ、朔魯罕は、後に野狐嶺の戰に戰死せり。）

闊闊（元史に箕兒乞惕より降附せる闊闊の傳あれども、世祖の時卒して年僅に四十とあれば、この闊闊には非ず。闊闊不花の不花を略きたるにもあるまじ。元史に「闊闊不花者、按攤脫脫里氏、爲人魁岸有膂力、以善射知名」とありて、太祖太宗に事へて戰功多く、その殺を嗜まざるは、塔塔兒人などに珍しき人なり。）

者別（別速惕氏、四狗の一人、卷四より見えたり。蒙古源流には伊蘇特の哲伯諾顏とあり。元史には紀傳處處にその名見ゆれども、專傳なし。洪鈞の哲別補傳甚だ佳し。）

兀都台

巴剌扯兒必（卷三に見えたり。西征の役に印度に入りたるはこの巴剌扯兒必（卽札剌亦兒の巴剌、薛扯朶抹黑の子、阿兒孩合撒兒の弟、外には見えず。）

客帖（卷十に見ゆ。）

速別額台（兀哷罕氏、四狗の一人、卷三より見えたり。元史速不台の傳には、兀良合氏、合赤溫の孫、哈班の子、忽魯渾の弟とあり。蒙古源流には、珠爾濟特の蘇伯格特依とあり。）

蒙可哈勒札（忙忽惕氏、忽亦勒荅兒の子なり。元史畏荅兒の傳に、其子忙哥剌とあり。哈勒札は、一種の稱號にして、元史忽林失の傳なる不魯罕罕劄の罕劄に同じ。親征錄の忙兀部、木哥漢札、太宗紀の蒙古漢札、別咧津の譯せる木勒格哈兒札は、みな蒙可哈勒札の異文なり。）

忽兒察忽思（外には見えず。）

苟吉（卷十二に官人掌吉と云ふ人あり。苟は、掌の誤寫にはあらずや。）

巴歹（卷一にその名見え、その事は卷五に見えたり。親征錄元史本紀には把帶、木華黎の傳には拔台とあり。親征錄元史は、乞失里黑の弟とすれども、他の書は皆只同僚とせり。巴歹の姓は、知るべからず。）

乞失里黑（斡囉納兒氏、卷一に巴歹と共にその名見え、その事は卷五にあり。輟耕錄元史哈剌哈孫の傳に啓昔禮、長春の西游記に吉息利荅剌汗とあり。親征錄元史本紀の乞力失は、乞失力の誤りなり。）

客台（兀嚕兀惕氏、主兒扯歹の子、親征錄元史兀赤台の傳に怯台、太祖紀に可忒、郝和尙拔都の傳に郡王迄忒、黑韃事略に紇忒郡王とあり。）

察兀兒孩（卽ち察兀兒罕、兀哷罕氏、札兒赤兀歹額不堅の子、者勒篾の弟、卷三に見え、卷六には察忽兒罕、親征錄には抄兒寒とあり、卷十にも見ゆ。）

翁吉嚩（外には見えず。）

脫歡（四傑の一人なる孛囉忽

帖木兒
篾格禿
合荅安
抹囉合
朶哩不合
亦都合歹
失喇忽勒
倒溫
塔馬赤
合兀嚕
阿勒赤

勒の子にはあらずや、元史に「博爾忽、許兀愼氏、事太祖、爲第一千戶、歿於敵、子脫歡襲職」とありて、脫歡の千戶となれるは、孛囉忽勒の戰死〜たる後の事なるが如くなれども、博爾忽の傳は、疏略の最甚〜きものなれば、脫歡を襲職と書きたるも、誤りな〜とは定むべからず。）**帖木兒**（多遜の史に、庫余克汗（定宗）の崩ドたるのち、阿勒塔克山に諸王の聚會〜たる時、皇后兀古勒該米失より喀喇闊魯木の總管たり〜帖木兒を遣りて會議に預ら〜めたりとあるは、この帖木兒なるべ〜。）**篾格禿**（卷十二に「蒙格禿とある人ならん、元史別兒怯不花の傳に「曾祖忙怯禿、以千戶從憲宗南征有功」とある人も、これら〜けれども、時代違へり。）**合荅安**（卷三卷六に見え、卷十二にも見ゆ。）**抹囉合**（外には見えず。）**朶哩不合**（卷十に朶兒別惕の朶兒伯多黑申、元史に朶魯伯とある人は、この名に稍似たれども、いかゞ。）**亦都合歹**（卷十に亦多忽歹とあり。）**失喇忽勒**（客咧亦惕氏、元史也先不花の傳に「也先不花、蒙古怯烈氏、祖曰失剌斡忽勒、兄弟四人、長曰脫不花、次曰怯烈哥、季曰哈剌阿忽剌、方太祖微時、怯烈哥已深自結納、後兄弟四人、皆率部屬來歸、太祖以舊好遇之、特異他族、命爲必闍赤長、朝會燕饗、使居上列」とあり、失剌斡忽勒は、卽ちこの失喇忽勒なり、功臣の中に怯烈哥の見えざるは、早く死にたるなるべ〜。）**倒溫、塔馬赤、合兀嚕**（この三人も、外に見えず。）**阿勒赤**（元史速不台の傳に神將阿里出とあるは、この人なるべ〜。この阿里出は、憲宗紀に、憲宗卽位の時、葉孫脫按只解、暢吉爪難、合荅、曲憐等と同じく「務持兩端、坐誘諸王、爲亂、並伏誅」とあり。）**脫撒合**（桑昆の子、禿撒合と音近けれども、彼にはあるまじ。）**統灰歹**（これも分らず。元史列傳に「鎭海、怯烈台氏、初以軍伍長從太祖、同飲班朱尼河水、與諸王百官大會兀難河、上太祖尊號、曰成吉思皇帝」とあれば、鎭海は功臣に列すべき人なるに、見えず。この人は、本田姓なりとの說もありて、長春の西游記に田鎭海と云へり、これに依りて强ひて考ふるに、本統灰歹と云ひ〜を、漢字に寫〜て田姓に配せんが爲に鎭海と改めたるにあらずや。）**脫不合**（客咧亦惕氏、失喇忽勒の兄なり。前に引ける也先不花の傳に見ゆ。）**阿只乃**（元史列傳の按竺邇と音似たれども、按竺邇は、汪古惕氏にして、世世雲中に居り、父熙公は金の羣牧使となり、辛未の歲、その牧せる馬を驅りて太祖に歸〜たりとありて、辛未は、この年より五年後なれば、この阿只乃に非ず。太祖に從ひ、黑河の水を飲み、元史に傳ある斡魯納台の阿朮魯も、阿只乃と音やゝ近〜。）**禿亦迭格兒**（これも分らず。）**薛潮兀兒**（卽ち薛赤兀兒、豁囉剌思氏、卷三に見えたり。元史曷思麥兒の傳に「命與薛徹兀兒爲必闍赤」とある薛徹兀兒も、この薛潮兀兒なるべ〜。）**者迭兒**（卷六の初に、卯溫都兒山の前を過ぐる王罕の軍を見出〜たる馬飼牙的兒、親征錄に也迭兒とある人と名甚だ似たり。）**斡剌兒古咧堅**（古咧堅は、駙馬なり。この駙馬の名、考へ得ず。）**輕吉牙歹**（斡勒忽訥兀惕氏、古溫兀阿の子、木合黎の弟、卷四に見え、親征錄には不花とあり、蒙韃備錄に「元勳、乃成吉思太師國王、沒黑肋者、小名也、云云、弟二人、長曰抹歌、見在成吉思處、爲護衛、次曰帶孫郡王、

毎隨侍焉」とあり。抹歌は、卽ちこの不合なり、元史木華黎の傳には、曾孫ありて不合な〳〵。不合の駙馬となれるを見れば、元明善の東平忠憲王の碑に「親連天家、世不婚姻」と云へるは、誤れり。札剌亦兒は、孛兒只斤の同族に非ず。）

忽哩勒

阿失黑駙馬

合歹駙馬

赤古駙馬

忽哩勒（斡難河の戰に泰赤兀惕その皇室と婚〳〵たる人少きは、他に故ある事なるべし。）の一將、親征錄に忽憐、喇失惕の史に忽哩勒巴哈都兒と云ひて、戰敗れて乃蠻に奔れる人と名同じけれども、蒙古の功臣に列することはあるまじ。憲宗の元年に前の阿勒赤卽ち阿里出等と同じく、諸王を誘ひて亂を爲せりとて誅せられたる曲憐は、この忽哩勒なるべし。）

阿失黑古咧堅（元史公主表延安公主位の處に「火魯該阿失黑の管する阿荅兒斤云云とあれば、阿失黑は、速勒都思の塔該と同族なるべし。）

合歹古咧堅（元史公主表延安公主位の處に「火魯公主、適哈荅駙馬」とある哈荅なるべし。親征錄癸酉南征の役に「怯台哈台二將圍中都」とありて、その怯台は、兀嚕兀惕の客台にして、哈台はこの合歹なり。また本書卷十二太宗の時に、合歹は、宿衞の番直の官人八人の中に加はれり。また多遜の史に、庫余克汗（定宗）疾ありて、政事は大臣鎮海喀荅克二人に委ねたりしが、忙古汗（憲宗）卽位の初、諸王叛を謀りて黨與の誅せられしも、諸王を亂に誘へりとて誅せられし、諸臣の內に合荅あり。合荅は、卽ち哈荅にて、又卽ち合歹なるべし。火魯公主は、公主表に誰の女とも云はず。食貨志に大雷公主と云ふ人あり。錢大昕の考異に「大當作火、卽火魯也」と云へり。）

赤古駙馬

古咧堅（親征錄赤渠駙馬、元史太祖紀駙馬赤駒、太宗紀駙馬赤苦。公主表鄆國公主位の處に「禿滿倫公主、適赤窟駙馬」とありて、何帝の女とも何姓の人とも云はざれども、喇失惕額丁の史には、太祖の第四の女禿馬侖は、翁吉喇惕の阿勒赤那顏の子赤古兒干に嫁ぎたりと云へり。阿勒赤は、德薛禪の子、光獻皇后の弟、元史に國舅按陳那顏と云へる人にして、赤古は、按陳の長子、斡陳納陳等の兄なるべし。又蒙韃備錄に「三公主曰阿五、嫁尙書令國舅之子」と云ひて、その尙書令のことは「按赤那邪、見封尙書令、爲成吉思正后之弟」とあれば、太祖の女にして阿勒赤の子に嫁ぎたるものあるを證すべし。洪鈞曰く「特薛禪傳、但言按陳子斡陳、尙容宗女、必是史官失載。阿五異名無考、或備錄有訛字」と云へり。）

阿勒赤駙馬

吉喇惕氏（親征錄に弘吉剌部安赤那顏、三千騎、元史太宗紀に按赤那顏、成宗紀元貞元年の條に皇國舅按赤那演、劉伯林の傳に按眞那延とあり。特薛禪の傳に曰く「子曰按陳、從太祖征伐、凡三十二戰云云。歲丁亥、賜號國舅按陳那顏云云。丁酉、賜錢二十萬緡、有旨弘吉剌氏生女、世以爲后、生男、世尙公主、每歲四時孟月、聽讀所賜旨、世世不絕」と云ひ、公主表魯國公主位も「魯國大長公主也、速不花、睿宗女也、適皇國舅魯忠武王按嗔那顏子斡陳駙馬」。魯國公主薛只干、太祖孫女、適斡陳弟納陳駙馬」より始まりて、阿勒赤の皇女を娶れることは、元史に見えず。されども多遜の史に「阿赤の本の名は、荅兒吉古兒干なりしが、人は皆阿赤那顏と云ふ」とありて、阿赤は卽ち阿勒赤、古兒干は卽ち古咧堅なれば、國舅の號を賜はれる前は、古咧堅と呼ばれて、太祖の駙馬なりしを、本傳も公主表も書き漏せるなり。）

不禿駙馬

不禿古咧堅なる二の千戶の亦乞咧思氏（卽ち不圖、卷三より見え、濁水の誓に與り、親

征錄に亦乞列部孛徒駙馬二千騎、黑韃事略に撒都駙馬とあり。元史本傳に「孛禿、亦乞列思氏、善騎射。太祖妻以皇妹帖木倫。皇妹薨、復妻以皇女火臣別吉」と云ひ、公主表昌國公主位の處に「昌國大長公主帖木倫、烈祖女、適昌忠武王孛禿。主薨、繼室以太祖女昌國大長公主火臣別吉」と云へり。帖木倫は、卷一卷二にも喇失惕の史にもみな帖木侖とあり。火臣別吉は、卷五に豁眞別乞、親征錄に火阿眞伯姫、喇失惕の史に長女火眞別吉とあり。蒙韃備錄に「成吉思皇帝女七人。長公主曰阿眞鰲拽、今嫁豹突駙馬」とある阿眞鰲拽は即ち豁眞別乞、豹突は即ち不禿なり。）

阿剌忽失的吉惕忽哩駙馬

咧堅（レゲン）なる五（イツ）の千戸（センコ）の汪古惕（オングト）氏、（この名は、卷六より見えて、今始めて古咧堅と稱せり。元史本傳に曰く「既平乃蠻、從下中原、復爲嚮導、南出界垣。太祖留阿剌兀思別吉忽里、歸鎭本部、爲其部衆、昔之異議者所殺、長子不顏昔班併死之。其妻阿里黑、攜幼子孛要合、與姪鎭國逃難、夜遁至界垣、告守者、縋城以登、因避地雲中。太祖既定雲中、購求得之、賜與甚厚。以其子孛要合尙幼、封其姪鎭國爲北平王、鎭國薨、子瓦古台襲爵、尙睿宗女獨木干公主、略地江淮、薨于軍。孛要合幼從攻西域、還封北平王、尙阿剌海別吉公主、公主明睿有智略、車駕征伐四出、嘗使留守、軍國大政、諮稟而後行。師出無內顧之憂、公主之力居多」と云ひ、公主表趙國公主位の初に「趙國大長公主阿剌海別吉、太祖女、適趙武毅王孛要合」とあり。然るに蒙韃備錄には「二公主曰阿里黑百因、俗曰必姬夫人。曾嫁金國亡臣白四部、死、寡居、今領白韃靼國事、日逐看經、有婦女數千人事之、征伐斬殺、皆自己出」と云ひ、多遜の史には「成吉思汗、第三の女阿剌海別吉を

阿剌忽失的斤忽哩に妻せんと～たるを、年老いたりとて辭みて、兄の子鎭古に妻せられんことを願ひ、阿剌海は鎭古に嫁ぎて、訥古台を生み、訥古台は拖雷の女を娶れり」と云へり。洪鈞思へらく「據孟珙言、則元史所謂留守、乃是掌汪古部事、非太祖本部。太祖西征、斡赤斤居守、元祕史西游記可證、別無阿剌海居守之語、作此傳者誤會也。史言孛要合幼從征西域、歸乃封王、尙主、而孟珙之使蒙古、作蒙達備錄、在辛巳歲、正太祖在西域、追札闌丁之時、不應即云公主夫死寡居。今案西域書之鎭古、即鎭國之訛。訥古台、即鎭國子瓦古台。尙睿宗女、語同元史。反覆推求、必是公主先適鎭國夫死、遂自領汪古部事、繼而夫弟（從弟）孛要合、自西域還復尙公主、鎭國子瓦古台爲公主出、而孛要合之三子、則公主進姬妾以生。西域書但言其前、元史但言其後、而蒙達備錄、則適當其中。蒙古不諱再醮、理宜然也」とて、三書の異なる處を巧に解釋せり。又黑韃事略に蒙古の十七頭項の名を擧げて、その一人なる白厮馬の原注に「一名白厮卜、即白韃、僞太子、忒沒眞壻、僞公主阿剌罕之前夫」とあり。洪鈞はこの文を引きて公主再醮の確證と～、「白撕卜、即白四部、亦即史之鎭國。何以二名不得其考」と云へり。洪鈞又曰く「西域書謂、太祖欲以女適阿剌兀思別吉忽里、辭以年老、請以兄子訂婚。阿剌兀思之兄、先爲汪古部主。汪古部爲金守長城邊界。兄死弟嗣、而金主仍禮遇其兄子、蒙達備錄所以云金國亡臣也。汪古之義爲邊牆、云是契丹語、蓋即金語。史言金源氏塹山爲界、阿剌兀思以一軍守其衝要、語同。西域書紀阿剌兀思死、難之故、與元史異、語繁不載。又云阿剌海別吉年歲、在窩闊台拖雷之間、則是太宗妹、睿宗姊」と云へり。洪鈞の此等の說は、考證甚だ精に～て確なり。余これに依りて猶考ふるに、阿剌海別吉は祕史卷十なる阿剌合別乞に～て、前に鎭國

阿剌合別乞三醮の說

に嫁ぎたるのみならず、猶その前に阿剌忽失に嫁ぎたるなるべ〜。多遜は、阿剌忽失の辭みたることを云へども、辭みたらんには、古咧堅即ち駙馬と呼ばるべき筈なし。卷十に阿剌合別乞を汪古惕に與へたりとあるは、阿剌忽失に與へたるなり。蒙韃備錄に阿里黑百因とあるは、即ち阿剌合別乞の訛なれば、元史に阿剌兀思の妻阿里黑と云へるは即ちこの阿里黑、又即ち阿剌合なり。蒙古は再醮三醮を諱まざるのみならず、父死〜てその後母を妻とし、兄死〜てその嫂を妻とするは、何奴突厥を初めとして、塞北の俗皆然り。孛要合は、蓋阿剌合の生めるにはあらで、前妻の子なるべし。阿剌忽失の殺されたる時は、孛要合なほ幼かり〜故に、阿剌合は夫の姪なる鎮國に嫁ぎ、鎮國死〜て後に我が子の如き孛要合を夫と〜たるなり。蒙古源流に滿都古勒汗の寡婦滿都該徹辰哈屯は、節を守りて他族に嫁がず、夫の從曾孫(姪の孫)なる達延汗を育ててその哈屯となれる奇談あり。漢人ならば瀆倫と云ふべきことを蒙古にては貞烈とするほどなれば、阿剌合の三醮などは珍〜きことに非ず。然るに闊復の駙馬高唐王闊里吉思(阿剌忽失の曾孫)の碑に至りては、曾祖母と祖母と同ト人なりとは直書〜かねて、阿剌忽失の妻をば曾祖妣阿里黑、孛要合の妻をば祖妣皇曾祖姑阿剌海別吉と書きて、別人の如くし、阿里黑は何姓とも誰の女とも云はず、只まぎらかせり。元史の本傳は、全くこの碑文に本づける故に、筆執れる人も、阿里黑の即ち阿剌海なることを知らざり〜なり。)

九十五の千戸

林の民より外なる忙豁勒の國の千戸の官人を成吉思合罕の名ざ〜たる九十五の千戸の官人成れり。(林の民とは、斡亦喇惕乞兒吉速惕などを云ふ。卷十に見ゆ。阿勒赤、不禿、阿剌忽失、的吉惕忽哩の三人は、三人にて十の千戸となりたれば、千戸は九十五なれども、功臣は八十八人なり。明譯に「除駙馬」外、復授同開國有功者九十五人爲千戸」とあり。駙馬を除くも九十五人も、皆譯〜誤りなり。又元史兀赤台の傳に「朔方既定、舉六十五人爲千夫長」とある六は九の誤寫又は誤刻に〜て、これも千戸の數九十五なるを功臣の數と誤解〜たるなり。)

八十八の功臣

功臣の恩賞

古咧格惕(駙馬なる古咧堅の複稱)**と一處**(**なる人人**)**に**(この句の意明かならざるが爲に、明の譯人は、駙馬を除きて九十五の功臣ありと誤解せり。蓋この句の意は、駙馬を込めたる諸功臣にと云ふことにて、功臣の外なる駙馬を加へてと云ふことには非ず。)

又成吉思合罕勅あり「この名ざ〜たる九十五の千戸の官人に千戸を任〜たるその内にて功ある者に恩賞を與へん」とて、成吉思合罕勅あり(この句は、原本にては「功ある者」の上に在り。恐らくは傳鈔の間に起れる錯誤ならん。今假にこゝに移〜たれども、實はこの句なくとも通ずる處なり。)**「孛斡兒出木合黎等の官人どもをおこせよ」と宣ふ時に、房の内に失吉忽禿忽**

失吉忽禿忽の愛だれ

居りき。「喚びに往け」と失吉忽禿忽に宣へば、失吉忽禿忽申さく「孛斡兒出木合黎等は、誰より多き功をな〜けん。誰より多き力を與へけん。恩賞を賜はらんには、我いかに少き功をなさざりき。いかに少き力を與へざりき、我。搖車(斡列該)にある時より爾の高き閾(温都兒)の裏に下頷(額哩温)にかく(額堆)髯生ふるまで長けて、他〜(斡額咧)は思はざり〜ぞ(他心を懷か(ざり〜ぞ)、我。內股(阿剌)に尿壺を用ひ〜」より爾の金の閾(阿勒壇)の裏に住み(阿周)て口(阿蠻)に髯かく生ふるまで長けて、違へる(阿兒只阿思)を踏まざり〜ぞ、我。脚(闊勒)の處に臥させて子と〜育てたるぞ、我を。前に(可兀赤運)臥させて弟と〜育てたるぞ、我を。今我にいかなる恩賞(送兀赤運)

太祖の溫諭

をか賜はらん」と申〜き。その言につき、成吉思合罕は失吉忽禿忽に宣はく「第六の弟(宣懿太后の第六子に〜て太祖の末弟)に非ずや、汝は。末の弟なる汝に、恩賞は弟どもの分前に依り分け合はん。又汝の功の故に九次の罪に勿罪なひそ」と勅ありき。「長生の上帝に祐けられて普き國民を服へてある處にて、汝は視る目聽く耳となりて、普き國民を母に我等に弟どもに子どもに分民(分け與へらるゝ民)の名にて、毛氈(亦思該)の帳牆ある「民」を分けて、板(亦哩扯兀勒)の門(合答孫)ある「民」を離〜(合合察兀)て、割附(勒)けて與へよ。誰も汝の言に違ひ勿爲そ」と勅ありき。又失吉忽禿忽に「普き國民の盜を懲〜て、謊を白

断事官

青冊

〜て、殺すべき理あるをば殺し、罰ふべき理あるをば罰へ」とて、普き上等の札兒忽（最も高き断事、即ち最高裁判）を任〜給へり。（黒韃事略の徐霆の補證に「韃人本無字書云云。其俗淳而心專、故言語不差。其法說謊者死、故莫敢詐僞。雖無字書自可立國」また「霆見其一法最好、說謊者死」とあり。謊は、詐僞なり。札兒忽を掌る者を札兒忽赤と云ひ、漢語に譯すれば、断事官と云ふ。失吉忽禿忽は、初任の断事官なり。馬祖常の撰れる月合乃の碑に「國朝天造之始、總裁庶政、悉由断事官」と云ひ、元史百官志一に「元太祖起自朔土、統有其衆、部落野處、非有城郭之制、國俗敦厚、非有庶事之繁、惟以萬戶統軍旅、以断事官治政刑、任用者、不過一二親貴重臣耳」と云ひ、元史紀事本末に「太祖時、設官甚簡、以断事官爲至重之任、位三公上」ともあり。又百官志三に「國初未有官制、首置断事官、曰札魯忽赤、會決庶務。凡諸王駙馬投下蒙古色目人等應犯一切公事、及漢人姦盜詐僞、蠱毒厭魅、誘掠逃驅、輕重罪囚、及邊遠出征官吏每歲從、從司上都、存留住冬諸事、悉掌之」とあるは、漢地を幷せたる後の職掌をも兼ね擧げたるなり。）又「普き民の割附を割附けたる事を裁斷を裁斷〜たる事を青き迭卜帖兒（冊）に書物に書きて記錄〜て、子孫の子孫に至るまで、失吉忽禿

失吉忽禿忽の謙讓

蒙力克の功

忽の我に謀りて論ひて、青き書物白き紙に記錄〜たるを勿改めそ。改むる人は、罪あるとなれ」と勅ありき。失吉忽禿忽言はく「我が如き末の弟は、一樣に齊等に分前をいかんぞ取らん。恩賜せば、土の牆ある城より賜はらん事を合罕の恩賜にて知〜めせ」と奏〜けり。（土の牆ある城とは、乞塔惕唐兀惕などの都邑を云ふ。羽柴秀吉の海外にて領地を賜はれ」と信長公に申〜たるに意同じ。）この言につき「己が身を汝は斟酌せり（身の程を善く考へたり）。汝知れ（自ら取りて支配せよ）」と宣へり。失吉忽禿忽は、己にかく恩賜せ〜め了へて、出でて宇斡兒出木合黎等の官人を喚びて入ら〜めけり。

そこに成吉思合罕勅ありて蒙力克額亦格に宣はく

人臣の極位

「生るゝと共に生れたる、長くると共に長けたる、福ある慶ある汝、汝の功助は、幾ばくもあり〳〵ぞ。その内王罕額赤格、桑昆安荅二人、我を賺〳〵て喚びたる時、往く閒に蒙力克額赤格の家に宿りたれば、蒙力克額赤格、汝止めざりせば、渦（忽亦侖）ある水の裏に紅（忽剌侖）なる火の裏に入れらるるなり〳〵ぞ。彼の功を善く想ひては、子孫の子孫に至るまでいかんぞ忘られん。彼の功を想ひて、今坐次は、この隅の根に坐ゑて、年に月に議りて給與賞賜を汝に與へん。侍奉きて過さん、子孫の子孫に至るまで」と勅ありき。

孛斡兒出の功

少年の義俠

又成吉思合罕は、孛斡兒出に宣はく「小き時に、葦毛の騸馬八匹を盗まれて、路に三たび宿りて追ひて行げる時に遇ひ合ひたるぞ。汝そこに言はく「艱みて來つる伴に伴なはん」と云ひ、家に父にも話なく、騍馬の乳を擠り居たるに、その大皮桶皮斗に野にて蓋〳〵て、尾脱の栗毛馬を放た〳〵めて、我を脊黑の青馬に乘ら〳〵めて、汝自ら速き淡黄色の馬に乘りて、その馬羣をば主なく放ちて、急ぎて野より便ち我と伴なひて、又三たび宿り追ひて、葦毛の騸馬どもを盗みたる團の處に到れば、團の邊に立てるを奪ひて追ひて逃げて將ち來〳〵、

ぞ、我等二人。汝の父納忽伯顏は[富人にて]ありき。（明譯に「你父納忽伯顏有家財」とあるを見れば、原文「ありき」の上に脫文あるならん）汝は、彼の獨子、何を知りてか我に伴なひたりし。（明譯「你父納忽伯顏有家財、只你一子、爲甚肯教與我作伴」とあるは、原文の意とやゝ異なり。）心の傑れたるにより伴なひたるぞ、汝。（閣復の撰れる廣平王玉昔帖木兒の碑に「祖博爾朮、謚武忠、武忠志意沈雄、善戰知兵。太祖聖武皇帝在潛、義均同氣。初要兒斤部卒、盜吾牧馬、武忠共往追之、時年十三、知其衆寡不敵、乃爲出奇、從旁夾擊之、寇捨所掠而去」とあるは、卽ちこの事にして、元史博爾朮の傳は、この碑に據れり。要兒斤は、祕史の禹兒乞また主兒勤なり。）その後想ひて行きて、我は別勒古台を遣りて、伴とならんと云へば、汝は拱脊の栗毛馬に乘りて、靑き毛衣を馬に馱けて、伴となりに來つれば、三つの篋兒乞惕、我等の處に來て、不兒罕を三たび繞ら

氈裘の雨覆ひ

〜めたる時、共に繞りたるぞ、汝。又その後塔塔兒の民に荅闌捏木兒格思にて對抗〜て宿りたれば、雨は晝夜斷えず霖降りたる時、夜我を睡らせんとて、毛氈の表衣を覆ひたるにより、我が上に雨を漏らさず、夜盡くるまで立ちて、片方の足を只一度換へたりき、汝。汝の傑れたる效なり〜ぞ。（元史博爾朮の傳に「嘗潰圍於怯列、太祖失馬。博爾朮累騎而馳、頓止中野、會天雨雪、失牙帳所在、臥草澤中。與木華黎、張氈裘以蔽帝、通夕植立、足蹟不移。及旦、雪深數尺、遂免於難」とあるは、閣復の廣平王の碑に據れるなり。潰圍於怯列とは、合剌合勒只惕の戰を云へるにて、累騎の事は、幹闊台と孛囉忽勒との事を誤り傳へたるなり。氈裘の覆ひの事も、塔塔兒との戰を客咧亦惕とし、雨を雪とし、孛幹兒出一人を木合黎と二人とし〜たるは、皆傳聞の異辭なり。）それより外は、いかで汝の傑れたることを言ひて盡さん。孛幹兒出木合黎二人は、我が善き事を

ば行くまで拽きて、我が善からぬ事は立つまで止めて、

右手の萬戸

この位に到らせたり。今衆の上に坐に坐て、九度の罪に勿罪なひそ。孛斡兒出は、右の手の阿勒台山に凭れる萬戸を知れ」と勅ありき。（蒙語 餞迭は、本の義は知るにて、管する意にも用ひ、我が古言の〜るに同ど。古の知太政官事今の府縣知事などの知も、同ど意なり。管する意に用ひたる餞迭を知ると譯〜たるは、皆古言の〜るなり。）

木合黎の神告

又木合黎に成吉思合罕宣はく「我等、豁兒豁納黑主不兒なる忽禿剌罕」を戴ける部衆」の踊りける繁れる樹「の下」に下馬〜たれば、木合黎に皇天の神告を告げ給へる言明なる故に、我そこに古溫豁阿（巻四なる古溫兀阿）を想ひて、木合黎に言を了へたりき。（約束を定めたりき。この事は、前に見えず。豁兒豁納黑の下馬は、札木合と同居せる時なり。この言に依

れば、木合黎等は、その頃已に太祖と内約ありて、その後主兒勤の亡びたる時、先約に從ひ服屬〜たるなり。）それに依り坐に上りて坐りて、木合黎の子孫の子孫に至るまで衆民の國王となれ」とて、國王の號を賜ひたり。「木合黎國王は、

左手の萬戸

左の手の合喇溫只敦に凭れる萬戸を知れ」と勅ありき。（合喇溫只敦の所在確ならず。王罕の少き時叔父に逐はれて逃げ込みたる合喇溫の隘は、薛涼格河の邊にありて、これと異なり。巴勒主納の水飲の時、太祖を尋ねて合喇溫只敦の嶺どもを合撒兒の辿りたるは、この山なるべ〜。興安嶺の山脈の内なる一峯の名なるべ〜とは誰も考ふることなれども、孛斡兒出の阿勒台山と對〜て擧げられたるを見れば、興安嶺の一峯の名には非ず〜て、興安嶺全體を呼べる舊き名なるべ〜。閻復の廣平王の碑に「國初、官制簡古、置左右萬夫長、位諸將之上、首以武忠居右、東平忠武王居左、翊衛辰極、猶車之有軸、身之有臂、電掃荒屯、蕩奠九土、挂天之力競矣」と云へり。武忠は孛斡兒出、忠武は木合黎なり。）

豁兒赤の識言

成吉思合罕、豁兒赤に宣はく「識言〜て（明譯 你曾說先兆的言語）、我が年少くあるより今まで久しく濡るゝに

三十妻の舊約

濡れ合ひ、寒きに寒え合ひて、福の神となりて行きたるぞ、汝。豁兒赤は、かの時に言はく「識言實とならば、上帝に心に適はれば、我に三十人の妻有らせよ」と云ひき、汝。今實なる（識言實となりたる）故に、恩賜〳〵て、これらの降れる民の好き婦人を好き處女を見て、三十人の妻を選びて取れ」と勅ありき。又豁兒赤に「三千の巴阿鄰の上に、塔該（即ち速勒都思の塔孩）、阿失黑（即ち阿失黑古咧堅）二人と共に、阿荅兒斤の赤那思、（阿荅兒斤は、篾年土敦の第五子なる合赤溫の子阿荅兒歹より出でたり。赤那思は、喇失惕額丁に據れば、察喇孩傾忽の子なる堅都赤那兀嚕客眞赤那の裔なり。赤那思氏分散〳〵て阿荅兒斤に屬〳〵居たる故に、阿荅兒斤の赤那思と云へるなり。）脫斡列思、帖良古惕（脫斡列思は、卷十に脫額列思、蒙古集史に禿剌思とあり。帖良古惕は、卷十に田列克、親征錄に帖良兀、集史に帖連郭惕とあり。共に謙河の源に居たる林の民）を合せ萬と

林民の萬戶

主兒扯歹の合剌合勒只惕の戰功

なゝて、豁兒赤知りて、額兒的失河に傍へる林の民に至るまで營盤を自在に營盤〳〵て、林の民を鎭むべく、豁兒赤萬戶を知れ」と勅ありき。「豁兒赤に相談無くては、林の民は、とにかくに勿行ひそ。相談なくて行ふものをば、何ぞ猶豫はん」と勅ありき。

又成吉思合罕は、主兒扯歹に宣はく「緊要なる汝の功は、客咧亦惕と合剌合勒只惕の沙漠に戰ふ時、愁へて居る時、忽亦兒荅兒安荅は、口を開きたるぞ。彼の從事を、主兒扯歹汝は、從事〳〵たるぞ。從事する時、主兒扯歹汝は、突進〳〵て只兒斤を、禿別干を、董合亦惕を、忽哩失列門（卷六の豁

哩失列門）を、千の侍衛を、緊要なる軍を、都てを敗りて、大中軍に到りて、桑昆の紅き腮を兀出馬（箭の名）にて射たる故に、長生の上帝に門の手綱を引開けられたるぞ。桑昆に傷けずあらば、いかにかもなりけん、我等。主兒扯歹の緊要なる大き功にそれは做りたるぞ。かくて離れて合勒合河に沿ひ起つ時、主兒扯歹を高き山の遮護の如く思ひて行きたりき、我。かく去りて、巴勒主納の湖に水飲みに到りたるぞ。さて巴勒主納の湖より出馬する時、主兒扯歹を先鋒とゝて、客咧亦惕に出征ゝて、皇天后土に力を添へられて、客咧亦惕の民を窮めて虜へたり。緊要な

高山の遮護

第二次の戰功

る國を滅されて、乃蠻、篾兒乞惕は、顏色を挫きて、立ち合ひ（對陣し）かれて散らされたるぞ。篾兒乞惕、乃蠻を散らゝたる戰の內に、客咧亦惕の札合敢不は、二女の女の緣に依り、己の從ふる部衆にて圓全住みたりゝぞ。二たび敵になり離れたるを、主兒扯歹誘ひて、計略にて札合敢不を離れ畢へたるを手に掛けて拿へて事了へたりゝぞ。かくて札合敢不の部衆を二たび滅ゝ虜へたり。主兒扯歹の第二次なるその功は、かくありゝぞ」「と宣ひき。」殺ゝ合ふ日に、命を出ゝたる故に、死に合ふ日に、塵（阿剌勒都 兀忽勒都 阿米顏 斡巻）戰ゝたる故に、成吉思合罕は、亦巴合別乞（札合敢不の長女。元史北赤台の傳 木列）嬪

亦巴合別乞を賜ふ時の勅諭

御木八哈別吉。木は、亦の誤りなり。喇失惕阿卜哈合屯）を主兒扯歹に恩賜〜て與ふる時、亦巴合に宣はく「汝を厭ひ汝の胷懷なく見兀者兀里格思古貝容惡〜と云はざり〜ぞ、我。懷に脚に入りたる、列に列りて坐たる汝を主兒扯歹に恩賜するは、大なる道理を思ひて、主兒扯歹の戰ふ日に楯となりたる、敵なる人に合勒合思ひて、主兒扯歹の戰ふ日に楯となりたる、敵なる人に合惕忽勒都防ぎとなりたる、離れたる部衆を聚めたる、散りたる部合合察塔勒塔衆を纏め合ひたる彼の功を考へて、汝を與へたり。久不古惕格勒都後我が子孫は、我等の位に坐て、かくの如き功をなせる道理を想ひて、我が言に違ひなさず、子孫の子孫に至るまで、亦巴合の位を勿斷ちそ」と勅ありき。又成吉

遺念の媵臣

四千の兀嚕兀惕の長

思合罕は、亦巴合に宣はく「札合敢不なる汝の父は、汝に二百人の媵臣を、（蒙語引者思、婦人の嫁ぎに隨ひ往きて仕ふる從者、男をも女をも云ふ。）汝に阿失黑帖木兒廚子、阿勒赤黑廚子二人を與へてありき。今兀嚕兀惕の民に汝往〜には、遺念と〜て我にその媵臣より阿失黑帖木兒廚子を一百人を與へて往け」と宣ひて取れり。又成吉思合罕は、主兒扯歹に宣はく「亦巴合を汝に與へたり。四千の兀嚕兀惕を汝知りて居らずや」とて恩賜〜て勅ありき。（元史兀赤台の傳に「兀赤台、始從征怯列亦、自統兀魯兀四千人、世世無替」と云へるは、こゝの文の意を約めたるなり。高山前日影也。賜嬪御木八哈別吉引者思百、俾必爲先鋒。帝嘗諭之曰「朕之望汝、如高山前日影」。哈罕啓行、歷班眞海子、間關萬里、每遇戰陣、高き山の遮護の誤り、引者思は、媵臣の蒙語を正〜く音譯せり。）

成吉思汗實錄卷の八終り。

忽必來の力

四狗

四駿

成吉思汗實錄卷の九。

又成吉思合罕は、忽必來に宣はく「力ある項、力士の臂を壓けてくれたるぞ、汝。此等忽必來、者勒篾、者別、速別格台（即ち速別額台）、汝等四人の狗を、思ふ處に向けて遣れば、到れと云ふ處に岩を碎き、引けと云ふ處に崖を破り、光る石を碎き、深き水を斷切りたりしぞ、汝等。忽必來、者勒篾、者別、速別額台、汝等四人の狗を指したる地に遣りて、孛斡兒出、木合黎、孛囉忽勒、赤剌溫巴阿禿兒、これら四人の駿馬（蒙語朶兒邊曲魯兀惕）を側に置けば、（元史木華黎の傳に「與博爾朮博爾忽赤老溫事太祖、俱以忠勇稱、號掇里班曲律、猶華言四傑也」と云ひ、兵志にも同ドき文あり。）戰ふ日となれば、主兒扯歹、

二先鋒

十功臣

注意せらるる別都溫

忽難の忠勤

忽亦勒荅兒二人を、兀嚕兀惕、忙忽惕を率ゐて前に立たゝむれば、都て心安くありき、我」と宣へり。（元史木華黎の傳に、木華黎薨ずて子孛魯嗣ぎたる後（丙戌太祖二十一年夏）詔封功臣戶口爲食邑曰十投下、孛魯居其首」と云ひ、畏荅兒博羅歡の傳にも十功臣の目見えたるは、この十人を云へるなるべし。）

「汝忽必來は、軍の事務都てに長とゝて居らずや」とて恩賜ゝて勅ありき。又「別都溫の拗けたる故に、我怪みて行きて、千戶を與へざりき。汝は彼に好くあるぞ。汝と共に千戶となりて議り合ひて行かれん」と宣へり。又「この後別都溫に注意くるぞ、我等」と宣へり。（別都溫は、卽ち卷三の抹赤別都溫なり。抹赤は木匠にゝて、名は別都溫なり。）

又成吉思合罕は、格你格思の忽難に「つきて」宣はく「汝等、孛斡兒出、木合黎が頭たる官人どもに、朶歹、朶豁勒忽等の扯兒賓に。この忽難、黑き夜は雄狼、明き晝は黑き老鴉となりて、起くる時は休まざりゝ、休む時は起きざりゝ、歹き人と共に非き面ゝて居らざりゝ、雛ある人と共に別なる面ゝて居らざりゝ、忽難、闊闊搠思二人に相談無くて勿事を做ゝそ。忽難、闊闊搠思二人に相談ゝて事を做せ」と勅ありき。「我が子どもの兄にて拙赤はあるぞ。忽難は、格你格思に頭とゝて、拙赤の下に萬戶の官人となれ」と勅ありき。（元史世系表に「太祖皇帝六子、長朮赤太子」とあり。元史の本傳は甚だ疏略なるが、洪鈞の元史譯文證補に補傳あり、詳備せる佳作なり。明譯には、次の忽難の上に又說の二字あり。）忽難、闊闊搠思、

謀臣忽難闊闊搠思

拙赤の傅となる忽難

忠直なる四臣

迭該、兀孫額不干（即ち巴阿鄂の裔孫翁）、この四人は、見たる事を諱まず、聞きたる事を匿さざりき。[云云にて]これら四人はあり〳〵ぞ。（これら四人の上には但曾聞見的事、不曾隱諱、便脫文あり。明譯には[又說]とある如く、太祖の勅語なるべし。）

をさなゞみの者勒篾

來對我說了とあり。この一節は、明譯に

又成吉思合罕は、者勒篾に宣はく[札兒赤兀歹翁は、風匣を負ひて、者勒篾は搖車の內より[擧げられて]、不兒罕合勒敦より下りて來る時、斡難[の河邊]の迭里溫孛勒荅黑に[我が母]我を生みたる時、貂鼠の襁褓を與へてありき。かくて伴となりたるに依り、闊の奴、門の近習となりたるぞ。者勒篾の功は多くあるぞ。生るゝと共に

孛海合
孛斡勒
額兀點
奄出

生れたる、長くると共に長けたる、貂鼠の襁褓なる根源ある、福ある慶ある者勒篾、九次の罪を犯すとも刑に勿入れそ」と勅ありき。

父と別に千戶となれる脫侖扯兒必

又成吉思合罕は、脫侖（卷八なる脫欒）に宣はく[父と子と別に千戶をいかでか知りたり〳〵、汝。國民を聚め合ふ父に片方の翅となり、拽き合ひて國民を聚め合ひたる故に、扯兒必の號を與へたるぞ。今己の得たる置きたる[民]に依り己千戶となりて、禿嚕罕に議り合ひて居らずや、汝」と勅ありき。（禿嚕罕の名は、前後に見えず。脫侖に兄弟多ければ、その兄弟の一人なるべし。）

艱難を共にせる汪古兒

又成吉思合罕は、汪古兒厨官に宣はく[三人の脫忽喇

兀惕（脱忽喇温の複稱）、五人の塔兒忽惕、蒙格禿乞顏の子汝汪古兒、敝失兀惕巴牙兀惕を率ゐ、汝等我に一つの團となりて、汝汪古兒は、霧（不丹）の裏に迷はざり〳〵ぞ、汝。亂（不勒合）の裏に離れざり〳〵ぞ、汝。濡るゝに濡れ合ひて、寒きに寒え合ひて行きたり〳〵ぞ、汝。今いかなる恩賞をか要むる、汝」と宣へば、汪古兒申さく「恩賞を擇ばゝめば、我が巴牙兀惕の兄弟は、部落部落ごとに散りたり。恩賜せば、巴牙兀惕の兄弟を聚ら〳〵めん」と申せば、「然り。かく巴牙兀惕の兄弟を聚めて、汝千戸を知れ」と勅ありき。又成吉思合罕勅あるには「汪古兒、孛囉兀勒二人は、右左の側にて汝等二人の厨

汪古兒に屬する巴牙兀惕部

汪古兒孛囉兀勒食物の給散

官は、食物を配る時、右（巴剌温）の側に立（巴亦）てるもの坐れるものに缺けさせず、左（沼温）の側に列（者兒格列）れるもの未なるものに缺けさせず、汝等二人にてかく給散すれば、我が喉嗌ばず心安くあり。今汪古兒、孛囉兀勒二人は、馬に乘りて行きて、食物を多くの人に給散せよ」と勅ありき。「坐に坐る時は、大なる酒局の右左の側に食物を掌りて坐れ。脱侖等と共に北に向ひ坐れ」と坐を告げて與へたり。

訶額侖の育てたる棄兒四人

又成吉思合罕は、孛囉忽勒（即ち孛囉兀勒）に宣はく「我が母は、失吉忽禿忽、孛囉忽勒、古出、闊闊出、汝等四人を、民の營盤より地（闊薛兒）より得て、脚（闊勒）の處に入れて、子（可兀赤連）とし育てて養ふ

合兒吉勒失喇に拖雷の

に、汝等の項を引きて、人と齊〳〵くならしめて、汝等の（古温）肩を引きて、男と齊〳〵くならしめて、子どもなる我等に（額哩）伴（額堅）「となり」影となら〳〵めんとて養ひたるぞ。汝等を養へる德に我が母に蓋幾ばくかは報い恩を廻〳〵たり、汝等。孛囉忽勒は、我に伴なひて、劇〳〵き出征に、雨の夜乏（忽兒敦）（都幹）〳〵く宿ら〳〵めざり〳〵ぞ、汝。抗合ひて居る敵の處に、湯（失禿額列勒都）（晏速）（孫）なく宿ら〳〵めざり〳〵ぞ、汝。又御祖なる父を失ひたる讎（都那兀勒）あり怨ある塔塔兒の民を屈服せ〳〵めて、讎復〳〵怨報（幹雲勒）（幹旋）（乞撒勒）（乞三）い、塔塔兒の民を車轄に比べて根絶〳〵に夷ぐる時殺されたるに、塔塔兒の合兒吉勒失喇、賊となり出でて、却困窮

盜まれ

勇婦阿勒塔泥の働き

〳〵て飢ゑて入りて來て、母の處に家に入りて、「善く尋ねさすること有り、我」と云ひて、「善く尋ねさすること有らば、そこに坐れ」と云はれて（明譯）他說是尋衣食的、母親說既是尋衣食的時、那裏坐）、西邊の床の門後に端に坐りて居る時、拖雷五歲なる、外より入りて來て、却走りて出でて去りたるを、合兒吉勒失喇起ちて、幼兒を腋に夾みて出でて行きて去りながら、刀を引きて拔きつゝ行く時、孛囉忽勒の妻阿勒塔泥は、母の家に東に坐りて居りき。母叫びて「子を失へり」と云へると共に、阿勒塔泥續き合ひ走りて出で合ひて、合兒吉勒失喇の後より

哲台者勒篾に盗人の殺され

頭功の爭ひ

趕ひて、彼の辮髮を拏へて、次の手にて、刀を拔きてある彼の手を拏へて、扯くと共に、その刀を落〜けり。家の北に哲台、者勒篾二人、角なき黑牛を食はんと殺〜て居る時、阿勒塔泥の聲にて、哲台、者勒篾二人、斧を執りて、拳を赤く〜て、走りて來て、塔塔兒の合兒吉勒失喇を斧にて刀にてすぐそこに殺〜けり。阿勒塔泥、哲台、者勒篾三人、子の命を救へる頭功を爭ひ合ひたれば、哲台、者勒篾二人言く「我等無かりせば、疾く走りて到りて殺さざりせば、阿勒塔泥は、婦の人、いかにありけん。子の命に害を致〜たりけん。頭功は、我等のなるぞ」と云へり。阿勒塔泥言く「我が聲を聞かざりせば、汝等いかでか來にけん。我走りて趕ひて彼の辮髮を拏へて、刀を拔きたる彼の手を扯きて刀を落さざりせば、哲台、者勒篾二人到りて來るまでに、子の命に害を致さずやはありけん」と云へり。言ひ畢へたれば、頭功は、阿勒塔泥のとなれり。孛囉忽勒の妻は、孛囉忽勒に第二の轅となり、拖雷の命に功となれり。又孛囉忽勒は、客咧亦惕と合刺合勒只惕の沙漠に戰へる時、斡歌歹は頸脈を箭に射られたれば、倒れたれば、孛囉忽勒は、上に下り合ひて、凝りたる彼の血を口にて咂ひて、夜宿り合ひて、明朝

阿勒塔泥のとなれる頭功

斡歌歹を救ひたる孛囉忽勒

馬に乘らゝめて、坐りかぬるを、尻馬に乘りて、斡歌歹の後より抱きて、塞れる血を唾ひ唾ひ口の緣を赤くゝして、斡歌歹の命を安らかに送りて來てありき。我が母の養へる勞りたるに報い、我が一人の子の命に功となりたるぞ。孛囉忽勒は、我に伴なひて、招ぎ喚びに、聲應（苔温）（苔見巴安）後れたることなかりゝぞ。孛囉忽勒は、九次罪を犯すとも勿罪なひそ」と勅ありき。

女子の恩賞

又「女子家族に恩賞を與へん」と宣へり。

又成吉思合罕は、兀孫翁（豁兒赤兀孫翁）に宣はく「兀孫、忽難、闊闊捌思、迭該、この四人は、見たる事聞きたる事を諱み匿さず告げ居たりき。心附きたる事考へたる事を語り居たりき。忙豁勒の體例には、官人の制に別乞となる法ありき。巴阿嘲は、兄の子孫なりき。（巴阿嘲の遠祖巴阿哩歹は、孛端察兒の長子にて、巴啉失亦喇禿合必赤の兄なり。）別乞の制は、我等の内にて上より「爲る法なれば」別乞に兀孫翁爲れ。別乞に戴くと、白き衣を着せて、白き騮馬に乘らゝめて、位の上に坐らせて、侍きて、又年月に議りてかく有れ」と勅ありき。（別乞は、族長の稱號なり。蒙古の諸部長往往別乞と稱する者あり。薛徹別乞は、合不勒合罕の長子の孫にゝて、禹兒斤の長なり。忽察兒別乞は、也速該の兄の子なるが故に、別乞と稱せり。兀都亦惕篾兒乞惕の脫黑脫阿別乞、その長子脫古思別乞、朶兒邊の合只溫別乞、斡亦喇惕の忽都合別乞は、皆その一族の長なり。王罕に事へたる必勒格別乞も、或一族の長なるべゝ。但太祖の女豁眞別乞、阿剌合別乞、桑昆の妹察兀兒別乞、札合敢不の二女亦巴合別乞、莎兒合黑塔泥別乞の如く、女子にゝて別乞と稱するは、美稱に用ふるのみにて、族長の別乞とは異なり。又輟

別乞の稱號

耕錄の白道子の條に「國俗尚白、以白爲吉」とあれば、別乞の白衣を被るは、優禮に出でたるなり。黑韃事略に蒙古の衣服の事を述べて「色用紅紫紺綠、紋以日月龍鳳、無貴賤等差」と云ひて、白衣の事を少〳〵も云はざるを見れば、この優禮を受くるものは極めて稀なり〳〵なるべし。）

まづ口を開きたる忽亦勒荅兒の遺族の恩賞

又成吉思合罕宣はく「忽亦勒荅兒安荅は、戰ふ時に命を差出〳〵て先口を開きたる功の故に、子孫の子孫に至るまで孤兒の恩給を受けて居れ」と勅ありき。

札木合に殺されたる察罕豁阿の遺子の恩賞

又成吉思合罕は、察罕豁阿（卷四の察合安兀阿）の子納鄰脫斡哩勒に宣はく「汝の父察罕豁阿は、我が前に愼みて、戰ひとなり荅闌巴勒主惕に戰へる時、札木合に殺されき。今脫斡哩勒は、父の功にて孤兒の恩給を受けよ」と宣はれて、脫斡哩勒申さく「恩賜せば、我が捏古思の兄弟は、他の部落ごとに散りたり。恩賜せば、その捏古思の兄弟を聚めてん」と申せば、成吉思合罕勅あるには「〳〵かあらば、捏古思の兄弟を聚めて、汝は子孫の子孫に至るまで知りて居らずや」と勅ありき。（捏古思氏の人は、元史に見えず。只孝友傳に「徹徹、担古思氏」とあるを、錢大昕の氏族表に「担、亦捏之譌」と云へり。）

鎖兒罕失喇父子の舊恩

又成吉思合罕は、鎖兒罕失喇に宣はく「我を、小き時に泰赤兀惕の塔兒忽台乞哩勒禿黑兄弟に嫉みて拏へ「られ」たれば、そこに「兄弟に嫉まれたり」とて、鎖兒罕失喇は、赤剌溫、沈伯なる子どもに、合荅安なる女に世話せ〳〵めて、匿〳〵て居て、我を放ちて遣りたるぞ、汝等。汝等の彼の恩

薛涼格の營盤自在の願

好きを想ひて、黑き夜の夢の裏に、明き晝の胷の裏に、想ひて行きたるぞ、我。汝等は、却て我に泰赤兀惕より遲く來〜ぞ。今我汝等に恩賜せば、いかなる恩賜をか欲する、汝等」と宣へり。鎖兒罕失喇は、赤剌溫、沈伯なる子どもと共に申さく「恩賜せば、營盤自在ならん。篾兒乞惕の地なる薛涼格を營盤と〜て自在ならん。又別に恩賜せば、成吉思合罕知〜めせ」と申せり。その時成吉思合罕宣はく「篾兒乞惕の地なる薛涼格を營盤と〜て、營盤又自在なれ。子孫の子孫に至るまで、箭筒を帶ば〜めて喝盞せ〜めて、自在なれ。九次の罪に刑に勿入りそ」と勅ありき。又

直に願を言ひ得る許〜

鎖兒罕失喇巴歹乞失里黑三人の答兒罕

成吉思合罕は、赤剌溫、沈伯二人に恩賜〜て「前に赤剌溫、沈伯二人の言へる言を想ひては、いかんぞ忘れん、汝等[を]。赤剌溫、沈伯、汝等二人、心に言ふことあらば、不足を求むることあらば、閒の人に勿語りそ。己身にて口にて我に汝等自思へることを語れ。不足を自ら求めよ」と勅ありき。又「鎖兒罕失喇、巴歹、乞失里黑、汝等は自在なれ。又自在なるには、多き敵に馳りて、財を得たるに依りて取れ。野の獸を圍獵せば、殺〜たるに依りて取れ」と勅ありき。「鎖兒罕失喇と云へば、泰赤兀惕の脫迭格の家人なり〜ぞ。巴歹、乞失里黑二人と云へば、扯嗹（忽闌巴阿禿兒の子也客扯嗹）

幹嚕阿　阿巴剌　幹樂　幹勒札　幹魯　阿剌　阿不惕渾

の馬飼なり〳〵ぞ。今は我が信臣、箭筒を帶ば〳〵めて、喝盞せ〳〵めて、自在に快活なれ」と勅ありき。（自在なるの蒙語は荅兒合剌忽、自在の特典を得たる官人を荅兒罕と云ふ。輟耕錄に「荅剌罕、譯言一國之長、得自由之意、非勳戚不與焉。太祖龍飛日、朝廷草創、官制簡古、惟左右萬戶、次及千戶而已。丞相順德忠獻王之曾祖啓昔禮、以英材見遇、擢任千戶、錫號荅剌罕。至元壬申、世祖錄勳臣後、拜王宿衛官、襲號荅剌罕」とあり。荅剌罕は、卽荅兒罕、啓昔禮は、卽乞失里黑忠獻王は、世祖成宗の朝の名相哈剌哈孫なり。）

正主を廢てかねたる納牙阿の恩賞

又成吉思合罕は、納牙阿に宣はく「失兒歌禿翁（卷五の失兒古額禿翁）は、阿剌黑、納牙阿なる子どもと、卽汝等と、塔兒忽台乞哩勒禿黑を我等の處に拏へて來る時、路にて忽禿忽勒の隅に到りて、そこに納牙阿言く「正主の君をいかで廢て拏へて往かん、我等」と云ひて、廢てかれて放〳〵て遣り

て、失兒歌禿翁は、阿剌黑、納牙阿なる子どもと來て、そこに納牙阿必勒只兀兒（必勒只兀兒は、雲雀なり。納牙阿の號か。）言く「正主の君を塔兒忽台乞哩勒禿黑を手に掛けて來ぬるに、却て廢てかれて放〳〵て遣りて、我等は、成吉思合罕に力を與へんと來ぬ。その君を手に掛けて來なば、「正主の君を手に掛けたる人、久後いかんぞ倚信せられん、此等の「人」と云はれんと云ひき。その君を廢てかれたり」と云へば、そこに「正主の君を廢てかれたる理は、大なる道理を思ひけり」とて、彼等の言を善〳〵として「一つの句當を委れん」と云ひき。今孛斡兒出に右手の萬戶を知れ（知ら〳〵

右左中の萬戶

者別速別額台の封戸

迭該の封戸

古出古兒木勒合勒忽の封戸

め)、木合里に國王の號を與へて左手の萬戸を知らゝめたり。今納牙阿は、中の萬戸を知れ」と勅ありき。

又「者別、速別額台二人は、自得たる置きたる「民」に千戸となれ」と宣へり。

又迭該なる羊飼に、(卷三に、迭該は羊を牧する事を掌れること見えたり。)埋れたる(明譯無戸籍的百姓)を聚めて千戸を知らゝめたり。

又古出古兒木匠は、(卷三に、古出古兒は家車の修造を掌れること見えたり。卽木匠なり。)民缺けて、こゝよりそこより收めて、札荅嚕より木勒合勒忽、親ゝきに依り伴なひき。「古出古兒、木勒合勒忽二人は、一つに千戸となりて議り合ひて居れ」と宣へり。

親衛を萬に滿たする勅

國を共に立てたる共に艱難ゝたる者どもを千戸の官人となゝて、千を千とゝて、千戸百戸十戸の官人を任ゝて、「萬を」萬とゝて、萬戸の官人を任ゝて、萬戸千戸の官人どもに、恩賞を與ふべき者には恩賞を與へて、恩賞の勅ある者には有りて、成吉思合罕勅あるには「前に八十の宿衛あり、七十の侍衛の番士有りたりき。今長生の上帝の力にて、天地に力勢を添へられて、普き國民を匡ゝて、獨の調度の內に入れたる時、今我が處に番直する侍衛を千戸千戸より選びて入れよ。入るゝには、宿衛箭筒士、侍衛に入るゝには、萬に滿たせ入れよ」

番士を選び弟と從士とを隨へ〜むる勅

と勅ありき。又成吉思合罕は、番士を選びて入るゝことを勅を千戸千戸に傳へけらく「我等の處に番士を入るるに、萬戸千戸百戸の官人の子ども、白身の人の子ども入る時、技能あり狀好き者を、我等の前に行くべき者を入れよ。千戸の官人の子どもを入るゝには、十人の從士あり、彼の弟一人を隨へて來よ。百戸の官人の子どもを入るゝには、五人の從士あり、一人の弟を隨へて來よ。十戸の官人(即ち牌子頭)の子どもを入るゝにも、白身の人の子どもを入るゝにも、三人の從士あり、亦一人の弟を隨へて、初より乘馬氣力を調へて來よ。我等の處にて前に行かゝむることを勵ますに、千戸の官人の子どもには、十人の從士を本の千戸百戸より科斂〜て與へよ。その父與へたる分民あらば、彼の身自得たる置きたる人口騸馬幾ばくか有らば、昵近の分民より外にて、我等の限りたる限りに依り科斂〜て、かく科斂〜て整へて與へよ。百戸の官人の子どもに五人の從士を、十戸の官人の子どもに白身の人の子どもに三人の從士を、只亦法に依り、彼の昵近の分民より外にて、只かく科斂〜て與へよ」と勅ありき。「千戸百戸十戸の官人衆の人、我等の此の勅を致さ〜めて、聞きて

勅を越ゆる罪

ありながら越えたる人は、罪あるとなれ。我等の處に番直に入れられたる人にて避けて爲らざる人、我等の前に行くことを難〜とせば、別なる「人」を入れて、その人をば罪なひて、眼の陰（眼力の及ばざる處）に遠き地に遣れ」と勅ありき。「我等の內裏に前に行きて學び合はんと云ひて我等に來る人を勿妨げそ」と宣へり。

千宿衛の長也客捏兀鄰

成吉思合罕の勅ありたるに依り、千戶より選びて、百戶十戶の官人の子どもも、その勅に依り選びて出〜て來て、「前に八十の宿衛あり〜を八百に爲〜たり。「八百の上に千に滿たせよ」と云へり。宿衛に入る者を勿

箭筒士四班の長也孫帖額不吉歹豁兒忽荅忽剌ト剌合

妨げそ」と勅ありき。「宿衛には也客捏兀鄰長となりて、千夫を知りて居れ」と勅ありき。（「宿衛を也客捏兀鄰統べて」と譯すべきなれども、統ぶるの蒙語阿合剌は、阿合卽長となると云ふ義なる故に、「宿衛を」の「を」を「に」と改めたり。下皆これに準ふ。也客捏兀鄰は、何人なるか、知らず。見豁堦の蒙力克額赤格の子にてやあらん。）「前に四百の箭筒士を選びたり。選びて「箭筒士に者勒篾の子也孫帖額長となりて、禿格の子不吉歹と議り合ひて居れ」と云へり。（也孫帖額は、憲宗紀に葉孫脫とあり、憲宗卽位の年按只解等と共に「務持兩端、坐誘諸王爲亂」並伏誅」とあり。者勒篾の子孫の顯れざるは、也孫帖額の誅せられたるが爲ならん。禿格は、卽卷四なる統格、木合黎の從弟に〜て、九十五の千戶の第十に列せり。その子不吉歹は、太祖に代りて許婚の璽に赴きたる不合台と音近けれども、同じきか否か知らず。）侍衛と共に箭筒士の班班に入り合ふ時、也孫帖額は、一班の箭筒士に長となりて入れ。不吉歹は、一班の箭筒士に長となりて入れ。豁兒

千箭筒士の長也孫帖額
八千侍衛の長八人
斡格列扯兒必
不合
阿勒赤歹

忽荅黑は、一班の箭筒士に長となりて入れ。剌卜剌合は、一班の箭筒士に長となりて入れ。（豁兒忽荅黑は、卷十二にも見え、剌卜剌合は、卷十二に剌巴勒合とあり。）箭筒を帶ぶるものに、侍衛の班班「に貼く」箭筒士に、かく長となりて入らせよ。箭筒士を千に滿たせて、也孫帖額長となりて居れ」と勅ありき。

前に斡格列扯兒必と入りたる侍衛の上に千に滿たせて「孛斡兒出の親族より斡格列扯兒必（孛斡兒出の弟）は知れ」と宣へり。「木合里の親族より不合（木合里の弟）は一千の侍衛を知れ」と宣へり。亦魯該の親族より阿勒赤歹に「一千の侍衛を知れ」と宣へり。（阿勒赤歹は、卷六に見えたる合赤溫の子阿勒赤歹と名同じけれども、異なる人なり。元史憲宗紀に按只解

朶歹扯兒必
朶豁勒忽扯兒必
察乃
阿忽台
阿兒孩合撒兒

とあり、憲宗即位の年、葉孫脫等と共に諸王を亂に誘へりとて誅せられたり。）「一千の侍衛を朶歹扯兒必知れ。一千の侍衛を朶豁勒忽扯兒必知れ」と宣へり。「一千の侍衛を主兒扯歹の親族より察乃知れ。一千の侍衛を阿勒赤の親族より阿忽台知れ。（阿勒赤は、即阿勒赤古咧堅、元史の國勇按陳那顏なり。阿忽台と云へる人は、元史に見えず。たゞ特薛禪の傳に、按陳の弟火忽と云へるは、甲戌の年に哈老溫迤東塗河潢河の間火兒赤納慶州の地を住所として賜はれること見ゆ。その火忽は、阿忽台の訛略にはあらずや。）一千の侍衛を阿兒孩合撒兒「知れ」。一千の選びたる勇士を知りて、多くの日は侍衛となれ。戰ふ日は前に立ちて勇士となれ」と勅ありき。（卷八なる九十五の千戶の處に、亦魯該は阿兒孩ならんと云ふ疑ひを陳べたれども、こゝに亦魯該の名ある續きに又阿兒孩合撒兒あるを見れば、同ド人とも思はれず。）千戶千戶より選びて來つるもの、八千の侍衛となれり。宿衛は、箭筒士

萬の番士よりなれる大中軍

と共に二千となれり。[三つ(宿衛箭筒士侍衛)幷せて]萬の番士となれり。成吉思合罕勅あるには「我等の身に貼ける萬の番士を勵まゝて大中軍となり居れ」と勅ありき。

番直の宿老四人不合阿勒赤歹朶歹朶豁勒忽

又成吉思合罕勅ありて、侍衛の四班の宿老たる者に任ゝ[不合は、一班の番士を知りて、番士を整へて入れ。阿勒赤歹は、一班の番士を知りて、番士を整へて入れ。朶歹扯兒必は、一班の番士を知りて、番士を整へて入れ。朶豁勒忽扯兒必は、一班の番士を知りて、番士を整へて入れ]とて、四班の宿老を任ゝて、番直に入る勅を傳へ「番直に入るには、番直の官人、己の處に番直する番士を點

番士の點檢

檢ゝて、番直に入りて、三たび宿り合ひて、代り合へ。番直ある(番直に當れる)人番直を脫さば、その番直を脫ゝたる番士に三つの笞を與へよ。その番士又二たび番直を脫さば、七つの笞を與へよ。又その人、身に病なく、番直の官人等に相談なく、又その番士三たび番直を脫さば、三十七の笞を與へて、我等の處に行くことを艱ゝとしたれば、[眼の]陰に遠き地に遣らん」と勅ありき。(番直の宿老、蒙語に客失昆斡脫古と云ひ、元史兵志には怯薛之長とあり。輟耕錄に曰く「國朝有四怯薛大官、怯薛者、分宿衛供奉之士爲四番、番三晝夜。凡上之起居飲食諸服御之政令、怯薛之長皆總焉」と云へり。)[番直の宿老は、第三第三の番直に(當番の三日目ごとに)この勅を番士に聽かせよ(明譯掌護衛)的官人、凡換班時、將

缺勤の罰

勅の言ひ聽かせ

宿老番士の同等

這言語省會一遍。聽かせずば、番直の宿老罪となれ。勅を聽きてありて越えば(犯さば)、勅の旨に依り、番直を脫さば、番士は罪となれ」と勅ありき。「番直の宿老は、長となられたりとのみ云ひて、同等に入りたる我が番士を我に相談無くて勿責めそ。法度を動さば、我に告げよ。斬らしむる理あるならば、我等は斬らしむるぞ。打たるゝ理あるならば、臥さしめて打つぞ。長となれりとのみ云ひて、同等の我が番士を己が手足を致して笞打たば、笞の報に笞を亦、拳の報に拳を亦回さん」と宣へり。

千戸より上にある番士

又成吉思合罕勅あるには「外に居る千戸の官人より我が番士は上に在るぞ。外に居る百戸十戸の官人より我が番士の家人は上にあるぞ。我が番士に、外に居る千戸ども、同等となりて竝びて、我が番士と毆ち合はば、千戸の人を罪せん」と勅ありき。

箭筒士侍衛厨官の勤方

又成吉思合罕勅ありて、班班の官人どもに勅を傳ふるには「箭筒士、侍衛等、番直に入りて、晝の行ひを各その道道に行ひて、日の光あるに宿衛に讓りて、外に出でて宿れ。我等の處に夜は宿衛宿り居れ。箭筒士は箭筒を、厨官は器皿を宿衛に渡〻て去れ。外に宿れる箭筒士、侍衛、厨官は、我等湯を飲むまで、惡馬處に坐りて、宿衛に

宿衛の勤方

屆けて、湯を飲み畢へば、箭筒士は箭筒の處に、侍衛は坐の處に、厨官は器皿の處に復り合へ。班班に入る者は、只只道理に依りこの體例に依りかく爲せ」と勅ありき。「日落ちたる後、斡兒朶の後より前より越え行く人を拏へて、宿衛は拏へて宿りて、明朝宿衛は彼の言を聞け。宿衛は、番直に代り合ふには、その符を渡して入りて來よ。代りて出づる宿衛も、渡して出でて去れ」と宣へり。「宿衛は、夜斡兒朶の周圍に臥〜て、門を壓へて立てる宿衛は、夜入る人をば、その頭を打割り、その肩を落つるほど斫りて去けよ。急ぎの話ある人夜來なば、宿衛

宿衛の威嚴

に話して、帳房の北より宿衛と一處に立ちて話さ〜めよ」と宣へり。「宿衛より上の坐には、誰も勿坐りそ。宿衛より言なくては、誰も勿入りそ。宿衛の上を誰も勿行きそ。宿衛の閒を勿行きそ。宿衛の數を勿問ひそ。宿衛の上を行く人を宿衛は拏へよ。閒を行く人を宿衛は拏へよ。數を問へる人をば、宿衛は、その人を、その日乘れる騸馬、鞍あり轡あるを、被たる衣服ごめに宿衛は取れ」と勅ありき。額勒只吉歹は、信任ある人なるに、夕に宿衛の上を行けるありて、宿衛にいかんぞ拏へられける。（額勒只吉歹は、合赤溫の子阿勒赤歹、卽世系表に按只吉歹とある人と名似たれども、異なる人なり。後文にも元史にも屢見ゆ。八十八功臣の中には見えず。か

の名前の内に阿勒赤と云ふ人あり、餘り名の聞えぬ人なり。阿勒赤吉歹の吉歹を脱〜たるにあらずやとも疑はる。）

成吉思汗實錄卷の九終り。

老宿衛

成吉思汗實錄卷の十。

成吉思合罕宣はく「雲ある夜、我が天窓ある房の廻り（額兀列）（幹嚕格）に臥〜て、靜に睡ら〜めて、この位に到らせたる老功（幹嚕克訥塔 溫塔兀勒）（幹嚕）（幹脫古思）の我が宿衛、星ある夜、我が帳殿の房の周圍に臥〜て、（幹兒朶）（幹嚕）（宿衛）（斡都）蒲團の内を驚かさざり〜慶ある我が宿衛は、高き位（幹嚕克）（幹黑札惕合）（幹勒澤）（溫都兒）（幹嚕）に到らせたり。變動し居る風雪に、顫か〜居る冷氣に、瀉（失勒只啷）（失勒古惕刊）（赤惕）ぎ居る雨に、我が編壁ある房の周圍に休を爲さず立（渾）（失勒帖速）（只咻）ちて心を安から〜めたる誠の心ある我が宿衛は、快（只咻格）（申）（只兒）活なる位に到らせたり。亂れ居る敵の中に、我が土堤（倉鄙）（亦不命）（亦兒格）ある家の周圍に、瞬もせず勸めて立ちたる賴ある我（希兒篤思）（亦惕合）（亦帖格勒）

が宿衛、樺皮の箭筒を動し（兀亦勒孫）爲せば後れて立たざり〳〵快（忽兒）（都只惕）く行く我が宿衛、慶ある我が宿衛ども（敦）を老宿衛（老功の宿衛士）と云へ。斡歌列扯兒必と入りたる七十の侍衛ども（侍衛）を大侍衛と云へ。阿兒孩（即ち阿兒孩合撒兒）の勇士ども（老勇士）を老勇士と云へ。也孫帖額、不吉歹等の箭筒士ども（大箭筒士）を大箭筒士と云へ」と勅（愛撫すべき萬の番士）ありき。

「我が九十五の千戸より身に貼く近臣に選びて來つる萬の親近なる我が番士を、久後我が位に坐りたる子ども、我が子孫の子孫は、この番士を遺念の如く想ひて、怨み〳〵めず、善く扱へ。この萬の番士を我がめでたき福の神と云ひて居らずや」と宣へり。

又成吉思合罕宣はく「斡兒朶の侍女（蒙語 扯兒賓斡乞惕、侍從の女）家僮（蒙語 格喻可兀惕、家の子）駱駝飼（蒙語 帖篾額臣、元史兵志に「牧駱駝者曰帖蔑赤」とあり。）牛飼（蒙語 忽客臣）を宿衛は取締めて、斡兒朶の房車を調へよ。器皿（宿衛の雜務）鎗を宿衛調へよ。蠶鼓朶囉（明本語譯には下とあれども解する能はず。）を宿衛調へよ。我等の飲物食物を宿衛支度せよ。稠き肉の食物をも宿衛支度〳〵て煑よ。飲物食物不足とならば、支度せられたる宿衛に尋ねよ」と宣へり。「箭筒士に飲物食物を配るに、支度〳〵たる宿衛に相談無くて勿配りそ。食物を配るに、まづ宿衛より始めて配れ」と宣へり。

宿衛の軍を出さざる理由

[斡兒朶の房に入り出づるを宿衛整へよ。門には宿衛の門者(蒙語額兀迭臣)家に倚りて立て。宿衛より二人入りて大酒局を執りて居れ」と宣へり。宿衛より營盤官(蒙語嫩禿兀臣)行きて斡兒朶の房を下せ(据るっけよ)」と宣へり。「我等鷹使ひ圍獵する時、宿衛は我等と共に鷹使ひ圍獵〜に行け。車に[獲物の]半を分けて置け」と宣へり。(元史兵志に「預怯薛之職而居禁近者、分冠服弓矢食飲文史車馬廬帳府庫醫藥卜祝之事、悉世守之、雖以才能受任使、服官政貴盛之極、一日歸至內庭、則執其事如故、至於子孫無改、非甚親信不得預也」とあり。)

又成吉思合罕宣はく「我等の身、軍に出でずば、宿衛は、我等より外に軍に勿出でそ」と宣へり。「かく云はれて、勅を越えて宿衛を嫉みて軍を出すものあらば、軍を知れる扯兒賓罪あるとなれ」と勅ありき。「宿衛の軍はいかんぞ出されざると云へるぞ、汝等。宿衛は、但我等の金の命を守るなり。鷹狩圍獵に行く時、働き合ふなり。斡兒朶を預けられて、起つ時靜なる時車を調ふるなり。我が身を守りて宿ること容易からんや。家車大老營を、起つ時居る時調ふること容易からんや。かく重き離れ離れの働きあることを云ひて、「我等より外に別に軍に勿行きそ」と云へるは、かくあるぞ」と宣ひき。

宿衛の陪審また雜務

又勅あるには「失吉忽禿忽の裁斷に、宿衛より「人を

出して」裁斷を共に聽け」と宣へり。「宿衛より箭筒弓甲器械を調へて配り合へ。騸馬を調へて綱索を馱けて行け」と宣へり。「宿衛より扯兒賓と共に段匹を配れ」と宣へり。「箭筒士侍衛の營を告ぐる(定む る)には、也孫帖額不吉歹等の箭筒士、阿勒赤歹斡歌列阿忽台等の侍衛は、斡兒朶の右の邊に行け」と宣へり。「豁兒忽荅黑剌卜剌合等の箭筒士」不合、朶歹扯兒必、多豁勒忽扯兒必、察乃等の侍衛は、斡兒朶の左の邊に行け」と宣へり。「阿兒孩の勇士どもは、斡兒朶の前に行け」と宣へり。「宿衛は、斡兒朶の家車を調へて、斡兒朶の前の左の邊に行け」と宣へり。

斡兒朶の右左前なる箭筒士侍衛の屯營

(明譯には帳殿根前左右とあり。原文左の下に右の字脱ちたるなるべし。)「許多の番直する侍衛を、斡兒朶の周圍、斡兒朶の家僮を、馬飼(蒙語阿都兀臣)羊飼(蒙語豁你臣、元史兵志に「牧羊者曰火你赤」とあり。)駱駝飼牛飼を、常に朶歹扯兒必、氣を付けて居れ」と任し給へり。「朶歹扯兒必は、常に居て、斡兒朶の後(豁亦納)より枯草(豁黑)を喫ひて乾糞(豁馬兀兒)を燒きて行け」と勅ありき。(末の一語は、掃除せよとの意なるべきか。確ならず。朶歹扯兒必は、一千の侍衛の長にて、番直の宿老卽ち四怯薛長の一人となり、兼ねて殿中監の職務をも執れるなり。この職務は、太祖始めて合罕となれる時家の內の婢僕どもを統べん」と云へるに同じ。)

殿中を監視する朶歹扯兒必

忽必來那顏に合兒魯兀惕を征けさせたり。合兒魯兀惕の阿兒思闌罕は、忽必來に降り來ぬ。忽必來那顏は、阿兒思闌罕を率ゐ來て、成吉思合罕に見えさせたり。敵對せ

合兒魯兀惕の降附

ざりきとて、成吉思合罕は、阿兒思闌を恩賞〜て、「女を與へん」と勅ありき。（合兒魯兀惕は、合兒魯黑の複稱、唐書の葛邏祿なり。葛邏祿は、鐵勒諸部の一に〜て、唐の世に北庭の西北金山の西に居り、その盛なる時は碎葉怛邏斯の諸城をも有ち〜が、宋の世に至りて國衰へ、西遼の屬國となれり。烏古孫仲端の北使記、元史鐵邁赤の傳に合魯、親征錄太祖紀、沙全の傳、儒學伯顏の傳に哈剌魯、哈剌解の傳に哈魯、也罕的斤の傳に匣剌魯とあり。輟耕錄の色目三十一種の中には哈剌魯とも書けり。珀兒沙の亦思塔黑哩の書には喀兒列怯、普剌諸喀兒闌尼の紀行には科羅剌と云へり。元史地理志の西北地附錄には柯耳魯とありて、經世大典の圖に、柯耳魯は阿力麻里即ち阿勒馬里克（今の伊犂）の西北に載せたり。親征錄に「辛未春、上居法綠連河」時、西域哈剌魯部主阿昔蘭可汗來歸、因忽必來那顏見上」とあり。元史も、太祖六年辛未の條にこの事を記せり。多遜は、主吠尼の史を譯〜て「突兒克喀兒魯克の酋長に〜て喀牙里克の君なる阿兒思闌汗、阿勒馬里克の君なる斡匪兒、二人ともに合喇乞台の古兒汗の臣なり〜が、一二一一年來て成吉思汗に從ひ、成吉思汗は、阿兒思闌に宗女を與へたり」と云へり。喇失惕の記載は、祕史に同ドく〜て、只皇女をば主吠尼と同ドく宗女と〜「阿兒思闌汗の號存すべからざるに依り、撒兒惕の號を賜へり」と云へり。合兒魯兀惕の罕は喀牙里克の君を兼ぬとあればその國は、喀牙里克の邊、即ち巴勒喀什湖の東南にあるべ〜。喀牙里克は、嚕卜嚕克の紀行に喀赤剌克と云ひ、元史憲宗紀「二年夏、分遣諸王於各所」の條に「海都於海押立地」とありて、太宗の孫なる海都の分

合兒魯黑の異文

喀牙里克の君を兼ぬる合兒魯黑罕

地となり、海都の亂に世祖の兵は阿勒馬里克に進み、阿剌套山を隔てて相對〜居たり。大佐裕勒は「その地は、今の闊帕勒に近〜」と云へり。一八五七年、ある塔塔兒人は、闊帕勒の古墳より古き金環を寶石と共に發見〜、その金環に突兒克字にて阿兒思闌と刻みてあり〜は、珍ら〜き堀出物なりき（露西亞の地學協會の報告、一八六七年第一編第二百九十ページ）。諸公主表に「脫烈公主、適阿爾思蘭子也先不花駙馬」とありて、皇女とも宗女とも云はず。又表には阿兒思闌を駙馬と云はざれども、諸書みな阿兒思闌に妻せたりとあれば、これも先に阿兒思闌に配〜、後にその子に配〜たるを、公主表は諱みて後の駙馬のみを擧げたるならん。又脫烈公主の次に「八公主、適也先不花子忽納荅兒駙馬」、某公主、適忽納荅兒子剌海涯里那駙馬」とあれば、阿兒思闌の後は、曾孫までも世世元の駙馬となり〜なり。）

世世元の駙馬

速別額台巴阿禿兒は、鐵の車にて、篾兒乞惕の脫黑脫阿の忽禿赤剌溫等なる子どもを追ひに出征〜て、垂河に追詰めて窮めて來ぬ。

篾兒乞惕の遺孽の勦滅

（親征錄に曰く「辛未、遣將脫忽察兒、率騎二千出哨西邊、戊丁丑、上遣大將速不台拔都、以鐵裹車輪、征蔑兒乞部、與先遣征西前鋒脫忽察兒二千騎合、至嶄河、遇其長大戰、盡滅蔑兒乞、還」と云ひ、喇失惕も、この戰を記〜て牛の年の事とし、嶄河を眞河と書けり。元史本紀は、三年戊辰の也兒的石河の戰に「討蔑里乞部、滅之」と書きて、十二年丁丑には速不台の征戰を載せず。速不台の傳に曰く「滅里吉部、強盛不附。丙子、帝

丁丑の年なる嶄河の戰

哲伯令、曷思麥里、持曲出律首、往徇其地。若可失哈兒押兒牽斡端諸城皆臨風降附」と
あり。谷則斡兒朶は、大城の義にして、垂河(今の楚河)の濱に在りて西遼の都なり。遼
史天祚紀に虎思斡耳朶、金史粘割韓奴の傳に骨斯訛魯朶、耶律楚材の西游錄に虎司
窩魯朶と書けり。或は古思を略きて斡兒朶とのみも云へり。元好問の大丞相劉氏先
塋の碑、元史郭寶玉の傳に、訛夷朶とあるは、兒を夷と誤りたるなり。闊兒罕は、秘史
卷五の古兒罕、親征錄の菊律可汗なり。遼史に記せる如く、大石林牙卽位して葛兒罕
と號してより、子孫みなその號を襲ぎたるなり。可散は、西游錄に可傘と書き、經世
大典の圖には柯散と書きて、察赤(今の塔什干)の東南に在り。露西亞の地圖には、塔
什干の東南に今も喀散城あり。曷思麥里は、者別に降れるにて、この時太祖は未だ
親征せざれば、傳に太祖西征とあるは誤れり。可失哈兒は今の喀什噶爾、押兒牽は今
の葉爾羌、斡端は今の和闐なり。)

委兀惕降附の使

委兀惕の亦都兀惕は、成吉思合罕に使を遣りき。(この事は、

親征錄集史元史、みな秘史より委し。親征錄にまづ「己巳(太祖四年)春、畏吾兒國主亦都護、聞上威名、遂殺契丹主所置監國沙監」とあり。亦都護は、卽ち亦都兀惕、委兀惕の王號にして、集史には亦的庫惕と云へり。この亦都兀惕の名は、巴而朮阿而忒的斤と云ひ、元史に傳あり。哈剌亦哈赤北魯の傳には、八兒出阿兒忒亦都護とあり。契丹は、合喇乞塔惕、卽ち西遼にして、岳璘帖穆爾の傳には西契丹とあり。西遼の畏兀を威制したること、畏兀の叛きてその監國を殺したる事情は、哈剌亦哈赤北魯、岳璘帖穆爾

親征錄なる亦都護降附の始末

二人の傳に見ゆ。さて親征錄に、監國を殺したる處へ、太祖の使二人至りたれば、亦
都護喜びて、使二人を遣り降附の意を奏さしめき。この時蔑里乞の脫脫より使至
りたるを、亦都護はその使を殺して、又脫脫の子四人は、父を失ひ、也兒的石河を涉り
て至りたるを崭河にて禦ぎ戰へり。この戰は、秘史卷八の初にある不黑都兒麻の
戰に續きて、額兒的失河にて多數溺れてより西に奔るまでの間にあり。事なり。
崭河は、巴兒朮の傳に澹河とあり、古の昌八里に傍ひて流るゝ昌河、卽ち今の昌吉
河にして、委兀惕の都城の西にあり。太祖十二年丁丑に速不台の戰へる崭河、速不台
の傳に蟾河とあるものとは、名同じくして實は異なり。この戰の後、亦都護は使四
人を遣り蔑里乞の事を告げたれば、太祖は又前の使二人を遣り、亦都護は復
使を遣り珍寶方物を奉れりとあり。これらの事を皆太祖四年の事とせり。)

惕乞喇黑(親征錄に乞力吉思の二使の一人を阿惕黑剌黑と云へば、修正秘史は、委兀惕の使を乞兒吉思
吉思の使と改めたるに似たり。)荅兒伯(喇失惕は、太祖の二使の一人を迭兒拜と云へり。親征錄
初に荅拜とあるは、兒の字を落せるなり。後に荅兒班
とあるは、拜を班と誤れるなり。これも委兀惕の使を太祖の使に混らしたるなり。)二人を使として遣る

雲開見日
冰泮得水

には雲霽れて母なる日(母の如き太陽)を見たるが如く、冰解け河の水を得たるが如く、成吉思合罕の名と聲とを

會諸將於禿兀剌河之黑林、問誰能爲我征滅里吉者、速不台請行、帝壯而許之、乃選裨將阿里出、領百人先行、覘其虛實、速不台繼進云云、己卯、大軍至蟾河、與滅里吉遇、一戰而獲其二將、盡降其衆、其部主霍都奔欽察、速不台追之、與欽察戰于玉峪敗之」とあり。丙子は十二年丁丑の前年、己卯は丁丑の二年後に〜て、親征錄集史と年紀合はず。多遜は、嶄河を哲姆河と書き、その戰を一二一六年卽ち丙子の事とせり。諸書を合せ考ふるに、蓋子の年に軍を出〜、丑の年に垂河に戰ひ、卯の年に餘孽悉く平ぎたるならん。親征錄の嶄河、喇失惕の眞河、多遜の哲姆河、速不台の傳の蟾河は、祕史の垂河と同じきか異なるか、知らず。霍都の欽察に奔れることは、卷八にも

康鄰に奔れる忽都

「忽都合惕赤剌溫等の篾兒乞惕は、康鄰・欽察・兀惕を過ぎ去りき」と云ひ、土土哈の傳には「太祖征蔑里乞、其主火都奔欽察。欽察國主亦納思納之。太祖遣使諭之云云、亦納思答云云。太祖乃命將討之」とあれども、西域の諸史には更にその事なし。喇失惕は「忽都は乞魄察克に奔らん」と〜たるを、蒙古の軍に捕へ殺されたり」と（別咧津卷一第七十三頁に）云ひ、多遜の史には「篾兒乞惕の酋禿克脫干は、蒙古に逐はれ、衆を率ゐて甄篤の北に走り、その下に殺され、蒙古はその衆を海哩哈米赤兩河の間に敗りて滅ぼせり」とあれば、「篾兒乞惕の走りて康鄰の地に入りたるは、實ら〜けれども、欽察に奔れりと云へるは、傳聞の誤りなるべし。）

古出魯克罕の剿滅

者別は、乃蠻の古出魯克罕を追ひて、撒哩黑昆に追詰めて、古出魯克を窮めて來ぬ。（親征錄戊寅（太祖十三年）木華黎國王南征の次に「別遣大將哲別攻曲出律可汗、至撒里桓地克之」とありて、その簡略なること祕史と同じ。遼史天祚紀の末に西遼の興亡を附記し、遼の德宗耶律大石の自立より大石の妻感天太后塔不煙、その子仁宗夷列、夷列の妹承天太后普速完を歷て、夷列の子直魯古に至り、「直魯古卽位、改元天禧、在位三十四年。時秋出獵、乃蠻主屈出律、以伏兵八千擒之、而據其位、襲遼衣冠、尊直魯古爲太上皇、皇后爲皇太后、朝夕問起居、以侍終焉。直魯古死、遼絕」とあり。屈出律は、卽ち古出魯克にして、その西遼に奔れるは、親征錄主吠尼に據るに、太祖三年戊辰、西紀一二〇八年にあり。古出魯克の西遼を簒へるは、錢大昕の考證と主吠尼の史とに據るに、太祖六年辛未、西紀一二一一年にあり。直魯古の死は主吠尼喇失惕の書に據るに、國を奪はれて憂悶し、二年を歷て病死したるなり。長春の西游記に「自金師破遼、大石林牙領衆數千走西北、移徙十餘年、方至此地云云。延袤萬里、傳國幾百年。乃滿失國依大石、士馬復振、盜據其土。繼而算端西削其地、天兵至、乃滿尋滅、算端亦亡」と云へり。林牙は學士を呼ぶ契丹語にして、耶律大石の舊官なり。乃滿失國依大石とは、乃蠻の古出魯克逃げて大石の立てたる國に依れるを云ふ。算端西削其地とは、闊喇自姆の君速勒壇抹哈篾惕、西遼の舊境失兒河以南を取れるを云ふ。乃滿尋滅は、古出魯克の滅びたるなり。算端亦亡は、この戊寅の年より二年後にあり。撒哩黑昆は、集史に撒哩黑庫勒とあり。今は撒哩庫勒と呼び、葉兒羌河の上流にあり、西は直に露西亞の領地に接す。古出魯克の事蹟は、主吠尼喇失惕の二書に詳なり。元史には只曷思麥里、西域谷則斡兒朶人。初爲西遼闊兒罕近侍、後爲谷則斡兒朶所屬可散八思哈長官。太祖西征、曷思麥里率可散等城酋長迎降。大將哲伯以聞。帝命曷思麥里從哲伯爲先鋒、攻乃蠻克之、斬其主曲出律、

古出魯克の西遼簒奪

曷思麥里の傳の考證

哲伯、令曷思麥里、持曲出律首、往徇其地。若可失哈兒押兒牽斡端諸城、皆臨風降附」と あり。谷則斡兒朶は、大城の義にして、垂河(今の楚河)の濱に在り。西遼の都なり。遼史天祚紀に虎思斡耳朶、金史粘割韓奴の傳に骨斯訛魯朶、耶律楚材の西游錄に虎司窩魯朶と書けり。或は古思を略きて斡兒朶とのみも云へり。元好問の大丞相劉氏先塋の碑、元史郭寶玉の傳に、訛夷朶とあるは、兒を夷と誤りたるなり。闊兒罕は、祕史卷五の古兒罕、親征錄の菊律可汗なり。遼史に記せる如く、大石林牙卽位して葛兒罕と號してより、子孫みなその號を襲ぎたるなり。可散は、西游錄に可傘と書き、經世大典の圖には柯散と書きて、察赤(今の塔什干)の東南に在り。露西亞の地圖には塔什干の東南に今も喀散城あり。曷思麥里は、者別に降れるにて、この時太祖は未だ親征せざれば、傳に太祖西征とあるは誤れり。可失哈兒は今の喀什噶爾、押兒牽は今の葉爾羌、斡端は今の和闐なり。)

委兀惕降附の使

委兀惕の亦都兀惕は、成吉思合罕に使を遣りき。(この事は、

親征錄集史元史、みな祕史より委〜。親征錄にまづ「己巳(太祖四年)春、畏吾兒國主亦都護、聞上威名、遂殺契丹主所置監國沙監」とあり。亦都護は、卽ち亦都兀惕、委兀惕の王號にして、集史には亦的庫惕と云へり。この亦都兀惕の名は、巴而朮阿而忒的斤と云ひ、元史に傳あり。哈剌亦哈赤北魯の傳には、八兒出阿兒忒亦都護とあり。契丹は、合喇乞塔惕、卽ち西遼にして、岳璘帖穆爾の傳には西契丹とあり。西遼の畏兀を威制したること、畏兀の叛きてその監國を殺したる事情は、哈剌亦哈赤北魯、岳璘帖穆爾

親征錄なる亦都護降附の始末

二人の傳に見ゆ。さて親征錄に、監國を殺したる處へ、太祖の使二人至りたれば、亦都護喜びて、使二人を遣り降附の意を奏さしめき。この時蔑里乞の脫脫より使至りたるを、亦都護はその使を殺し、又脫脫の子四人は、父を失ひ、也兒的石河を涉りて至りたるを嶄河にて禦ぎ戰へり。この戰は、祕史卷八の初にある不黑都兒麻の戰に續きて、額兒的失河にて多數溺れてより西に奔るまでの間にあり。事なり。嶄河は、巴兒朮の傳に澹河とあり、古の昌八里に傍ひて流るゝ昌河、卽ち今の昌吉河にして、委兀惕の都城の西にあり。太祖十二年丁丑に速不台の戰へる嶄河、速不台の傳に蟾河とあるものとは、名同じくして實は異なり。この戰の後、亦都護は使四人を遣り蔑里乞の事を告げたれば、太祖は又前の使二人を遣り、亦都護は復使を遣り珍寶方物を奉れりとあり。これらの事を皆太祖四年の事とせり。)

阿惕乞喇黑(親征錄に乞力吉思の二使の一人を阿惕黑剌黑と云へば、修正祕史は、委兀惕の使を乞兒吉思の使と改めたるに似たり。)

荅兒伯(喇失惕は、太祖の二使の一人を迭兒拜と云へり。親征錄初に荅拜とあるは兒の字を落せるなり。後に荅兒班とあるは、拜を班と誤れるなり。これも委兀惕の使を太祖の使に混ら〜たるなり。)

二人を使と〜奏して遣るには、雲霽れて母なる日(額兀速)(母の如き太陽)(額客)を見たるが如く、冰解け河の水を得たるが如く、成吉思合罕の名と聲とを

(木嗹)

雲開見日
冰泮得水

金帶之星裝
袞衣之餘縷

聞きて甚歡べり。成吉思合罕恩賜せば、金の帶の締金よ（阿勒壇不薛　忽兒帖孫）り大紅衣の帛片より得ば（分與せられば）、爾の第五の子となりて力を與へん」と奏〜て遣りき。（親征錄は、この辭を二章に分けて、辭句を增〜加へ、前章は、亦都護の始めて二使を遣りたる時の辭とせり、その前章は「臣國開皇帝威名、故棄契丹舊好、方將遣使來通誠意、躬自效順、豈料遠辱天使、降臨下國、譬雲開見日、冰泮得水、喜不勝矣、而今而後、盡率部衆、爲僕爲子、竭犬馬之勞也」と云ひ、その後章は、陛下若恩賜臣使、遠者悉聞、近者悉見、綴袞衣之餘縷、摘金帶之星裝、誠願在陛下四子之亞、竭其力也」と云へり。喇失惕も、殆ど之に同じ。）その言につき、成吉思合罕恩賜〜て答へ宣ひて遣るには「女をも與へん。第五の子となれ。金銀眞珠東珠金襴總金襴段匹を持ちて亦都兀惕來よ」と宣ひて遣れば、亦都兀惕は、恩賜せられたりとて喜びて、金銀眞珠東珠段匹金襴總金襴緞子

亦都兀惕の來朝貢獻

を持ちて、都兀兀惕來て、成吉思合罕に見えたり。（親征錄は、「寶を持ち來よ」と太祖云へりとは云はず、太祖の使二たび往きたる時、亦都護の使復至りて珍寶方物を奉れりとあり、かくてそれより二年を歷て、辛未（太祖六年）の春、哈剌魯部主阿昔蘭可汗の來朝と同じ時に、亦都護來朝〜て、彼の袞衣金帶の辭を陳べたれば、「上說其言、使尙公主、仍序第五」とあり。）成吉思合罕は、亦都兀惕に恩賜〜て阿勒阿勒屯を與へたり。（元史巴而朮阿而忒の傳は、全く親征錄に本づきたれども、巳の年の使者の辭より「雲開見日、冰泮得水」の語を略き、また「辛未、朝帝于怯綠連河、奏曰「陛下若恩顧臣使臣得與陛下四子之末、庶幾竭其犬馬之力」帝感其言、使尙公主也立安敦、且得序於諸子」とありて、袞衣金帶の語を略きたれば、亦都兀惕の辭命と〜て祕史に載せられたる面白き韻文は、骨拔泥餡となれり。公主表高昌公主位の處に「也立可敦公主、太祖女、適亦都護巴而述阿兒忒的斤」とあり。可敦は、安敦の誤、也立安敦は、卽ち阿勒阿勒屯なり。喇失惕は、正后の出にあらずと云へり。）

阿勒阿勒屯の下嫁

拙赤の北征

兎の年（我が土御門天皇承元元年丁卯、宋の開禧三年、金の泰和七年、元の太祖二年、西紀一二〇七年、太祖四十六歲の時）、拙赤を右の手の軍にて林の民の處に出征せ〜めたり。不合

は、嚮導して往きたり。（親征錄には、この年「遣案彈不兀剌二人、使乞力吉思部」とありて、拙赤北征の事なし。拙赤北征の事は、この年より十一年後なる戊寅の年（太祖十三年）、哲別の曲出律を滅したる次に記し、「先吐麻部叛、上遣徵兵乞兒乞思部、不從、亦叛去、遂先命大太子往討之、以不花爲前鋒」とあり、集史もほゞ同じ。不花は卽ち不合、八十八功臣の中なる不合駙馬なり。）

忽都合別乞の降附

幹亦喇惕の前に降り入りて來ぬ。

幹亦喇惕不哩牙惕諸部の降附

（前に十一部の亂に加はりたる人）は、禿綿（萬の）幹亦喇惕の處に導きて、失黑失來て拙赤を引きて、禿綿幹亦喇惕の處に導きて、失黑失惕に入らしめたり。（親征錄には、丁卯の年、乞力吉思部降附し、その翌年戊辰の冬、二たび脫脫曲出律を征する時「幹亦剌部長忽都花別吉等、遇我前鋒、不戰而降。因用爲鄉導、至也兒的石河云云」とありて、拙赤に降れる忽都合を脫黑脫阿征伐の軍に降れりとせり。喇失惕も同じ。洪鈞の朮赤補傳の自注に曰く「本紀、幹亦剌之降在二年、而乞力吉思之附在二年。考之西圖、應從秘史。先定幹亦剌、由東而西、軍程乃合」と云へり。）拙赤は、幹亦喇惕不哩牙惕巴兒渾兀兒速惕合卜合納思康合思禿巴思を降して、（喇失惕の書に「客姆河の上流に八河ありて、幹亦喇惕は、その左に居り、その近き東に兀喇速惕帖連郭惕客思的米なる林の民は、拜喀

勒湖の西に居りて、幹亦喇惕乞兒吉思と鄰り合へり」また「拜喀勒湖の東に庫哩禿剌思不哩牙惕禿馬惕四部あり、都て巴兒古惕と云ふ」と云へり。巴兒渾は、卽ち巴兒古惕にて、卷一にその部の人巴兒忽歹簸兒干あり。太祖紀に八剌忽とあるも、巴兒古惕なり。喇失惕は、四部の總名とすれども、こゝに不哩牙惕と並べ擧げたれば、一部の名にも用ひたるなり。兀兒速惕は、卽ち兀喇速惕なり。合卜合納思は、元史類編なる朮赤の傳に大方通鑑を引きて憾哈納思とあり。親征錄に憾哈思とあるは、納の字を脫せるなり。元史地理志には撼合納、劉哈剌拔都魯の傳には慨哈納思と書けり。その地の事は、元史譯文證補の地理志西北地附錄釋地の下に詳なり。康合思禿巴思は、知らず。）

乞兒吉速惕の降附

禿綿乞兒吉速惕の處に到れば、（乞兒吉速惕は、乞兒吉思の複稱なり。多遜曰く「乞兒吉思の住める地は甚廣く、安噶喇河の西、阿勒台山の北の東よりに居り、乃蠻はその南東にあり、客姆河、客姆河、客姆主惕はその境內にあり。俗は遊牧なれども、城郭もあり」と云へり。）乞兒吉速惕の官人也迪亦納勒、阿勒迪額兒、斡列別克的斤なる乞兒吉速惕の官人ども降り入りて、白き海青ども白き騸馬ども黑き貂鼠どもを持ち來て、拙赤に見えたり。（親征錄には「遣案彈不兀剌二人、使乞力吉思部。其長斡羅思亦難及阿忒里剌二人、偕我使來、獻白海青名鷹也」太祖紀には「野牒亦納里部、阿里替也兒部皆遣

「使來獻名應」とありて、本書と異なり。別咧津は、喇失惕を譯して「阿勒壇不剌の二人乞兒吉思に使し、まづ一部に至り」と云ひて、「部の名も酋長の名も、文字見えず」と注し、次の一部を也迪斡侖、酋長を兀嚕思、亦納勒と云ふ。二酋厚くもてなし、阿里克帖木兒阿惕黑喇黑二人を遣して白き獵鳥を獻れり」と云へり。錄の亦難紀の亦納里は、亦納勒の訛なり。多遜は、喇失惕を引きて「亦納勒は、乞兒吉思にて酋長を稱する號なり」と云へば、也迪亦納勒は、也迪部の酋長と云ふことにて、兀嚕思又は斡囉思は、その名なるべし。名の見えざる酋長は、阿勒迪額兒ならん。元史は、二つともに人の名を部の名に誤れり。阿里克帖木兒は、額兒篤曼の譯に阿里別克帖木兒とあり、卽ち斡列別克的斤なり。祕史に無き一使を阿惕黑喇黑と云へるに據れば、錄の阿忒里剌は、黑を里に誤りたるにて、祕史の委兀惕の使を修正祕史は乞兒吉思に移せるなり。）

失必兒以南林民の降附

失必兒客思的音巴亦惕禿合思田列克脫額列思塔思巴只吉惕より這廂なる林の民を拙赤降〜て、乞兒吉速惕の萬戶千戶の官人どもを林の民の官人どもを伴れ來て、成吉思合罕に白き海青ども白き騸馬ども黑き貂鼠どもをもて見えさせたり。（失必兒は、今の昔別哩亞なり。喇失惕は、乞兒吉思の事を述べて「その國は、阿別兒昔必兒の境に流るゝ安噶喇の大河まで廣がれり」と云ひ、元史玉哇失の傳に「與海都將某某等戰於亦必兒失必兒之地」とあり。簽撒列克阿剌卜撒兒（第十四世紀の前半の人）は、昔必兒卽阿必兒と書き、亦奔阿喇卜沙は「乞魄察克は、北は阿必兒卽昔必兒に界す」と云へり。合塔蘭地圖の北邊の薛不兒は、明に昔必兒を表せり。西紀一三九四年より一四二七年まで亞細亞の諸國に遊び、帖木兒大王の遠征にも伴ひし失勒篤別兒格兒の書きたるものには、亦必思昔不兒と云ふ國の名あり。然れどもこの昔必兒の名は、直に今の昔別哩亞となれるに非ず。第十六世紀の頃、亦兒的石河の濱にて今の脫孛勒思克より四里餘り河上に、昔必兒と云へる塔塔兒の城ありて、一五八一年に也兒馬克に取られ、その後嚕西亞人はその名を採りて北亞細亞の總名に推廣めたり。客思的音は、親征錄に克失的迷とあり、卽喇失惕の客思的米なり。田列克は、卷八に帖良古惕、親征錄に帖良兀とあり、卽喇失惕の帖連郭惕なり。不咧惕施乃迭兒は「帖連古惕は、唐書の鐵勒より出でたるならん」と云へり。脫額列思は、卷八に脫斡列思とあり、卽喇失惕の禿刺思なり。巴亦惕禿合思塔思巴只吉惕は、未考へず。親征錄なる戊寅朮赤北征の條には「以不花爲先鋒、追乞兒吉思、至亦馬兒河而還。大太子領兵涉謙河冰順下、招降不困克兒爲思、憾哈思帖良兀克失的迷火因亦而干諸部」とあり。亦馬兒河は知らず。謙河は卽客姆河、今の也尼塞河の上流なり。不困克兒爲思は、讀み難し。恐らくは誤脫あらん。火因亦而干は、祕史には槐因亦兒堅とあり。槐因は林の亦兒堅は民にて、林の民なり。卽諸部の統名にして、部の名に非ず。）

巴只吉惕は失必兒の西にある部落なり卷十一なる速別額台西征の條に注あり

昔別哩亞の名の起り

幹亦喇惕の駙馬兄弟

惕の忽都合別乞を迎へ「先に降り、禿綿幹亦喇惕を牽ね

て來ぬ」とて恩賜して、彼の子亦納勒赤に扯扯亦干を與へたり。亦納勒赤の兄脫咧勒赤に拙赤の女豁雷罕を與へたり。（喇失惕は「成吉思汗の第二の女扯扯干は、忽禿合別乞の子脫喇勒赤に嫁げり」と云へり。扯扯干は卽扯扯亦干なれども、脫喇勒赤は亦納勒赤に非ず〜て、却てその兄脫咧勒赤に似たり。公主表もそれに同じく、延安公主位の處に「闊闊干公主、適脫亦列赤駙馬」とあり。然らば豁雷罕の夫を亦納勒赤とするかと云ふに、然らず。闊闊干公主の前に「火魯公主、適哈荅駙馬」とありて、火魯は、豁雷罕の下略に似たれども、哈荅は、亦納勒赤にも脫咧勒赤にも似ず。錢大昕の氏族表は、祕史と元史とを折衷し、「哈荅、一作脫劣勒赤、尙太祖孫女火雷公主」「脫亦列赤、一作亦納勒赤、尙太祖女闊闊干公主」と書きたれども、哈荅は、八十八功臣の內に既に合歹古咧堅とありて、卷十二にも合歹あり、親征錄の哈台、憲宗紀の合荅、多遜の喀荅克などみなこの哈荅なるべく、脫咧勒赤は、八十八功臣の定まりたる後に降附して駙馬となれる人なれば、その別人なること明なり。然れども哈荅合歹を脫咧勒赤に非ずとし、火魯火雷を豁雷罕に非ずとすれば、又不都合なることあり。火魯公主は、闊闊干公主と共に、公主表延安公主位の初に擧げられ、その次に公主三人ありて、末に「延安公主、適延安王也不干」とあり、食貨志には「火雷公主位、丙申年、分撥延安府九千七百九十六戶」とあり、闊闊干は卽扯扯干扯扯亦干に〜て、斡亦喇惕の忽都合別乞の子に嫁ぎたること確なる上は、延安王の家は、卽忽都合の子孫に〜て、火雷公主は、始めてその家に嫁ぎたる人なれば、その夫は必ず斡亦喇惕の首領なるべし。然らずば延安公主位を火雷公主位とも云ふべき筈なし。然らば哈荅合歹は、果〜て脫咧勒赤なるか。この疑ひは、いかに考へても解き得ず。）阿剌合別乞（元史の阿剌海別吉公主）を汪古惕（汪古惕の阿剌忽失的吉惕忽哩古咧堅）に與へたり。（この事につきては、卷八に委〜く論じたり。九十五〜時なれども、後の稱號に依り古咧堅と書きたるなり。）成吉思合罕は、拙赤を恩賞して宣はく「我が子どもの兄なる汝は、家より纔に出でて、道好くある（道の遠き）往きたる地に、男騸馬を傷けず苦めず〜て、福ある林の民を降〜て來ぬ。民を與へん」と勅ありき。

又孛囉忽勒那顏（親征錄博羅渾那顏元史太祖紀鉢魯完）を豁哩禿馬惕の民の處に出征せ〜めたり。（豁哩禿馬惕は、卷一に見えたり。豁哩は、善と云ふ美稱なれば、常には略きて只禿馬惕と云ふ。親征

脫咧勒赤と哈荅との同異

汪古惕の駙馬

拙赤初陣の功

孛囉忽勒の禿馬惕征伐

勇婦孛脫灰

錄には吐麻部、元史本紀には禿滿部とあり。兵志三には火里禿麻ともあり。）禿馬惕の民の官人歹都忽勒莎豁兒死にたれば、その妻孛脫灰塔兒渾（孛脫灰勇婦）は、禿馬惕の民を知りて居りき。（歹都忽勒莎豁兒は、明譯文に歹都禿勒とあり、忽を禿に誤り、莎豁兒を略けり。倭勒甫の書に塔禿刺克速喀兒とあるは、音稍近けれども、刺克は、忽勒を倒にせるに似たり。親征錄に都刺莎合兒とあるは、都の上歹又は塔を脫し、刺の下克の字を略けるなり。）

孛囉忽勒の殺され

孛囉忽勒那顏到りて、三人にて大軍より前へ歩み往きて、夕暮に覺えず難き林の中に徑に依り歩みたれば、彼等の斥候に後より脅されて、徑を阻みて、孛囉忽勒那顏を拏へて殺〜けり。禿馬惕は孛囉忽勒を殺せりと知りて、成吉思合罕甚く怒りて、自ら出馬せんとしたれば、孛斡兒出、木合黎二人は、成吉思合罕を止まるまで諫めたり。却朶兒別惕（朶兒邊の複稱）の朶兒伯多黑申（親征錄都魯伯元史朶魯伯）に任し「軍を嚴に整へて、長生の上帝に禱りて、禿馬惕の民を降さんと試みよ」と勅ありき。朶兒伯は、軍を整へて、前に軍の行きたる、斥候の守りたる路徑の口口に、虛しき勢を張りて、紅き强牛（野牛の一種）の行きたる路に依り、軍士どもに號令〜、軍の數ある（數に具はれる）人、心臆せば打たんが爲に、人ごとに十の笞を負はせて、斧錛（蒙語兀哈里、義を知らず、明譯に從へり。錛は、字典に「音奔、平木器」とあれども、これも解り得ず。）鋸鑿なる人毎の（人ごとに用ふる）器械を整へさせて、紅き强牛の行きたる路に依り、路に立てる樹どもを斷ち斫らせて、鋸らしめて路をなして、山の上

朶兒伯多黑申の禿馬惕征服

に上りたれば、禿馬惕の民の天窗の上より、不意にて筵會〜て居る處を虜へたり。

前に豁兒赤那顏、忽都合別乞二人は、禿馬惕に拏へられて、孛脫灰塔兒渾の處にそこにありき。豁兒赤の拏へられたる理由は、禿馬惕の民の女子どもは美しくあり、三十の妻を取れと勅ありたるにつき、禿馬惕の民の女子どもを取らんとて往きたるに、前に降りたる民は、却て敵となりて、豁兒赤那顏を拏へたりき。豁兒赤は禿馬惕に拏へられたりと成吉思合罕知りて、「林の民の行は、忽都合知れるぞ」と宣ひて遣りたれば、忽都合別乞

拏へられたる二將の助かり

又拏へられき。[こたび]禿馬惕の民を降し畢へたれば、孛囉忽勒の骨の故に百の禿馬惕を賜へり。(孛囉忽勒の遺族に賜はりたるなり。)豁兒赤は、三十の女子を取れり。忽都合別乞に孛脫灰塔兒渾を賜へり。(親征錄は、禿馬惕征伐を丁丑(太祖十二年)に移し、簡短に「是歲、吐麻部主都剌涉合兒既附而叛、上命博羅渾那顏都魯伯二將討平之、博羅渾那顏卒於彼」と記せり。元史は、それよりも簡略にて、たゞ「是歲、禿滿部民叛命、鉢魯完朶魯伯討平之」とありて、鉢魯完の殺されたる事も云はず。蓋四傑の一人なることに心附かざり〜ならん。)

成吉思合罕勅ありて「母に子どもに弟どもに民を分けて與へん」とて與ふる時「國民を聚むるに艱難したるは、母なるぞ。我が子どもの兄は、拙赤なるぞ。我が弟どもの末は、斡惕赤斤なるぞ」と宣ひて、母には斡惕赤斤

三將の恩賜

母と子弟とに民の分配

の分前となゝて萬の民を與へたり。母は、不足に思ひて聲をなさざりき。拙赤に九千の民を與へたり。察阿歹に八千の民を與へたり。斡歌歹に五千の民を與へたり。脫雷に五千の民を與へたり。(元史の宗室世系表に「太祖皇帝六子、長朮赤太子、次二察合台太子、次三太宗皇帝、次四拖雷、卽睿宗也、次五兀魯赤、無嗣、次六闊列堅太子」とあり。拖雷まで四人は、光獻翼聖皇后の子なり。兀魯赤闊列堅は、庶子にゝてかゝ幼き故に、分民なかりき。)合撒兒に四千の民を與へたり。阿勒赤歹に二千の民を與へたり。別勒古台に一千五百の民を與へたり。(世系表に「烈祖神元皇帝五子、長太祖皇帝、次二搠只哈兒王、次三哈赤溫大王、次四鐵木哥斡赤斤、所謂皇太弟國王斡嗔那顏者也、次五別里古台大王」とあり。搠只哈兒は、太祖紀に皇弟哈撒兒、食貨志に搠只哈撒兒大王とあり。表の哈兒は、撒の字を脫ゝたり。合赤溫は、早く死にたる故に、その子に民を與へたり。この阿勒赤歹も、亦魯該の親屬なる阿勒赤歹も、卷九なる額勒只吉歹、とは名稍異なり。元史にも太宗紀に按赤帶、定宗憲宗世祖紀に按只帶とありて、阿勒赤吉歹と云へる事無ければ、世系表なる按只

苔阿哩台の處分

吉台の吉の字は、恐らくは衍字ならん。)苔阿哩台(卷一の苔哩台斡惕赤斤、太祖紀苔力台、世系表苔里眞、食貨志太祖叔苔里眞官人)は、客咧亦惕に與ゝたりとて「眼の背處に黜けん」と宣へば、孛斡兒出、木合黎、失吉忽禿忽三人言はく「己が火を滅すが如く、己が家を壞るが如く、爾の善き父の遺念は、獨爾の叔父殘りてあるを、いかんぞ棄てん。彼の氣を附けざりゝことを勿「想ひ」そ。爾の好き父の末弟に營盤の煙を立てさせ合ひて居れ」と云はれて、鼻より煙搶く(合巴兒 忽泥 康失)まで明かに話されて(意明ならざれども、明本合合思語譯に從へり。文譯には太祖心下辛酸)、「諾へり」とて、好き父を想ひて、孛斡兒出、木合里、失吉忽禿忽三人の話にて靜まりたるぞ(明譯怒遂息了)。(好き父以下は、叙事の文なり。原文

三弟四子の傳

に太祖の語氣として、「我」の字を末に加へたるは、誤りならん。）

母に斡惕赤斤に萬の民を與へて、官人どもより古出闊闊出種賽豁兒合孫（八十八の功臣の中にて第十七第十八第三十三第十九第十）四人を傳けたり。拙赤には忽難蒙客兀兒客帖（功臣の第七第三十九第五十）三人を傳けたり。察阿歹には合喇察兒蒙客亦多忽歹（功臣の第二十九第三十七第六十六）三人を傳けたり。又成吉思合罕宣はく「察阿歹は、猛くあり。細なる性あるなり。闊客搠思（即闊闊搠思、功臣の第三十）は、晩く早く（朝夕に）前に居て、思へる事を語りて居れ」と勅ありき。（明譯）又說、察阿歹性剛。子細教闊客搠思早晩根前說話者とあるに據れば、原文「細なる性あるなり」の「なり」は、衍字にて、「細なる性ある」は、闊客搠思に係る詞ならん。）斡歌歹には亦魯格（即亦魯該）迭該（功臣の第十一）二人を傳けたり。拖雷には哲歹（功臣の第二十三なる者台）巴剌（功臣の第三十五なる巴剌斡囉納兒台）二人を傳けたり。合撒兒には者卜客（功臣の第四十九なる巴剌扯兒必又は第四十四）を傳けたり。阿勒赤歹には察兀兒孩（功臣の第五十八）を傳けたり。

晃豁塔惕赤格の傳

晃豁塔惕（晃豁塔惕の複稱）の蒙力克額赤格の子ども七人ありき。七人の中に闊闊出帖卜騰格哩（闊闊出と云ふ神巫）ありき。（元史憲宗紀の初に「母曰莊聖太后怯烈氏、歲戊辰十二月三日、生帝。時有黃忽荅部知天象者、言帝後必大貴、故以蒙哥爲名。蒙哥、華言長生也」とあり。黃忽荅は、即晃豁塔惕にして、いはゆる天象を知れる者は、即この帖卜騰格哩なり。歲戊辰は、太祖即位の三年なれば、この晃豁壇の騷動は、三年以後に起れる事なるべし。）その七人の晃豁壇は、合撒兒を黨して打たれたりき。合撒兒は「七人の晃豁壇に、黨して打たれたり」と成吉思合罕に愬へたれば、

晃豁塔惕に合撒兒の打たれ

成吉思合罕は、別の事にて怒りて在せる閒に申したる故に、成吉思合罕は、怒の裏に合撒兒に宣はく「命あるものに勝たれざる[人]なりき、汝(明譯 你平日說人不能敵)。いかんぞ勝たれたる、汝」と云はれて、合撒兒涙を墮し起ちて去りて、合撒兒憂へて三日來ざりき。そこに帖卜騰格哩は、成吉思合罕に白さく「長生の上帝の勅にて罕を定むる」神告を宣へり。「一次は帖木眞國を取れ」と宣へり。「一次は合撒兒を」と宣へり。合撒兒を圖らずば、[事]知られずあるぞ」と云はれて、成吉思合罕は、その夜出馬して、合撒兒を拏へに往きたれば、古出闊闊出二人は、合

帖卜騰格哩の讒言

太祖の性急

撒兒を拏へに往きたり」と母に告げけり。母知ると、夜便續きて、白き駱駝に引かせて黑き車にて夜通し行きて、日出づる頃到れば、成吉思合罕は、合撒兒の袖を縛りて、その帽帶を褫ぎて、その言を問ひ居る處に、母に到られて、成吉思合罕驚きて母を畏れたり。母怒りて到りて車より降り、母自合撒兒の縛れる袖を解きて放し、その帽帶を合撒兒に與へて、母怒りて氣(怒氣)を壓へかれ、盤脚坐て兩の乳を出して兩の膝の上にのせて言はく「見たりや。汝の乳(汗乳)を飲みたる乳(房乳)は、此なり。この尋ね追ひて、胞衣(合見必速)を咬みたる、臍帶(合札 灰赤)を斷ちたる合撒兒は、

母に怒られたる太祖の愧懼

何をか爲たる。（合撒兒は、猛き野犬の名を采りて名づけたるなり。故にその猛なるに譬へたり。）帖木眞は、我が此の一つの乳を盡〳〵たりき。合赤溫、斡惕赤斤は、二人となりて一つの乳を盡さざりき。合撒兒こそは、我が兩の乳皆を盡〳〵て、我が胷寬になるまで休ま〳〵めて、胷を寬にな〳〵たりき。それが爲に技能ある我が帖木眞は、胷云云。（こゝに脫文あり、補ふこと能はず。）技能ある我が合撒兒は、射る力技能ある故に、叛きて（語譯に交參とあれども、今文合兒不察）出でたるを鏑失射て降ら〳〵めたりき。驚きて出でたるを遠箭射て降ら〳〵めたりき。今敵の人を窮めたりと云ひて、合撒兒を見る（用ふること）能はざるなり、汝」と云へり。母を休ま〳〵め畢へて、成吉思合罕宣はく「母に怒られて、畏れも畏れたり、羞ぢも羞ぢたり、我」と宣ひて、「退かん、我等」と宣ひて退きたり。母に知ら〳〵めず陰に合撒兒の民を取りて、合撒兒に千四百の民を與へたり。母知りて、心に「憂へ」（原文に脫ちたるを、明譯に依りて補へり。）早く老いたる理由はかくあり。札剌亦兒の者ト客は、そこに驚きて、巴兒忽眞に入り逃れたり。

帖ト騰格哩の横暴

その後九種の方言ある民、帖ト騰格哩の處に聚りて、成吉思合罕の聚馬處より多く帖ト騰格哩の處に聚るとなれり。かく聚れる時、帖木格斡惕赤斤に屬へる民

は、帖ト騰格哩の處に去りき。斡惕赤斤那顏は、去りたる民を索めに莎豁兒と云ふ使を遣りき。帖ト騰格哩は、莎豁兒使に言へらく「斡惕赤斤、汝等二女使となりき」と云ひて、(この言、意通せず。二女とは、莎豁兒と馬とを云ひ、莎豁兒を馬に比べ女に比べて辱めたるならんか。)莎豁兒使を打ちて、歩ませてその鞍を負はせて回らしめき。斡惕赤斤は、莎豁兒使を打ちて歩ませ致せられて、明朝斡惕兒斤自帖ト騰格哩の處に往きて言はく「莎豁兒使を遣りたれば、打ちて歩ませ致せき。今我民を索めに來つ」と云はれて、七人の晃豁壇は、斡惕赤斤をここよりそこより圍みて「莎豁兒使を汝の致せたるは、善く有り」と云ひ

斡惕赤斤の泣き訴へ

て、(明譯「你如何敢差人來取百姓」とあれば、原文には打消の副詞脱ちたるならん。)拏へんと打たんと做さるゝに懼れて、斡惕赤斤那顏言はく「使を我が致せたるは、善からず」と云ひき。七人の晃豁壇言はく「善からずあらば、懺悔〳〵て跪け」と云ひて、帖ト騰格哩の後より跪かせけり。民をも與へられず〳〵て、斡惕赤斤は、明朝早く成吉思合罕に、起きざるに寢床の内に在す處に入りて、哭き跪きて申さく「九種の方言ある民は、帖ト騰格哩の處に聚られて、我に屬へる民を帖ト騰格哩より索めに莎豁兒と云ふ使を遣りたるに、我が莎豁兒使を打ちて歩ませ鞍を負はせて致せられて、我自

孛兒帖兀眞の慨み言

索めに往けば、七人の晃豁壇に、こゝよりそこより圍みて懺悔せしめて、帖卜騰格哩の後より跪かせられたり」と云ひ哭きたり。成吉思合罕、聲を出さざるに、孛兒帖兀眞は、寢床の内に起きて坐りて、衾の領にて胷を蔽ひて、斡惕赤斤の哭けるを見て、涙を墮して言はく「何をかする晃豁壇ぞ。彼等は、先頃合撒兒をも黨して打ちてありき。今又この斡惕赤斤をいかんぞ後より跪かせたる。いかなる道理か有りし。況この檜松の如き爾が弟だちをかく害ひ合へり。實に又久後老木の如き爾が身傾き去らば、麻穰の如き爾が國民を誰にか知らしめ

（兀年）（捏兀列）（捏古思）（捏惕客勒）

帖卜騰格哩の打取り

ん、彼等。柱の如き爾が身倒れ去らば、羣雀の如き爾が國民を誰にか知らしめん、彼等。檜松の如き爾が弟だちをかく害ふ我が家人は、三人四人の我が小き弱きものども成長するまでは、いかんぞ知らしめん、彼等。何をかする晃豁壇なりし、彼等。弟だちを彼等にかく做さしめて、いかんぞ見ておはせん、爾」と云ひて、孛兒帖兀眞は涙を墮したり。孛兒帖兀眞のこの言につき、成吉思合罕は、斡惕赤斤に宣はく「帖卜騰格哩今來ん。爲し得ることをいかにも行ひ合はば、汝知れ」と宣へり。その時斡惕赤斤起ちて涙を拭ひ出でて、三人の力士を備へて

（秃勒巴思）（秃牙勒）

立てり。暫ありて蒙力克額赤格は、七人の子どもと來て、七人皆入りて、帖ト騰格哩は、酒局の右の邊に坐ると、斡惕赤斤は、帖ト騰格哩の領を拏へて、「昨の日我を懺悔せ〜めたりき、汝。試み合はん」と云ひて、彼の領を拏へて門の處に拖きたり。帖ト騰格哩は、斡惕赤斤を迎へ領を拏へて搏ち合へり。帖ト騰格哩の帽は、搏ち合ふ時に火盤の上に落ちたり。蒙力克額赤格は、その帽を取りて嗅きて懷に置きたり。成吉思合罕宣はく「出でて力士の力を爭ひ合へ」と宣へり。斡惕赤斤は、帖ト騰格哩を拖きて出づる時、門の閾の閒に先に備へたる三人の力

士迎へて、帖ト騰格哩を拏へ拖きて出でて、彼の脊梁を折りて、左の邊の車の端に去てて、斡惕赤斤入りて言はく「帖ト騰格哩は、我を懺悔せしめたりき。試みんと云へば、肯かず。欺きて臥したり。尋常の伴なりき」と云へば、蒙力克額赤格覺りて、涙を墮して言はく「大なる地に土塊の然有り〜より、海なす河に小川の〜かあり〜より、伴となれり、我(明譯我自皇帝未起創之先、做伴當到今日)」と云ふとひと〜く、六人の晃豁壇なる彼の子どもは、門を塞ぎて、火盤の周圍に立ちて、その袖を挽かれて、成吉思合罕恐れて迫られて、「躱れ出でん」と宣ひ

て出づれば、成吉思合罕の周圍に箭筒士侍衛等繞りて立てり。帖ト騰格哩を車の端に脊梁を折りて去てたるを成吉思合罕御覽〜て、後方より一つの青き帳房を持ち來させて、帖ト騰格哩の上に被はせて、「駕車に「我を」入ら〜めよ。起たん」と宣ひて、そこより起〜たり。

帖ト（帖ト騰格哩の略稱）を被ひたる帳房の天窗に蓋して、門を壓へて人に守らせたれば、第三の夜、日黃なる時（明譯將曉）、天窗開けて身ぐるみ出でけり。審むれば、實に帖ト彼の「出でたる」は、そこに審められたり。成吉思合罕宣はく「帖ト騰格哩は、我が弟どもに手足を致したる故に、

帖トの死體の失せ

我が弟どもの閒に、跡形なき、讒言の故に、上帝に愛まれず〜て、命を身ぐるみ持ちて去られたるぞ」と宣へり。成吉思合罕は、蒙力克額赤格をそこに責めけらく「子どもを性行を制せず、「我と」齊しからんと思へる故に、「禍は」帖ト騰格哩の頭に到りぬ、汝等。汝等のかゝる性行を覺れるならば、札木合、阿勒壇、忽察兒等の「如き」理由あるものと做さるべきなりき、汝等」と宣ひて、蒙力克額赤格を責めて、責め畢へてさて「朝に言へるを夕に變へば、夕に言へるを朝に變へば、恥（恥づべきこと）と必云はれん。只前に言を定められたるぞ、彼の事を（明譯）因在先說定免

蒙力克額赤格の責められ

汝死有來罷」とて、恩賜〜て怒を息めたり。「違越する性行を引締めたりせば、蒙力克額赤格の子孫に誰か齊しき者あらん」と宣へり。帖卜騰格哩を無くなすと、晃豁壇の顔色は消失せけるぞ。（こゝにて祕史正集十卷は終れり。次の二卷は、續集なり、卷八に虎の年（丙寅）の卽位を記〜てよりこの卷の初までは、功臣の恩賞、親衞の制度を定むる詔勅を列ね、次に合兒魯兀惕の降服、篾兒乞惕古出魯克の勦滅、委兀惕の親附を記〜、次に兎の年（丁卯）と年を掲げて、朮赤の北征、禿馬惕の征服、皇族の分民傳相の事を記〜、晃豁壇の敗滅を以て終れり。されば、この集は、太祖二年丁卯に終れるが如くなれども、古出魯克の勦滅は、太祖元年に非ず〜て、實は十三年戊寅にあること甚確なれば、篾兒乞惕の勦滅も、親征錄集史の十二年丁丑とせるに從はざるべからず。續集は、太祖六年辛未の征金の役より始まりたるに、この集に已に十二年丁丑十三年戊寅の事を載せたるはいかにと云ふに、そは怪むべき事に非ず。蓋この集の成れるは、征金の役の起れる後なれども、征金の役は、未事竣らざり〜故に、後の記錄に讓りて、この集には載せず。篾兒乞惕古出魯克の勦滅は、卷三の篾兒乞惕征伐より、卷五卷七の乃蠻征伐より引續きたる截定の大業なるに由り、その局を結ばんが爲に、太祖騰極の續きに、年をも掲げずに十餘年後の事を附記〜たるなり。）

成吉思汗實錄卷の十終り。

成吉思汗實錄卷の十一。（明譯本の原の名は、元朝秘史續集卷一、次の卷も、これに準ふ。）

元太宗十二年、漠北文臣無名氏、以蒙古文委兀字續撰。明洪武十五年、翰林侍講火原潔等、漢字音譯俗語旁譯。日本明治三十九年、盛岡那珂通世、以和文直譯附校注。

金國征伐の始まり

國交の破裂

その後成吉思合罕は、羊の年（我が順德天皇建曆元年辛未、宋の寧宗嘉定四年、金帝衞の紹王永濟）大安三年、元の太祖六年、西紀一二一一年、太祖五十歳の時なり。）乞塔惕の民の處に出征せり。撫州を取りて、（撫州は、金の西京路の一州にして、張家口の外、今の鑲黃旗等四旗の牧廠の西南二十清里にありき。金國征伐の始まりの事は、元史太祖紀に元年丙寅「帝始議伐金、初金殺帝宗親咸補海罕、帝欲復讎、會金降俘等、具言金主璟肆行暴虐、帝乃定議致討、然未敢輕動也」木華黎の傳に「金之降者、皆言其主璟殺戮宗親、荒淫日恣、帝曰「朕出師有名矣」、又太祖紀に「五年庚午春、金謀來伐、築烏沙堡、帝遣遮別襲殺其衆、遂略地而東、初帝貢歲幣于金、金主使衞王允濟受貢於靜州、帝見允濟、不爲禮、允濟歸、欲請兵攻之、會金主璟殂、允濟嗣位、有詔至國傳言當拜受、帝問金使曰「新君爲誰」、金使曰「衞王也」帝遽南面唾曰「我謂中原

太祖五年庚午の出兵

皇帝、是天上人做、此等庸懦、亦爲之耶、何以拜爲、」即乘馬北去、金使還言、允濟益怒、欲俟帝再入貢、就進場害之、帝知之、遂與金絶、益嚴兵爲備」と云ひ、金國志にも「大安元年、敵人聞金主新立、而喜曰、彼老懦無能、不足畏也、遂決意南侵」と云へり。釁端開けたる後、金國の事情は、兩朝綱目備要に「允濟遣衆分屯山後、欲襲殺鐵木眞、然後引兵深入、會金之亂軍、有詣蒙古告其事者、蒙古遣人伺之得實、遂遷延不進」と云ひ、金史衞紹王本紀に「大安二年九月丙午、京師戒嚴、上日出巡撫、百官請視朝、不允、是歲、禁百姓不得傳說邊事、」續通鑑綱目に「金納哈買住守北鄙、知蒙古將侵邊、奔告于金主、云云、金主以其擅生邊隙、囚之、」また「蒙古數侵掠金西北之境、其勢漸盛、金人皇皇、遂禁百姓傳說邊事、」とあり、畢沅の續資治通鑑は、金史續綱目の文に據り、「金承平日久、驟聞蒙古用兵、人情恇懼、流言四起、九月丙午、中都戒嚴云云。」

太祖六年辛未の親征

既而知蒙古未嘗大舉、始解嚴、旋禁百姓不得傳說邊事、と書けり、諸書を參考するに、蒙古の南征は、實に五年庚午より始まりたれども、但烏沙堡を取れるは、親征錄も金史獨吉思忠の傳承裕の傳も、皆明年辛未の事とすれば、元史の五年に載せたるは誤れり。かくて六年辛未には、親征錄に「秋、上始誓衆南征、克大水濼、又拔烏沙堡及昌桓撫等州、大太子朮赤、二太子察合台、三太子窩闊台、破雲內東勝武宣寧豐靖等州、金人懼棄西京」とあり、續綱目には「蒙古侵擾雲中九原、連歲不休、嘉定四年、遂破大水濼以進、金主始恐、四月、釋買住、而遣西北路招討使粘合合打、求和、蒙古主不許、金主命平章政事獨吉千家奴、參知政事完顏胡沙、行省事于撫州、西京留守紇石烈胡沙虎、行樞密院事、以禦蒙古、秋、千家奴胡沙至烏沙堡、未及設備、蒙古兵奄至、拔烏沙堡及烏月營、八月蒙古主乘勝破白登城、遂攻西京、凡七日、胡沙虎懼、以麾下

棄城突圍遁去、蒙古主以精騎三千馳之、金兵大敗、追至翠屏口、遂取西京及桓撫州」と書けり。この文は、金國志金史本紀獨吉思忠(即千家奴)承裕(即完顏胡沙)紇石烈執中(即胡沙虎)の傳に據り驟括したるものなれば、親征錄よりは委しく、元史太祖紀よりは確實なり。只「破白登城、遂攻西京、凡七日」と云へるは、察罕の傳なる野狐嶺の戰に「圍白樓七日拔之」とあるを誤會して採れるに似たり。また耶律楚材の湛然居士集に「進庚午元曆表、歲在庚午、天啓宸衷、決志南征、辛未之春、天兵南度、不五年、而天下略定、此天授也、非人力所能及也」と云へれば、太祖の親征は、春にして秋にあらず、親征錄の「秋、上始誓衆南征」は、固より非にして、衞紹王紀の大安三年四月に始めて太祖の來征を書きたるも、未是ならず、これのみは、太祖紀の六年辛未春「二月、帝自將南伐」と云へるに從ふべし。蓋太祖の親征は春にあり、金帝の和を求め邊に備へたるは夏にあり、西京諸州の取られたるは秋にあるなり、然るに太祖紀この二三年の間の叙事は、

元史の叙事の顚倒複沓

顚倒複沓にして、その失數ふるに暇あらず。まづ「二月、帝自將南伐、敗金將定薛於野狐嶺、取大水濼豐利等縣、金復築烏沙堡、秋七月、命遮別攻烏沙堡及烏月營拔之」とある野狐嶺の戰は、豐利等縣即撫州を取れる後にあるを、その前に記して、明年壬申に至り、復野狐嶺の戰を記し、撫州を取るは、烏沙堡を取れる後なるを、その前に記して、明年復それを記し、烏沙堡を拔くは、今年一たびなるを、已に去年に記し、今年に至り「金復築烏沙堡」の一句を加へて、復記したり。その病の本を尋ぬるに、太祖紀は、親征錄金史金國志等の諸書を雜へ採り、咀嚼融會せずして、筆に任せて列記したるに由れるなり、故に烏沙堡を取れる事は、或書に據りて、五年春に記し、親征錄に據りて、復六年秋に記せり、撫州即

豐利等縣を取れる事は、或書に據りて、六年春に記〜、親征錄に六年秋と〜て記せる「取昌桓撫等州」をば七年春にまはせり。野狐嶺の戰は、察罕の傳の本づきたる記錄に據りて、六年春に記〜、親征錄に六年秋と〜て記〜たる獾兒觜卽野狐嶺の戰をば七年春にまはせり。獾兒觜の戰に續きたる會合堡の戰は、金史承裕の傳に據り、六年八月に記〜、地名も宣平の會河川と〜て、親征錄には據らず。親征錄に據れば、七年宣德府を破り、次に德興府に克ちたるを、元史は、宣德府に克つを八年七月に記〜、德興府を拔くをば、金國志に據りて、六年九月に記〜、又或書に據りて、七年九月に記〜、その異名を用ひて奉聖州と云へるは、金國志に據れるにも似たり。さて後に親征錄の文を採りて、八年七月克宣德府の次に又記〜、親征錄の「後金人復收之、癸酉(八年)秋、上復破之」をば削れり。重複の最驚くべきは、哲別の居庸關を破りたる事にて、金國志金史本紀に據りて、早くも六年九月に記〜、八年七月に至り、親征錄に據り、懷來居庸の戰を記せり。これらの重複あることを悟らず〜て元史を讀まば、何が何やら少も分らず、恰も諸葛孔明の八陣變化の中に入りたるが如くなるべし。)

野狐嶺の戰

忽揑堅苔巴(クバ)、忽揑堅は狐、苔巴は峠なり。漢名は野狐嶺と云ひ、直隸宣化府萬全縣の西北三十清里、張家口の外に在り。畿輔通志に「勢極高峻、風力猛烈、雁飛遇風輒墮地」とあり。この峠は、たゞ越えたるに非ず。親征錄に「上之將發撫州也、金人以招討九斤監軍爲奴等領大軍、設備於野狐嶺、又以參政胡沙率軍爲後繼。契丹軍帥、謀謂九斤曰「聞彼新破撫州、以所獲物分賜軍中、馬牧於野、出不虞之際、宜速騎以掩之也」。九斤曰「此危道也、不若馬步俱進、爲計萬全」。上聞金馬

狐峠に依り越えて、(蒙語)

至、進拒獾兒嘴。(この間に金の使石抹明安の降れることを記せり。)遂與九斤戰、大破之。其人馬蹂躪死者不可勝計。因勝彼復破胡沙軍於會合堡。金人精銳盡沒於此」とあり。九斤は、太祖紀に紇石烈九斤、察罕の傳に定薛とあり。爲奴は、喇失惕の史に斡奴とあり。胡沙は、金史列傳の承裕なり。獾兒嘴は、野狐嶺の北の口にあり。會合堡は、金史本紀の會河堡に〜て、今の萬全縣の西に在りき。金國志には灰河、承裕の傳には會河川、木華黎耶律阿海の傳には澮河と書けり。木華黎の傳は、この戰の功を專に木華黎に歸〜て「金兵號四十萬、陣野狐嶺北。木華黎曰「彼衆我寡、弗致死力戰、未易破也」。率敢死士、策馬橫戈、大呼陷陣。帝麾諸軍、竝進、大敗金兵、追至澮河、殭尸百里」と云へり。會河堡の戰は、金史本紀に「大安三年八月、千家奴胡沙自撫州退軍、駐宣平。九月、敗績于會河堡」。承裕の傳に「八月、大元兵至野狐嶺、承裕喪氣、不敢拒戰、退至宣平云云。其夜南行。大元兵踵擊之。明日至會河川、承裕兵大潰、承裕僅脫身入宣德」とあり。宣平は、金の西京路宣德州の屬縣にゝて、今の直隸宣化府懷安縣の東北にありき。撫州野狐嶺會河堡の戰は、親征錄蒙古集史金國志金史本紀諸傳みな太祖六年辛未にあるを、元史本紀は、會河の戰のみを正〜く六年辛未に記〜、撫州野狐嶺の戰は、みな誤りて六年辛未七年壬申の二所に記〜、速不台石抹明安の傳は、誤りて壬申の年とし、木華黎の傳に至りては、壬申の年にある宣德德興の戰を辛未とし〜て前に記〜、辛未の年にある撫州野狐嶺澮河の戰を壬申とし〜て後に記せり。耶律阿海の傳に烏沙堡宣平澮河の戰を辛未とし〜たるは、善けれども、その年の內に「癸酉、拔宣德德興」の前に「遂出居庸、耀兵燕北」と書けるは非なり。)

會河堡の戰

宣德府を取りて、(親征錄に「壬申(太祖七年)、

宣德德興の攻め取り

破宣德府、至德興府、失利引卻。四太子也可那顏、赤渠駙馬率兵、盡克德興境內諸堡而還。後金人復收之。癸酉(太祖八年秋、上復破之)とあり。宣德府は、金の西京路宣德州にして、元の初陞せて宣寧府とし、世祖の時宣德府と改めて上都路に隸せり。今の直隸宣化府なり。太祖のそれを破れるは未府とならざりし時なれば、府と云ふべき筈なし。喇失惕の史に宣德州と云へるを見れば、修正祕史には州とありけんを、親征錄の撰者は、當時の稱に依り府と書けるなり。この祕史の原本にも必ず州とありしならめど、明の譯人は、宣德府の名を聞き慣れ居たるに由り、ふと音譯を誤りたるならん。德興府は、遼の奉聖州にして、金の時德興府と改め、西京路に隸し、元の世祖の時復奉聖州とし、宣德府に隸せり。今の直隸保安州なり。四太子は、第四の皇子拖雷也可那顏は、大官人の義にして、拖雷の號なり。赤渠駙馬は、卷八の赤古古咧堅なり。)

者別古亦古揑克の先鋒

者別、古亦古揑克巴阿禿兒二人を先鋒に遣りたり。(この戰に者別の大に働きたる旁證としては、元史耶律阿海の傳に「敕左帥闊別、略地漠南、阿海爲先鋒、辛未、破烏沙堡、鏖戰宣平、大捷、澮河、遂出居庸、耀兵燕北」云云とあり。古亦古揑克は、何人とも知れず。親征錄壬辰(太宗四年)の處に貴由拔都と云ふ人ならんか。もし然らば、元史列傳に「月魯帖木兒、卜領勤多禮伯臺氏、曾祖貴裕、事太祖、爲管領怯憐口怯薛官」とある貴裕も、その人なるべし。多禮伯臺は、朶兒別惕にして、卜領勤は、朶兒別惕の分部の名なり。)

居庸關の禦ぎ

察卜赤牙勒に到りて、(漢名居庸關、今の順天府昌平州の西北、直隸宣化府延慶州の東南にあり。)察卜赤牙勒の峠を禦

稽山の戰

がれて、(昌平州の西北二十四清里に居庸の南口あり、南口より十五清里上れる所に關城あり、又八清里に上關あり、上關より十七清里に延慶州の八達嶺あり、嶺の上に城あり、元人はそれを居庸の北口と云へり。卽察卜赤牙勒の峠なり。昌平山水記に「自八達嶺下視居庸關若建瓶、若闕井。昔人謂居庸之險、不在關城、在八達嶺也」と云へり。金人守禦の事は、親征錄に「時金人塹山築壁、悉力爲備、一札八兒火者の傳に「金人特居庸之險、治鐵鋼關門、布鐵蒺藜百餘里、守以精銳」とあり。)そこに者別言く「彼等を誘ひて動かして來させんとそこに試みん」と云ひて回りぬ。回られて、乞塔惕の軍士ども追はんとて、河山に滿つるまで追ひて來ぬ。宣德府の觜(山の鼻)に至りて、者別後向き飜れり。奮ひて衝きて、續きて來る敵を敗れり。成吉思合罕の中軍續きて、乞塔惕を動かして、合喇乞荅惕(契丹卽合喇乞丹の複稱)、主兒扯惕(女眞卽主兒臣の複稱)、主因(卷一に見えたる種族)の雄雄しく猛き軍を敗りて、察卜赤牙勒

に至るまで爛木の積れる如く殺〳〵て、（親征錄「癸酉、上復破之」の續きに「遂進軍至懷來。帥高琪、將兵與戰。我軍勝、追至北口、大敗之。死者不可勝計」とあり。帥の上に脫字あり。元史本紀には金の行省完顏綱元帥高琪とあり。高琪は、金史の朮虎高琪なり。この時金軍の總督は、完顏綱に〳〵て、完顏綱徒單鎰朮虎高琪の傳にみな「綱行省事於縉山、大敗」とあり。高琪は、この時鎭州の防禦使にて元帥右都監を權〳〵て居たれども、蒙古人は元帥と云ひたるなり。懷來は、遼の奉聖州の屬縣、金の德興府媯川縣、元の宣德府奉聖州の屬縣、今の直隸宣化府懷來縣なり。錄は元代の名を以て記せり。北口は、卽居庸の北口なり。縉山は、金の德興府の屬縣、今の宣化府延慶州なり。）察卜赤牙勒の關を者別取りて、峠どもを奪ひて越えて、（この文に據れば、北口より南口に出でたる如くなれども、さにあらず。親征錄に「時金人塹山築壁、悉力爲備。上留怯台薄察等、頓軍拒守、遂將別衆西行、由紫荊口出。金主聞之、遣大將奧敦、將兵拒險、勿使及平地。比其至、我衆度關矣。乃命哲別、率衆攻居庸南口、出其不備、破之。進兵與怯台薄察軍合」とあれば、南口より倒に北口に攻め上りたるなり。怯台は、卽客台、八十八功臣の第五十七、兀魯兀惕の主兒扯歹の子なり。太祖紀に可忒と書けり。薄察は、太祖紀に薄剌とあり。趙柔の傳に「歲癸酉、太祖遣兵破紫荊關、柔以其衆降。行省八札奏聞、以柔爲涿易二州長官、佩金符」とある八札なるべ〳〵と沈曾植は云へり。紫荊口は、卽紫荊關にて、直隸易州の西八十清里紫荊嶺の上にあり。奧敦は、太祖紀に奧屯とあり。金史章宗紀衞紹王紀李英

居庸關の攻め破り

の傳に烏古孫兀屯とある人なるべ〳〵。元史は、錄の文を節錄〳〵たれども、叙事明瞭ならず。）成吉思合罕は、失喇迭克に下馬せり。（失喇迭克は、漢名龍虎臺。昌平州の西にあり。昌平山水記に「居庸關南、地勢高平如臺、廣二里、袤三里。元時、車駕巡幸上都、皆駐蹕於此。」幾輔通志に「龍虎臺、在昌平州西二十里。云云。舊志、臺在舊縣西十里、去京師百里、當居庸關之南」とあり。この臺は、いはゆる臺地にて、樓臺の臺にあらず。）中都を攻めて、（中都は、今の清京にて、遼南京と云ひ、金中都と云ひ、元の世祖大都と改め、明の初北平と云ひ、成祖北京と改め、清の世祖定めて京師と〳〵、俗には今も北京と云ふ。蒙文には中都とあるを、語譯には大都、文譯には北平と書けり。洪武の史臣、後の名を用ひて追稱〳〵たるなり。親征錄に「既而又遣諸部精兵五千騎、合怯台哈百二將圍中都。上自率兵攻涿易二州。卽日拔之」とあり。怯台は、卽兀魯兀惕の客台、哈台は卽合歹古咧堅、八十八功臣の末より第四に見えたり。涿易は、皆金の中都路の屬州、涿州は今順天府に隸〳〵、易州は、直隸の直隸州なり。蒙古の關に入りたるは、太祖八年癸酉の秋に〳〵て、金史宣宗紀貞祐元年（卽太祖八年）十月「大元兵下涿州」とあれば、關に入りたる月に直に涿州を拔きたるに非ず。また卽日二州を拔くは、いかにも速すぎたるに、喇失惕の史には涿州を攻めて二十日にて破れり」とあれば、錄の卽の字は、誤寫なるかも知れず。）郡郡の城どもに軍を遣りて攻めさせたり。（親征錄に「乃分軍爲三道。大太子二太子三太子爲右軍、循太行而南、破保州中山邢洺磁相輝衞懷孟等州、棄其

龍虎臺の駐蹕

中都の城攻め

河北山西山東の侵掠

定威州境、抵黄河、大掠而還。哈撒兒及斡津那顔拙赤解薄剎爲左軍、沿東海、破灤薊等城而還。上與四太子、敵諸部軍、由中道、遂破雄莫河間開清滄景獻濟南濱棣益都等城、棄東平大名不攻、餘皆望風而拔、下令北還、又遣木華黎、回攻密州、拔之。上至中都、亦來合。とあり。哈撒兒は、皇弟拙赤合撒兒なり。斡津那顔は、太祖紀に斡陳那顔とあり、翁吉喇惕の阿勒赤古咧堅の子、德薛禪の孫にして、元史特薛禪の傳にその名見えたり。拙赤解は、兀嚕兀惕の主兒扯歹なり。薄剎は、卽薄察なり。孛囉忽勒の從孫塔察兒一名倘鎣は、薄察と音近きに由り、沈曾植は、薄察は塔察兒ならんと疑ひたれどもいかゞにや。太祖紀は、この三道の軍を叙べて、右軍は「取保遂安肅安定邢洺磁相衛輝懷孟、掠澤潞遼沁平陽太原吉隰、拔汾石嵐忻代武等州而還」、左軍は「取雄霸莫安河間滄景獻深祁蠡冀恩濮開滑博濟泰安濟南濱棣益都淄雜登萊沂等郡、復命木華黎、攻密州、屠之。云云。帝至中都、三道兵還、合屯大口。是歲、河北郡縣盡拔、唯中都通順眞定清沃大名東平德邳海州十一城不下」とありて、親征錄より委〳〵。金史宣宗紀を案ずるに、貞祐元年(太祖八年癸酉)十一月、大元の兵觀州を徇へ、(金の觀州は、卽元の景州なり。)又河間府滄州を徇へ、二年(太祖九年甲戌)正月辛未、彰德府を徇へ、(金元の彰德府は、卽古の相州なり。)又益都府を徇へ、乙未、懷州を徇へ、二月壬辰、嵐州を徇へたること見えて、末に「時山東河北諸郡失守、惟眞定清沃大名東平徐邳海數城僅存而已。河東州縣、亦多殘燬」とあれば、三道の侵掠は、癸酉の十一月に始まりて、甲戌の二月に終りたるなり。親征錄元史にその時月を明にせざるに由り、金史に據りて考へ見たり。又金史李英の傳に「貞祐三年三月、英自清州督糧運、救中都」宣宗紀にも、その年七月、詔河

東昌の不意打ち

間孤城移其軍民就粟清州」とあれば、清州は未殘破せられざりき。親征錄中軍の破れる諸城の中に清州あるは非なり。清は滑の誤ならん。元史は「十一城不下」の中に、金史は「數城僅存」の中に、いづれも清州あり。）者別をば東昌の城を攻めさせに遣りたり。東昌の城に到りて、攻めて取りかれて、回りて六宿の地に到りて、油斷せさせて、さて回り奮ひ、馬を手に牽き（蒙語合兒闊脫勒壇、明譯毎人牽一匹從馬）、夜兼行して、油斷して居る處に到りて、東昌の城を取りき。（今の山東

元の初に無かりし東昌

東昌府は、元史地理志に「唐博州、宋隸河北東路、金隸大名府、元初隸東平路、至元四年、析爲博州路、十三年改東昌路」とありて、東昌の名は、元の世祖の時より始まりたれば、太祖の時その名なきのみならず、太宗の史臣もその名を書くべき由なし。然らばこの東昌の字は、明の史官の音譯を誤れるなるべし。親征錄には、辛未（太祖六年）の秋、西京路の諸州を破れる次に「又遣哲別率衆取東京、哲別知其中堅、難以衆墮城、卽引退五百里。金人謂我軍已還、不復設備。哲別戒軍中、一騎牽一馬、一晝夜馳還、急攻、大掠之以歸」と云ひ、喇失惕もこれに同じければ、修正祕史には東京とあり〳〵なり。太祖紀には、七年壬申の末に月日まで掲げて「冬十二月甲申、遮別

修正祕史の東京

東京を攻むる暇なき者別

遼東を經略せる按陳

東京を取れる木華黎

東勝の奇功

攻東京不拔、卽引去、夜馳還、襲克之」と云ひ、吾也而の傳には、逸早くも太祖五年に「吾也而與折不那演克金東京有功」と云ひ、年月は合はざれども、その東京とゝたるは、いづれも親征錄に本づきたるなり。然れども東京を取れる人は、實は者別に非ず。耶律阿海の傳に、者別の先鋒となりて、烏沙堡宣平澮河の戰より「拔宣德德興諸郡」乘勝次北口、攻下紫荊關」まで、阿海は常に者別と共に働きたる由見ゆれば、者別は常に大軍に先だちて轉戰ゝたるなり。者別は、いかに戰馬の如く駿速なりとも、何の暇ありてか北京路を踰えて徑に東京を攻めらるべき。耶律留哥の傳に「歲壬申(太祖七年)太祖命按陳那衍行軍至遼東留哥率所部降之共破金軍帝召按陳還、而以可特哥副留哥屯其地。癸酉(八年)春、衆推留哥爲遼王云云」とあれば、始めて遼東を經略ゝたる者は、阿勒赤那顏と可特哥とにゝて、者別は與らず。八年甲戌に至り、木華黎は命を受けて、諸軍を統べて遼東を征ゝ、九年乙亥に裨將蕭也先は計を以て東京を平定ゝたること、木華黎の傳に見え、蕭也先卽石抹也先の傳にも、木華黎に從ひて先鋒となり、奇計を用ひて東京を降ゝたることを委ゝく叙べたれば、東京を取れる者は、木華黎也先にゝて、者別に非ず。然らば者別の取れるは、東昌にも非ず、東京にも非ず、いづこなりけん。太祖六年に取れる西京路諸州の內に東勝州あり、その地は、金の西京今の山西大同府の西北に在りき。者別の奇功を立てたるは、疑はくはその地ならん。蓋祕史の原本には東勝とありゝを、明人は誤りて東昌と音譯ゝて、元の初に東昌なきことに心附かざりしなり。修正祕史は誤りて東京とゝ、親征錄集史元史みなそれに依りて、いづれも東京を取れるは者別に非ざることに心附かざりゝなり。)

完顏承暉の請和の建議

者別は、東昌の城を取りて回りて來て、成吉思合罕に合へり。(親征錄に據れば、者別の奇功を立てたるは、太祖六年西京路の諸州を取れる時なれば、回りて太祖に合へるは、西京路の或地にて合へるなり。)中都を攻められて、阿勒壇罕の大官人王京丞相、(この阿勒壇罕は、金の宣宗なり。太祖八年癸酉の八月、金帝(衞の紹王)永濟は、紇石烈執中に弑せられ、章宗の庶兄豐王珣立てられたり。これを宣宗と云ふ。王京は、完顏の轉なり。王京丞相は、親征錄元史に丞相完顏承暉とあり、金史に完顏承暉とゝて傳あり。承暉本の名は福興にゝて、この時平章政事兼都元帥となり、尋で右丞相に進みたり。)阿勒壇罕に建議しけらく「天地の命ある時、大位の代る時至れり。忙豁勒甚力あり、來て我等の雄雄ゝく猛き合喇乞塔惕主兒扯惕主因の緊要なる軍を敗りて、盡くるまで殺ゝけり。賴ある察卜赤牙勒をも奪ひて取りけり。今我等再軍を整へて出さば、再忙豁勒に敗られ

ば、必城城にて潰えん、彼等。却て我等に收めば、肯かず、我等に敵となりて、伴とならざらん、彼等。阿勒壇罕恩賜せば、忙豁勒罕に今の内に降らんと相談せん。相談に入りて、忙豁勒を退けば、退けたる後に、復別に考へ、我等そこに議り合はんぞ。忙豁勒の人騸馬も、地合はず〜て疫病〜居ると云はれたり。彼等の罕に女子を與へん。金銀緞子財を軍の人に重くいだ〜て與へん。我等の此の相談に入らざるをいかで知られん」と建議〜ければ、阿勒壇罕は、王京丞相の此の言を善〜と〜て、「かく便爲れ」とて、降らんと、成吉思合罕に公主の號ある女子を

金の宣宗の屈服

出〜て、金銀緞子財も軍の人に力に知ら〜むべく、力限中都より出〜て、成吉思合罕の處に王京丞相致〜て來ぬ。降りに來られて、成吉思合罕は、彼等の相談に入りて、郡郡に攻め下りたる軍どもを回ら〜めて退きたり。王京丞相は、莫州撫州の名ある觜（山の鼻）に到るまで成吉思合罕を送りて回れり。緞子財を我等の軍士ども力限荷に駄けて、熟絹にてその荷を縛りて行きたり。

太祖九年甲戌の凱旋

（これは、太祖九年甲戌の三月の事なり。親征錄には「甲戌、上駐營於中都北壬甸、金丞相高琪、與其主謀曰「聞彼人馬瘦病、乘此決戰可乎」丞相完顏福興曰、不可。我軍、身在都城、家屬多居諸路、其心向背未可知。戰敗必散。苟勝、亦思妻子而去。祖宗社稷安危、在此舉矣。當熟思之。今莫若遣使議和。待彼主還、軍更爲之計、如何」金主然之、遣使求和、因獻衛紹王公主、令福興來送上、至野麻池而還」とあり。丞相高琪は、金史高琪の傳に據れば、この時平章政事に〜て、丞相に非ず。金の莫州は河北

東路に隸〜、今の直隸河間府任邱縣に〜て、中都より蒙古に赴く路にあらざれば、この二字誤あらん。親征錄の野麻池も、地志に見えず、これも池の名には非ず〜て、山の名又は地の名なるべ〜、二書の地名につきて考ふるに、莫州撫州は倒置にて、撫州の莫州と云ふ皆とあり〜を誤り、その莫州は又野麻池の野を脫〜て、麻池を州の諸將如く音譯〜たるには非ずや。元史太祖紀に「九年甲戌春三月、駐蹕中都北郊、名の請乘勝破燕、帝不從。乃遣使諭金主曰「汝山東河北郡縣、悉爲我有。汝所守唯燕京耳。天既弱汝、我復迫汝於險、天其謂我何。我今還軍、汝不能犒師、以弭我諸將之怒耶」。金主遂遣使求和、奉衞紹王女岐國公主及金帛童男女五百馬三千以獻、仍遣其丞相完顏福興、送帝出居唐」とあるは、親征錄と金史の紀傳とに依りて書けるなり。岐國公主は、金史宣宗紀に公主皇后の稱あり。喇失惕の史に昆主哈屯とある昆主は、公主を訛れるなり。）

唐兀惕征伐

かく出征〜たるに依り、合申の民の處に去れり。指して到れば、合申の民の不兒罕降らんと「爾の右の手となりて力を與へん」と云ひ、察合と云ふ女を成吉思合罕に出して獻れり。（不兒罕は、蒙古語にては神また佛の義なれども、唐兀惕の國にては國主の稱號に用ひたりと見ゆ。この時の不兒罕は、夏の桓宗李純佑の族弟に〜て、元の太祖元年に純佑を廢して簒立したる襄宗安全なり。察合は、親征錄も集史も元史も、みな名を略けり。后妃表第三斡耳朶の察兒皇后は、察合の誤りかとも思はる。〜かれども喇失惕は、唐古惕の人にて名の知れざる哈屯を擧げて、自注に「速哈惕これを得んと願ひ、成吉思汗卽贈れり」と附記したれば、后妃の列を脫したる故に、表には載せられざるならん。）

駱駝貢獻の願ひ

又不兒罕言く「成吉思合罕の名聲を聞きて畏れて居りき、我等。今威靈ある爾の身到りて來られて、威靈を畏れたり。畏れて、我等唐兀惕の民は、「爾の右の手となりて力を與へん」と申せり。力を與へんにも、動かぬ營盤（嫩只）ある、築きたる城ある者なるぞ。伴（那都克先）なひて、疾き（忽兒敦）出征に出征する時、鋭き（忽兒察）戰ひを戰ふ時、疾き（忽兒敦）出征に追附（癸赤蹤）くことぞ能はぬぞ。鋭き（忽兒察）戰ひに戰ふことぞ能はぬぞ、我等。成吉思合罕恩賜せば、我等唐兀惕の民は、

三回の西夏征伐

高き迭咧孫（良き牧草の名、明語譯蓆棘草）の蔭に長けさせて、多き駱駝を出〜て、係綰（合）となし〜て獻らん。毛段を織りて、段物（合）となし〜て獻らん。放つ鷹を馴ら〜て、聚めてその好きを致さ〜め居らん」と奏〜たり。「かく」言ひて、その言に遵ひ、唐兀惕の民より駱駝を取立てて、趕ふこと能はぬまで持ち來て獻れり。（この唐兀惕征伐は、親征錄に據れば、一回の役に非ず。既に太祖卽位の前の年に「乙丑、征西夏、攻破力吉里寨、經落思城、大掠人民、多獲橐駝以還」とあり、元史も同じ。駱駝を獲たるは、西夏降服の後なるを、前に繰上げて分捕とせり。次に太祖二年丁卯には「秋、再征西夏、多克幹羅孩城」、三年戊辰には「春、班師至自西夏」、元史も同じ。五年庚午には「秋、復征西夏、入李王廟、其主失都兒忽出降、獻女爲好」とあるを、元史は、一年前なる四年己巳に繰上げて「帝入河西、夏主李安全、遣其世子、率師來戰、敗之、獲其副元帥高令公、克兀剌海城、俘其太傅西壁氏、進至克夷門、復敗夏師、獲其將嵬名令公、薄中興府、引河水灌之、堤決、水外潰、遂撤圍還、遣太傅訛荅入中興、招諭夏主、夏主納女請和」と委〜〜記せり。兀剌海城は、卽幹羅孩城なり。丁卯の年克ちて守らず、今再入りたるなり。また西夏書事

辛未の一擧に二國の降服

嘉定四年（太祖六年辛未）五月の處に「塔坦有黑白二種、時黑塔坦王白厮波强盛、兼併諸族地、起兵攻夏河西州郡、安全親率兵拒戰、大敗失其公主、遣使請以臣禮事塔坦方退、自是國勢益衰」とあり。黑塔坦は、卽黑韃靼にして蒙古なり。公主を失ふは、察合を與へたる事なり。白厮波は、白韃靼の阿剌兀思惕吉忽里の姪鎭國、蒙韃備錄の白四部、黑韃事略の白厮馬にして、鐵木眞と云ふべきを何故にか誤れり。又金國志にも「大安三年（辛未）春、西夏始爲大軍所攻、遣使求援、金主新立、不能援、大軍至興靈、而反、夏人恨之、遂叛」とあり。西夏の降服は、元史の己巳と親征錄集史の庚午と金國志西夏書事の辛未と三說ありて、いづれか是なるを知らず。いづれにしても金の降服よりは前に在れば、祕史の記載の順序は違へるに似たり。）

成吉思合罕は、かく出征〜たる時、乞塔惕の民の阿勒壇罕を降〜て、多き段物を取りて、合申の民の不兒罕を降〜て、多き駱駝を取りて、成吉思合罕は、羊の年（この卷の初にある太祖六年辛未の歲）かく出征〜たる時、乞塔惕の民の阿忽台と云へる阿勒壇罕を降〜て、唐兀惕の民の亦魯忽不兒罕を

降〜て、回りて、撒阿哩客額兒に下馬せり。（阿忽台は、金の宣宗の國語なり。宣宗の國語の名にもあらず、蒙古人の附けたるあだなるべし。亦魯忽は、不兒罕李安全の國語の名なるべし。親征錄に失都兒忽とあるは、次の卷に見ゆる末帝李睍の一名を誤り書きたるに似たり。）

太祖九年甲戌の再征

又その後趙官の處に（趙官は、宋の蒙語なり。趙家の轉訛か。又は趙氏の官家の義か。）和親に遣りたる主卜罕を頭とせるあまたの使を乞塔惕の民の阿忽台なる阿勒壇罕に妨げられて、成吉思合罕は、狗の年（我が順德天皇建保二年甲戌、宋の嘉定七年、金の宣宗貞祐二年、元の太祖九年、西紀一二一四年、太祖五十三歲の時）、乞塔惕の民の處に再出馬せり。（主卜罕の拘へられたる事は、親征錄集史みな載せず。元史は、主卜罕を撒不罕と書きて、太宗紀に三年辛卯夏、命拖雷出師寶鷄、遣撒不罕使宋假道、宋殺之。復遣李國昌使宋需糧、と云ひ、容宗の傳に辛卯、拖雷總右軍、自鳳翔渡渭水、過寶雞、入小潼關、涉宋人之境、沿漢水而下、遣撒不罕詣宋假道、且約合兵。宋殺使者。拖雷大怒曰、彼昔遣苟夢玉來通好、遽自食言背盟乎。乃分兵攻宋諸城堡、長驅入漢中、進入四川、陷閬州、過南部而還。と云へり。然れば撒不罕卽ち主卜罕は、金人に拘へられたるに非ず〜て、宋人に殺されたるなり。その殺されたるは、この年の事に非ず〜て、この年より十七年後なる太宗三年の事なり。されども元史は已に誤り多く、且陳桱の通鑑續編には、撒不罕至青野原、金統制張宣殺之、とあるに據り、高寶銓は、祕史を誤れりとはせず、元史曰、宋殺、蓋金殺之、而諉爲宋殺也、と云ひ、又太宗紀に撒不罕の事を載せたるをも、彼紀、蓋因遣李國昌需糧、追溯太祖時遣使之事耳、不然、豈有假道被殺、復遣使需糧乎、と云へり。この考も一說に備ふべし、但甲戌の再征は、太祖自ら出馬〜たるに非ず。太祖は塞外に駐り、諸將を遣〜て中都を攻め〜めたるなり。太祖紀に、九年甲戌、太祖居庸關を出でたる後、夏五月、金主遷汴、以完顏福興及參政抹撚盡忠、輔其太子守忠、留守中都。六月、金丞軍斫荅等、殺其主帥、率衆來降。詔三摸合石抹明安、與斫荅等圍中都。帝避暑魚兒濼。秋七月、金太子守忠走汴、とあり。親征錄も略同じく〜て、甚だ委し。又通鑑續編には、五月、金主遷汴。蒙古主聞之怒曰、既和而遷、是有疑心、而特以和款我耳。復圖南侵、とあり。いづれに據りても、甲戌の再征は、金の宣宗の遁れたる後にあるを、祕史にこの再征に由りて金帝遁れ出でたりと云へるは誤れり。）

高寶銓の回護の說

遷都の後なる再征

降り畢へて、趙官の處に遣りたる使をいかでか妨げたる、と云ひ出馬するに、成吉思合罕は、潼關の口を指〜て、者別をば察卜赤牙勒に依り［進ま］〜めたり。（潼關は、河南陝

撒不罕の殺されし

潼關の戰

西の間の關門に〜て、今の河南陝州閿鄉縣の西六十清里、陝西同州府華陰縣の東四十清里に在り。察ト赤牙勒は、居庸關の蒙語、前に見えたり。親征錄元史本紀に據るに、潼關を攻めたるは、撒兒只兀惕の撒木合巴阿禿兒に〜て、太祖自ら出でたるに非ず。又甲戌の年者別の關に入りたることも、元史親征錄に見えず。）成吉思合罕を潼關の口に依り［進み］たりと阿勒壇罕知りて、亦列合荅豁孛格禿兒三人に軍を統べさせて、「軍塞りて、忽剌安迭格連（譯すれば赤き帽、金史の謂はゆる山東の花帽軍）を先鋒と〜整へて、潼關の口を爭ひ、峠を勿越させそ」とて、亦列合荅豁孛格禿兒三人を軍を急が〜遣りき。潼關の口に到れば、乞塔惕の軍は、地を捲きて來ぬ。（地の下、原文に誤字あり譯〜難〜。意を以て語を作れり。）成吉思合罕は、亦列合荅豁孛格禿兒三人と立ち合ひ（〜對戰）て、亦列合荅を動せり。拖雷、出古古哩堅（即ち卷八の赤古古咧堅）二人は、橫

拖雷出古の奮戰

より衝きて、忽剌安迭格連を退けて到りて、亦列合荅を動〜て敗りて、乞塔惕を爛木の積れる如く殺せり。乞塔惕の軍どもを殺〜て畢はれたりと阿勒壇罕知りて、中都より出でて、遁れんと南京の城に入りき。（金の南京は、古の大梁また汴梁、今の河南開封府なり。）殘れる彼等の軍士どもは、瘦せて死ぬる時、己等の閒にて人の肉を食ひ合ひけり。拖雷出古古哩堅二人は善き處に働けりとて、成吉思合罕は、拖雷出古古哩堅二人を大に恩賞せり。（金史元史親征錄に據るに、潼關の戰には、太祖親ら臨まざるのみに非ず、拖雷出古二人もそれに與りたりとは見えず。二人の相攜へて奮戰〜たるは、親征錄通鑑續編に據るに、太祖七年壬申德興府を攻むる時にありき。又潼關の守將は尼龐古蒲魯虎に〜て、亦列合荅など云へる人も見えず。親征錄に、金の通州の元帥蒲察七斤來降（金史元史）の後、丙子（太祖十一年）の前に「上駐軍魚兒濼命」

撒木合巴阿禿兒南侵の委〜き事實

三合拔都、帥蒙古軍萬騎、由西夏、抵京兆、出潼關、破嵩汝等郡、直趨汴梁、至杏花營、大掠河南、回至陝州、適河冰合、遂渡而北」とあり。元史太祖紀は「十一年丙子秋、撒里知兀鮮三摸合拔都魯率師、由西夏趨關中、遂越潼關、獲金西安軍節度使尼龐古蒲魯虎、拔汝州等郡、抵汴京而還」とありて、親征錄と年違へり。金史は、この戰の始末を叙ぶること最詳なり。今宣宗本紀、必蘭阿魯帶、完顏仲元、朮虎高琪、胥鼎、尼龐古蒲魯虎等の諸傳を合せ考ふるに、「貞祐四年(太祖十一年)秋八月丙子、元兵攻延安、九月辛巳朔、元兵攻防州、以簽樞密院事永錫爲御史大夫、領兵赴陝西、便宜從事、冬十月癸未、招射生獵戶、練習武藝、知山徑者分屯陝虢要地、命遙授知歸德府事完顏仲元、率山東花帽軍、徙軍盧氏、改商州經略使、權元帥右都監、元兵攻潼關、由禁坑出、戍卒皆潰、西安軍節度使尼龐古蒲魯虎禦戰、兵敗死焉」禁坑は、一名禁谷、今の潼關廳の南にあり。元の兵は、この間道より遶り出でて、潼關を破れり。「戊辰、元兵徇汝州、仲元軍趨商虢、復至嵩汝、皆弗及。河東南路行省胥鼎、聞元兵已越關、庚午、遣洛州元帥左監軍必蘭阿魯帶、領軍一萬、孟州經略使徒單百家、領兵五千、自便道濟河趣關陝、自將平陽精兵、赴援京師。十一月壬午、胥鼎入京師、拜尚書左丞、兼樞密副使。乙酉、元兵至沔池、右副元帥蒲察阿里不孫、軍潰而逃、阿魯帶亦被創、元兵過陝州、由三門集津北渡而去。戊戌、華州元帥府復潼關。十二月癸亥、元兵攻平陽、胥鼎遣兵拒戰、元兵不利、乃去」金國志は、親征錄の如く、誤りてこの役を一年前の事とし、「貞祐三年八月、大軍自河東渡河、攻潼關、不能下、乃由嵩山小路趨汝州、過山澗、輒以鐵鎖相鎖、連接爲橋以渡、于是潼關失守。金主急召花帽軍于山東、十月、大軍至杏花營、距汴京二十里。花帽軍擊敗之。大軍復取潼關、自三門析津、乘河

續綱目續資治通鑑の誤

冰合、布灰引兵而渡、自是不復出」とあり。年月は金史と違へれども、事實は大概合へり。「攻潼關不能下」と云へるは、竟に下らざるに非ず、禁坑より遶り出でられて、戍卒潰えたる故に、下に「潼關失守」とあり。その「由嵩山小路」と云へるは、潼關を遶れる間道に非ず、潼關を越えたる後に汝州に趨ける山徑なり。「召花帽軍于山東」は、完顏仲元に命ドて入り援はしめたることなり。金史元史に記せる丙子の役と一事なること、疑ふべきなし。然るに商輅の續綱目は、金國志親征錄に據り、乙亥の年に、三合拔都南侵の事を記して、「潼關失守」「自是不復出」の二句を省き、又丙子の年に金史元史に據りて「冬十月、蒙古兵克金潼關、次嵩汝間」云云」と書きて、三合拔都の名を省きたるは、金國志の紀年の誤に因り、一事を兩事としたるにて、謂はゆる誤に因りて更に誤れるなり。畢沅の續資治通鑑も續綱目の誤に襲れり。この二史は、人の信用する書なるが故に、その誤をかく辨ド置くなり。さて又丙子の役は、金の腹地を荒したれども、さほどの大捷もなかりしに、祕史には金軍の殲滅窮餓の狀を事事しく叙ぶるを見れば、太宗三年拖雷の陝西より入りて汴京に迫りたる三峯山の大捷、元史に「流血被道、資仗委積、金之精銳、盡於此矣」とあるものと混ト たるに似たり。然らば亦列合苔は、三峯山の敗將移剌蒲阿完顏合達なるべし。(豁孛格禿兒に似たる名は見えず。忠孝軍の總領完顏陳和尚の稱號などにてやあらん。)

失喇客額兒の駐蹕

成吉思合罕は、河西務を下すと、中都の失喇客額兒に下馬せり。

(河西務は、鎮の名、今の順天府武清縣の北、白河の支流なる新引河の西にあり。失喇客額兒は、黃なる原の義なれば、中都の近郊を呼べる

蒙語なるべけれども。いづこを指せるか知らず。但この文誤れり。金の宣宗の遷れる頃は、親征錄元史に據るに、太祖は塞外に居りて、中都の邊に到らざりしなり。）

者別の關破り

者別は、察卜赤牙勒の關を破りて、察卜赤牙勒を守れる軍を動して來て、成吉思合罕に合へり。（この時居庸關には金の守兵なかりき。）阿勒壇罕、中都より出づるに、中都の內に合荅を留守となし任せて去りたりき。（太祖紀に「十年乙亥三月、金御史中丞李英等、率師援中都、戰于霸州、敗之。五月庚申、金中都留守完顏福興、仰藥死、抹撚盡忠棄城走、明安入守之」とあり。この時の事は、金史の承暉（卽福興）、抹撚盡忠、李英、烏古論慶壽等の傳に甚委しけれども、合荅の名は見えず。親征錄には金の留守哈荅國和等とあり。衞紹王紀大安三年に西北路招討使粘合合打、宣宗紀貞祐三年に陝西統軍使完顏合打あれども、この合荅なりとも見えず。）

中都の留守合荅

成吉思合罕は、中都の金銀財段物何にても數へ〳〵めに、汪古兒厨官、阿兒孩合撒兒、失吉忽禿忽三人を遣りき。この三人を「來ぬ」とて、合荅は迎へ接けんと、金あり紋ある段物を取りて、中都の內より出でて、迎へに來ぬ。合荅に失吉忽禿忽言へらく「前にこの中都の物、卽中都は、阿勒壇罕のなり〳〵ぞ。今中都は、成吉思合罕のなるぞ。成吉思合罕の物なる段物を背處にて奈何ぞ偷みて持ち來て與ふる、汝。我取らず」と云ひて、失吉忽禿忽は取らざりき。汪古兒厨官、阿兒孩二人は取りたり。この三人は、中都の物皆を數へて來ぬ。そこに成吉思合罕は、汪古兒阿兒孩忽禿忽三人に「合荅は何をか與へたる」と問へり。失吉忽禿忽申さく「金あり紋ある段物を持ち來て與へき。我言へ〳〵「前にこの中都は、阿勒壇罕のなり〳〵

失吉忽禿忽の廉直

ぞ。今は成吉思合罕のとなりたるぞ。汝合荅は、成吉思合罕の物を背處にて偷みて奈何ぞ與ふる、汝」と云ひて、我は取らざりき。汪古兒阿兒孩二人は、彼の與へたるを取りき」と云へり。成吉思合罕は、そこに汪古兒阿兒孩二人を甚く咎めたり。失吉忽禿忽を「大なる道理を考へけり、汝」と云ひ、大に恩賞〳〵て、「視る我が目、聽く我が耳となりて居らずや、汝」と勅ありき。（親征錄に「明安太保入據之、遣使獻捷。上時駐桓州、遂命忽都忽那顏、與雍古兒寶兒赤、阿兒海哈撒兒三人、檢視中都帑藏。時金留守哈荅國和等、奉金幣、爲拜見之禮。雍古兒哈撒兒受之。獨忽都忽拒不受、將哈荅及其物北來。上問忽都忽曰「哈荅等嘗與你物乎。」對曰「有之。未敢受之。」上問其故。對曰「臣嘗與哈荅言、未陷城時、寸帛尺縷皆金主之物。今既城陷、悉我君物矣。汝又安得竊我君物爲私惠乎。」上正佳之、以爲知大體。而重責雍古兒、阿兒海哈撒兒等、不珍也。哈荅因見其孫榮山而還」とあり。正佳不珍の二語は、字の誤りあらん。元史には「明安入守之」の下に、だ「是月、避暑桓州涼涇、遣忽都忽等、籍中都帑藏」とあり。）

金の質子

阿勒壇罕は、南京に入りて、親降り頓首て、騰格哩と云ふ子を百の從者にて「成吉思合罕の處に侍衛になれ」とておこせけり。（金史元史を考ふるに、金の宣宗は、質子を送りたることなし。太宗四年（金の哀宗天興元年）三月、速不台等南京を圍みたる時、金の哀宗は、弟荆王守純の子曹王訛可を出〳〵て質たらしめ、太宗は速不台を留めて還り、居庸を出でたることを、太祖宣宗の時の事と誤りたるに非ずや。）

合撒兒東略の命

彼等に降られて、成吉思合罕は、退かんとて察卜赤牙勒に依りそこに退く時、合撒兒を左手の軍にて海に遵ひて遣る時、「北京の城に下馬せよ。北京の城を降して、彼方主兒扯惕の夫合訥を過ぎ去りて、夫合訥反かんとせば、打取れ。降らば、彼の邊なる彼の城どもを過ぎ、

兀刺河訥兀河に沿ひ去りて、塔兀兒河に泝り山越えて、大老營に會ひに來よ」と宣ひて遣りぬ。（金の北京大定府は、古の奚の地遼中京を建て、大定府と名づけ、金北京と改め、元の至元七年大寧路と改め、明大寧衛とせり。清一統志に「大甯故城、在今內蒙古喀喇沁右翼南百里喜峯口東北四百八十里、老哈河之北。」老哈河は、白狼河とも云ふ。水道提綱に「白狼河、經故大甯城南、俗稱巴爾漢城、一曰察罕巴爾漢城」とあり。主兒扯惕は、女眞卽主兒臣の複稱、金の本國の民なり。夫合訥は、蒲鮮の訛ならん。親征錄甲戌（太祖九年）四月の處に「金主之南遷也、以招討萬奴爲咸平路宣撫、復移治於忽必阿蘭。至是亦以衆來降、仍遣子鐵哥入質。既而復叛、自稱東夏王。」太祖紀に「十年乙亥冬十月、金宣撫蒲鮮萬奴據遼東、僭稱天王、國號大眞、改元天泰。十一年丙子冬十月、蒲鮮萬奴降、以其子帖哥入侍。既而復叛、僭稱東夏」とあり。兀刺は、女眞語河なり。黑龍江を薩哈連烏刺と云ひ、松花江を吉林烏刺と云ふ。こゝの兀刺は、松花江なり。清一統志に「打牲烏拉城、在吉林城北七十里、混同江東岸。烏拉之先布顏、築城於烏拉河上、洪尼地、國號烏拉」とある混同江も烏拉河も、皆松花江なり。納兀河は、盛京通志の諾尼江、水道提綱の嫩泥江、龍沙紀略の腦溫江に〜て、今は嫩江と云ふ。高寶詮曰く「嫩泥江、古名難水、亦曰那河、元史地理志稱桃溫水、特薛禪傳曰「惱木連、忽憐傳曰「猛河、伯帖木兒傳曰「納兀河、洪萬傳曰「那兀河、王綽傳曰「那河、皆卽納語對音。」塔兀兒河は、水道提綱に「洮兒河、亦曰桃爾河、源出西興安山東麓」云云、至札賴特旗南、匯爲納藍撒藍池、猶言日月池也。東流入嫩泥江。」黑龍江外紀に「唐書他漏河、卽今拖爾河、一作淘兒河。其源流千里、竝在蒙古境內。」高寶詮曰く「洮兒河、魏書稱太彌河、北史曰太岳魯水、唐書曰它漏河、遼史曰他魯河、曰撻魯河、金史曰撻魯古河、皆卽討浯兒之對音。」高氏は、元史の桃溫を納兀河と〜たれども、納兀にはあらず〜て、塔兀兒なるべ〜。）合撒兒と共に、官人より主兒扯歹阿勒赤脫侖扯兒必三人を遣りたり。（この東征の軍は、太祖八年癸酉九年甲戌に涉れる三道侵掠の左軍なり。親征錄に「哈撒兒及斡津那顏拙赤斛薄刹爲左軍、沿東海破灤薊等城而還」と云ひ、太祖紀に「皇弟哈撒兒及斡陳那顏拙赤斛薄刹爲左軍、遼海而東、取薊州平灤遼西諸郡而還」と云へり。哈撒兒は、卽合撒兒なり。斡津那顏卽斡陳那顏は、按陳那顏の誤なるべ〜。拙赤斛は、喇失惕の集史に主兒赤歹と云ひて、成吉思汗の幼子と注〜、陳子なり。然るに祕史の阿勒赤は、斡津斡陳は按陳の桎の通鑑續編に太祖の六子を擧げて庶子朮兒徹歹あるに由り、洪鈞は、集史と蒙韃備錄とを引きて、太祖の皇子なることを考證〜たれども、祕史に官人主兒扯歹と云へるを見れば、やはり兀嚕兀惕の主兒扯歹なりけり。元史親征錄には、薄刹ありて、脫侖扯兒必なし。脫侖扯兒必は、親征錄乙亥（太祖十年）北京降服の續に「上遣脫脫欒闍兒必、帥蒙古契丹漢軍南征、木華黎の傳、乙亥北京興中降服、錦州の張鯨來降の續に「詔木華黎以鯨總北京十提控兵、從掇忽闌南征、未附州郡」石抹也先の傳にも「命也先、副脫忽闌闍里必、監張鯨等軍、征燕南未下州郡」石抹孛迭兒の傳にも「從奪忽闌闍里必、徇地山東大名」などあれば、脫侖は、合撒兒に從はず、又は從へりとも、途よ

女眞の蒲鮮萬奴

兀刺河納兀河塔兀兒河

合撒兒に從へる三將

合撒兒の東略

り還りて、木華黎の部下に屬〜たるなりけん。）合撒兒は、北京の城を取りて、主兒扯惕の夫合訥を降〜て、路にある城を取ると、合撒兒は、塔兀兒河に泝り來て、大老營に下馬〜て來ぬ。（北京の降服は、元史に據れば、

木華黎に降れる北京

木華黎の功なり。親征錄には、三合拔都黃河を渡りて北に還れる後「金元帥尹荅忽監軍斜烈、以北京來降」とありて、誰に降れりとも云はず。喇失惕の史に「撒兒主惕の撒木哈、黃河を渡り、西京に趨きたれば、西京の守將因荅兒、罕撒兒撒列迎へ降れり」とあるに由り、洪鈞は「錄作北京、係誤」と云ひたれども、太祖紀には「十年乙亥二月、木華黎攻北京、金元帥寅荅虎烏古倫以城降。以寅荅虎爲留守、吾也而權兵馬都元帥鎮之」と云ひ、木華黎吾也而石抹也先の傳に、その事詳なれば、北京は誤らず〜て、西

寅荅虎の僚屬なる烏古倫

史の西京は却て誤れり。但石抹也先の傳には、北京を降す前に、奇計を用ひて東京を降〜たることを載せたるに、東京の守將を寅荅虎と〜たるは誤れり。又太祖紀の寅荅虎烏古倫を殿本は烏庫哩伊勒都呼と改め、その考證に「考烏庫哩爲金之著姓、若是兩人、不當一稱名而一舉姓、此事宣宗本紀未載、蘇天爵名臣事略載木華黎攻北京、金守將銀青嬰城自守、其將高德玉等殺銀青、推烏古論寅荅虎爲帥、未幾以城降、聚之續通鑑亦同、爲太祖九年事、年月雖不符、而姓名則合、且以下文寅荅虎爲留守文義考之、其爲名氏顚倒無疑、今據改」と云ひ、畢沅の續資治通鑑の考異に「疑載筆者未知烏古論爲姓、寅荅虎爲名、文有顚倒耳、」錢大昕の諸史拾遺にも「東平王世家作烏古倫寅荅虎、烏古倫者、寅荅虎之氏、非兩人也、史臣不辨姓名、倒其文、遂若別有一人矣」と嘲りたり。然れども史天祥の傳に「乙亥、與大帥烏野兒降其北京留守銀荅忽、同知烏古倫」とあり。烏野兒は卽吾也而、銀荅忽は卽寅荅虎なり。烏古倫は、寅荅虎の僚屬なるを、寅荅虎はその姓を略し、烏古倫はその名を佚して、本紀は又烏古倫の官名を脫したる故に、遂に一人ならんと疑はゝむるに至れり、明の史臣いかに史事に昧くとも、烏古倫の姓なることを知らざらんや。又續綱目甲戌九月の

銀青奧屯襄

條に「木華黎攻金北京。北京裨將完顏昔烈、高德玉等、殺守將銀青云云、木華黎の傳にも「其下殺銀青」とあり。錢大昕の考異に「銀青、蓋舉其官名、謂銀青光祿大夫、非人姓名也」と云へり。今金史奧屯襄の傳を見るに「貞祐三年正月、襄爲北京宣差提控完顏習烈所害」とあり。習烈は、卽續綱目の昔烈、又卽親征錄の斜烈、奧屯襄は、卽

合撒兒の東略につきての疑ひ

謂はゆる銀青なり。北京の降れるは、元史紀傳みな乙亥の年なるを、續綱目に甲戌の年としたるは、名臣事略に因りて誤れるなり。さて合撒兒の東征は、元史に據れば、遼西諸郡を取れるのみにして、北京を取れるは木華黎なるを、祕史に合撒兒北京を取ると云へるは、傳聞の異辭なり。むしろ祕史の誤ならん。又遼東の經略も、耶律留哥の傳に「歲壬申（太祖七年）太祖命按陳那衍行軍至遼東、留哥率所部降之云云」とあれば、この按陳卽阿勒赤の東略は、卽合撒兒に從ひて行きたるにやとも思はるれども、その年（七年壬申）は、三道侵掠の年（八年癸酉）の前なれば、强ひて牽き合はせ難し。又夫合訥を蒲鮮の訛とすれば、蒲鮮萬奴の降りたるは、親征錄は九年甲戌の四月とし、太祖紀は十一年丙子の十月とし、相去ること二年半にして、いづれも合撒兒に降ると云はず、その詳なることは、今考ふべからず。）

西域征伐の始まり

その後成吉思合罕は、撒兒塔兀勒の民に兀忽納が頭たる百の使を拘へて殺されて、成吉思合罕宣はく「金の糜繩を撒兒塔兀勒の民にいかでか斷たゞめたりし」とて、「兀忽納が頭たる百の使[の爲]に、讎復し怨報いに、撒兒塔兀勒の民の處に出馬せん」とて出馬する時、(この撒兒

(幹雪勒 幹旋 乞撒勒 乞三)

闊喇自姆の異稱

塔兀勒は、闊喇自姆朝を云へるなり。闊喇自姆朝の管内には撒兒惕人即抹哈篾惕敵徒多きが故に、蒙古人は撒兒塔兀勒の國と云へり。親征錄、元史本紀には西域の汎稱を用ひ、列傳には回紇回鶻又は回回と云ふ。回回も、回紇の轉なり。唐の回紇の遺種は、實に畏兀兒にゝて、畏兀兒も回紇の轉なり。元人は回紇の遺種を呼ぶに畏兀兒の新名を用ふるは善けれども、回紇の舊名を闊喇自姆朝に當てたるは誤れり。長春の西游記には、畏兀兒をも撒兒塔兀勒をも皆回紇と云へり。闊喇自姆朝の本土は、鹹海の南、裏海の東に在り、今の(希哇)の地にゝて、玄奘の西域記に貨利習彌伽、隋書西域傳に穆國、新唐書西域傳に火尋、或曰貨利習彌、曰過利、元史地理志に花剌子模と云ひ、西人は合喇自姆とも闊哇咧自姆とも忽哇咧自姆とも云ふ。闊喇自姆朝の興亡と蒙古西征の事蹟とは、主吠尼喇失惕の記載甚詳かなり。北宋の時、薛勒主克王馬里

闊喇自姆朝の興り

克沙の僕努施特勤、始めて、闊喇自姆部の酋長となり、その子庫惕別丁抹哈篾惕は、闊喇自姆沙と稱し、西遼興りて、庫惕別丁の子阿次思は、その屬國となれり。阿次思の子亦牙勒阿兒思闌は、闊喇散を取り、その嗣子塔喀施は、宋の光宗紹熙五年(西紀一一九四年)薛勒主克朝を滅し、亦喇克阿者姆を取り、巴固荅惕の合里發より冊封を受けたり。宋の寧宗慶元六年(西紀一二〇〇年)塔喀施の子阿剌額丁抹哈篾惕嗣ぎ立ち、巴勒黑赫喇惕馬聲迭嚴乞兒曼を幷せ、乞魄察克を打破り、元の太祖四年(一二〇九年)西遼に叛き、その西境を奪ひ、八年(一二一三年)河間の國(西回紇)を滅し、撒馬兒罕に新都を建て、闊喇自姆の兀兒堅只城を舊都と云へり。又誥兒の國を幷せ、その後嘎自納の地を定めたる時、合里發納資兒より誥兒の君に與へて闊喇自姆を圖らゝむる密書を得て、大に怒り、納資兒を廢せんと欲し、大軍を率ゐて西征し、路にて發兒思阿在兒拜展を降し、太祖十三年戊寅(一二一八年)合里發の領地に入りたれども、大雪に遭ひ、又土兵に襲はれ、利あらずゝて退けり。還りて孛合喇に到れば、西域の商侶蒙古より歸り、太祖の贈物を上り、通商を求むる辭を傳へ、阿剌額丁はいやいやながらそれを許せり。既にゝて太祖は諸王官人に命じて各貨を出さしめ、畏兀兒人四百餘人を發し

兩大國の發端

て、西域の商侶に從ひ往きて、その產物を求めゝめたり。然るに斡惕喇兒城に到れる時、城將亦納勒主克、該兒罕は悉く拘へて、蒙古より細作を遣せりと王に告げたれば、王は命じて悉く殺さゝめ、惟一人逸げ歸りたり。捏撒腓は[その中四人は使にて、外は皆商人なり。それらを殺せるは、亦納勒主克の意にゝて、王の命に非ず]と云へり。耶律楚材の西游錄に[苦薩西北五百里、有訛打剌城。此城渠酋、嘗殺命吏數人、商賈百數、盡掠其財貨、西伐之擧由是也]とあり。命吏數人は、捏撒腓の使四人と云へる

に近く、商賈百數は、祕史の百の使と數は合へり。喇失惕の四百餘人は、おまけあるに似たり。洪鈞の西域補傳に多遜を譯して「太祖問逸者歸報、驚怒而慟、免冠解帶、跪籲於天、誓必雪恨。其時古出魯克餘孽猶未靖、乃先遣西域人巴固喇爲使、偕蒙古官二人往詰責云云。王筆死巴固喇、薩蒙古官、翼釋歸以辱之、自聚兵於撒馬兒罕」と云ひ、この下に蒙古の兵簸兒乞惕の餘衆を逐へるもの、合米赤河にて闊喇自姆の兵と衝突せる小戰あり。太祖紀には只「十四年己卯夏六月、西域殺使者、帝率師親征」とあり。）

也遂合屯の建議

「合罕は、高き峠を越え、廣き河を渡り、長き出征に出征し、多き國を平げんと思ひ給へり。生れたる只命あるものに長生なるは無かりき。大木の如き爾が身傾き去らば、麻穰の如き國民を誰にか委ねん。柱の如き爾が身倒れ去らば、羣鳥の如き國民を誰にか委ねん。生れたる四人の駿れたる子だちを、彼等の誰をとか宣ふらん。

太祖の嘉納

子だちに弟だちにあまたの民草に我儕小人にも心附けてあらまほし。心附きたることを建議〜たるなり。聖旨知〜めせ（明譯）皇帝渉歷山川、遠去征戰。若一日倘有不諱、四子内命誰爲王。可令衆人先知」と奏〜たれば、成吉思合罕勅あるには「合敦の人にもあれど（婦人なれども）、也遂の言は、善きよりも善し。誰も弟ども子ども汝等も孛斡兒出木合里等も、かくは建議せざりき。我も先祖の大業を承繼がざるに（承繼ぐべき人を定めざるに）、忘れて居りき。死ぬることを得られざるに、睡りて居りき」と宣ひて、「我が子どもの兄は、拙赤なるぞ。何をか云ふ、汝。言へ」と宣へり。

拙赤を察阿歹の罵り

拙赤の怒り

拙赤聲を出す前に、察阿歹言く「拙赤に言へと宣ふは、拙赤にや委れんと宣ふならん。この篾兒乞惕より出でたるものにいかんぞ知らゝめん、我等」と云ふと等〻く（拙赤の生れたる時の事は、祕史に載せざれども、孛兒帖兀眞の篾兒乞惕に掠められ、太祖王罕札木合三人の征伐に乗じて逃げ歸りたる後に生れたる故に、拙赤と名づけられたり。拙赤は、蒙古語客なり。洪鈞の朮赤補傳は、喇失惕阿不勒噶資に據り「孛兒台有姊爲汪罕妃烈祖又嘗有德於汪罕故聞太祖之訴即脅蔑兒乞歸孛兒台未被掠時孕已數月比在歸途朮赤生倉卒無襁兒具乃摶氈如籃形置於騎以載歸太祖喜曰此不速之客也故名曰朮赤」と云へり。この事情に依りて篾兒乞惕のおみやげなりとの疑ひもありしと見ゆ。）拙赤は起ちて、察阿歹の領に〻がみつきて言く「罕額赤格には取分けて言はれざるに、汝は我をいかでか揀分けたる。いかなる技能にて勝れたる、汝。（額兒頗 合黑察）たゞ剛情にてのみ蓋勝れたり、汝。遠箭を射て汝に勝たれ（客察兀 桓兗察 合兒苔）

喧嘩の引き分け

闊闊搠思の懇なる訓諭

ば、親指を斷ちて去てん。（赫咧該）搏ち合ひて汝に勝たれば、倒れたる地に起きざらん。（阿巴勒都 亦剌黑答 兀納）罕額赤格の聖旨知〻めせ」と云へり。拙赤察阿歹二人領を執り合ひて立ち居る時、拙赤の手を孛斡兒出扯きて、察阿歹の手を木合黎扯きて居る時、成吉思合罕聽きて、噤みて在せり。そこに闊闊搠思は、左の邊に立ちて言く「察阿歹は、何ぞ遽てたる、爾。爾の罕額赤格は、子だちの内にて爾に望を掛けて居給ひき。爾だち生るゝ前は、星ある天は、迴り（變動）てありき。（都 都兒赤 斡樂）多國民は、反き居りき。臥處にも入らず、掠め合ひたりき。（斡嚕都兒 斡嚕 斡勒札剌勒敦）地皮ある地は、飜りてありき。（闊哩速 闊兒別）普き國民は、反き居り（古兒）

き。食にも臥さず、攻め合ひたりき。かゝる時には、[互に]用心〳〵て、[外に]行かざり〳〵ぞ。[行けば]出遇ふことりゝぞ。[家に]躲れて、[外に]行かざり〳〵ぞ。[行けば]親みて、[外に]行かざり〳〵ぞ。[行ことりゝぞ。[一族]親みて、[外に]行かざり〳〵ぞ。[行けば]殺〳〵合ふことりゝぞ。賢き合敦なる母を、蘇油に心凝ら〳〵めて、馬乳に心解け〳〵めて、物言へり、爾。(ひ醉て妄語せりとの意ならん。)溫處よりひよこりとその腹より生れざり〳〵か、爾等。熱處よりむくと獨胞衣より出でざり〳〵か、爾等。心より生れたるその母を怒らせば、彼の德を歌ひて怒息ま〳〵むとも能はじ。腹より生れたるその母を怨

歌嗚列勒敦 格卜田 古辭 不嗚兀惕 阿馬剌 不勒合勒都 古嗚勒扯 不勒惕 主嗚堅 脫孫 主嗚堅 不列延 合剌溫 合剌惕 合黑察 合忽納黑 合嗚 赤馬惕合 赤納兒 者乞兒 格木 札里剌兀魯 客額里

創業の艱難

みさせば、彼の悔みを消すとも能はじ。(明譯察阿歹你爲甚忙。皇帝見指望你。當您未生時、天下擾攘、互相攻劫、人不安生。所以你賢明的母、不幸被擄。若你如此說、豈不傷著你母親的心。)爾だちの罕額赤格は、帝國を立つるに、黑き頭を馬に載せて、黑き血を皮桶に入れて、黑き眼を瞬もせず、匾き耳を枕にも置かず、袖を枕きて、襟を鋪きて、涎を飲み(涎に渴を愈し)て、失吉(齒の間に挿まれる肉)を食ひ(宿食に當て)て、額の汗は脚底に到るまで、脚底の汗は額に到るまで、進み愼み行く時に、爾だちの母は、諸共に苦み合ふに、さつぱりと髮結ひて、裾紮げ帶締めて、〳〵つか

哩兀魯 格納額兒 格思格 合剌 帖哩兀 罕土合剌 合剌 赤速 南不合剌 合剌 赤乞 迭剌 合塔孫 迭不思 罕出 迭剌 塔勒袞 失魯孫 溫答剌 迭不思 合剌 赤乞 迭剌 塔勒袞 溫答剌 合剌 帖哩兀 合黑塔剌周 赤台塔剌 不薛列周 赤台塔剌

鞠育の劬勞

りと髮結ひて、身を堅め帶締めて、爾だちを育つるに、（你都喇塔剌 不薛列周）嚥む閉に半を與へて、喉に咽びて都てを與へて、空〜（札勒吉 札哪 舩幹來 舩脫剌 舩幹孫）くて行きたりき。爾だちの肩を扯きて、「男と齊等に誰（額格木 額哪）にならせん。」爾だちの頸を扯きて、「人と齊等に誰にならせん」と云ひて、爾だちの不亦（古圭溫 古溫 譯義を知らず。）を淨めて、爾だちの踵を擡げさせて、男の肩に騸馬の臀に達かゝめて、（不兒備 額哪 阿黑塔 合兒甘）今爾だちを好く見んと思ひて居給はずや。賢明なる我等の合敦は、日の如く明なる湖の如く寛き心坐〜まゝき（納嗚 納兀兒 明譯）你父初立國時、與你母一同辛苦、將您兒子每養大望（オホシノゾミタヒキ マシノナラン「タヒト」 ナヒト）你成人。你的母、如日般明、海般深。這等賢明、你

太祖の諭し

察阿歹の讓り

如何可這般說」と云へり。

それより成吉思合罕宣はく「拙赤をいかんぞかく云へる、汝等。我が子どもの兄は、拙赤に非ずや。後はかく勿云ひそ」と勅ありき。この言につき、察阿歹微笑みて言く「拙赤の力ある技能の答は言ふまじ。口にて殺〜たるは、馱すべからず。言にて死なゝめたるは、剝取るべからず。（惡く言はれても滅りはせずとの意ならん。）子どもの兄は拙赤我等二人なるぞ。罕額赤格に竝行き、力を與へん。逃げたるをば、劈き砕り合はん。後れたるをば、踵を斷ち砕り合はん。斡歌歹の（阿赤 兀格額兒 阿馬阿兒 阿剌黑三 兀赤 兀忽兀魯克先 苔勒苔哩黑三 苔勒巴魯 都只苔黑三 輕古哈）みは、敦厚なり。斡歌歹を云ひ合はん。（勸進せん。）斡歌歹は、罕額

赤格の前に居て、形影大なる皮帽の訓を奉け〜めば、（巴剌阿）可からんぞ」と云へり。この言につき成吉思合罕宣はく

拙赤の讓り

「拙赤は、何をか云ふ。言へ」と宣へり。拙赤言く「察阿歹已に言へり。察阿歹我等二人〔罕額赤格に〕竝行き、力を與へん。

諸子分封の端

斡歌歹を云ひ合はん（明譯教斡歌歹承繼者）」と云へり。成吉思合罕勅あるには「竝行きつゝ何ぞあらん（明譯你二人不必竝行）。土地なる母は、廣くあり。河ども水どもは多くあり。分つべき營盤を廣げ、外國を鎮めさせ分たん」と宣ひて、「拙赤察阿歹二人は、言に遵ひ合へ。民に勿笑はせそ。人に勿嘲らせそ。前に阿勒壇忽察兒二人は、かくの如（合嘲）

斡歌歹相續のうけがひ

き言を定め合ひて、却てその言に遵はざる故に、いかにか爲られし。何をか爲されし。今阿勒壇忽察兒二人の子孫より汝等と共に分け合はん。彼等を見ては、いかんぞ慢られん、汝等（明譯如今他子孫見在。教隨您每、以爲鑑戒）」と宣ひて、「斡歌歹は、何をか云ふ。言へ」と宣へり。斡歌歹言く「合罕額赤格恩賜〜て言へと云はるれども、何をか申さん、我。能はずといかでか申さん。出來る限慎まんとも申さんぞ。久後若我が子孫に、青草に裏むとも、牛に喫はれざる、膏に裏むとも、狗に喫はれざる〔もの〕生れば、麋〔の如く〕跳越え、鼠〔の如く〕順ひ去らゝめんか。（辭額速）

まゝに譯〜たれども、さつぱり分らず、善く讀む人の判斷又は改譯を俟つ。明の譯官も困りたりと見えて、只恐後世子孫不才、不能承繼（と約めて、大意だけを譯せり。）これだけをぞ申さん。別に何をか申さん、我と云へり。この言につき成吉思合罕勅あるには「斡歌歹かゝる言を言ふならば、可きぞ」と宣へり。又「拖雷は何をか云ふ。言へ」と宣へり。拖雷言く「我は、合罕額赤格の名ざ〜たる兄に、前に居て、忘れたるを心附けて、睡りたるを喚覺〜て、然諾の伴、赤馬の鞭となりて、然諾より後れず、班列より缺けず、長き出征に出征して、短き（劇〜き）戰を戰ひて與へん」と言へば、成吉思合罕は善〜とし、勅あるには「合撒兒の子孫一人に「その位を」知

拖雷翼衛の志

太祖の兄弟五人各一人

（温塔喇黑散者 額兒迭者 兀馬兒塔黑散 兀兒禿 斜都兒 者兒格）

ら〜め、阿勒赤歹の子孫一人に知ら〜め、斡惕赤斤の子孫一人に知ら〜め、別勒古台の子孫一人に知ら〜めん。かく思ひて、我が子孫一人に知ら〜めて、我が勅は、別に爲さず（變へず）毀らざれば、違はざれ、失はざれ、汝等。斡歌歹の子孫に、青草（幹耶）に、裏むとも牛に喫はれざる、膏（幹兀坤）に裏むとも狗に喫はれざる「もの」生れば、我が子孫の內に一人も善きもの生れずやはあらん」と勅ありて、（合撒兒阿勒赤歹斡惕赤斤別勒古台四人の子孫の相續の事と太祖の子孫卽元帝金帳罕察合台罕亦勒罕の相續の事とは、編末の附錄に述ぶべし。）

相續の約

唐兀惕の徵發

成吉思合罕出馬するに、唐兀惕の民の不兒罕の處に使を遣り、「汝の右の手と爲らんと云ひたりき、汝。撒兒

塔兀勒の民に金の縻繩を斷たれて折證せんと出馬せり、我。右の手となりて出馬せよ」と云ひ遣りたれば、不兒罕聲を出さざるに、まづ阿沙敢不言く「力足らざる内に罕と爲りつゝ何」と云ひて、軍を添へず、大なる言を言ひて遣りき。そこに成吉思合罕宣はく「阿沙敢不にいかでかかく言はれたりゝと考へ、彼等の處に便翻りて指して往かば、何の難きことかあらん。別に即人の處に向ひて居る時なるぞ。「罷めん」その事を。長生の上帝に祐護せられば、金の牽胷堅固なるを扯きて來ば、そこに即成就せよ、その事を」と宣ひて、（この時の不兒罕は、夏の神宗李遵頊なり。襄宗安全

阿沙敢不の大言

忽闌合屯の隨行斡惕赤斤の留守

諸書異辭なき己卯の西征

は太祖六年に殂し、族人なる遵頊位を嗣げり。元史太祖紀には、十三年戊寅、即西域征伐の前年、是歲、伐西夏圍其王城、夏主李遵頊出走西涼とあれども、秘史の趣にては、疑隙開けたるのみにて、征伐は無かりし樣なり。親征錄集史にも、その年西夏を伐ちたることを載せず。）

兎の年（我が順德天皇承久元年己卯、宋の嘉定十二年、金の宣宗興定三年、元の太祖十四年、西紀一二一九年、太祖五十八歲の時）、撒兒塔兀勒の民の處に阿喇亦に依り越え出馬するに、成吉思合罕は、合屯より忽闌合屯を伴れ進み、弟だちより斡惕赤斤那顏を大老營に留守せしめて出馬せり。（耶律楚材の西游錄に「戊寅春三月、出雲中、抵天山、涉大磧、踰沙漠、達行在所。明年、大舉西伐。」元史耶律楚材の傳にも「己卯夏六月、帝西討回回國」親征錄「己卯、上總兵征西域」太祖紀「十四年己卯夏六月、西域殺使者、帝率師親征」使者の殺されたるは戊寅の年にして、己卯の年に出征したるなり。多遜の史は、主吠尼に本づきて、一二一八年に使者殺され、その冬成吉思汗は斡兒朶を發し、弟兀主堅（斡惕赤斤）に國の政を委ね、一二一九年の夏、亦兒的失の河邊に駐りて、馬を養ひ軍を整へ、委古兒の君（巴兒主克）、阿勒馬里克の君昔固納克帖勒、合兒魯克の阿兒思闌罕みな會し、秋、師進み、六十萬と云はれたり。闊喇自姆王懼れて、何の計もえせず、蒙古の軍昔渾河に至るまで、抗

敵するもの無かりき」と云へり。一二一九年は、卽己卯の年なり。丘長春の西游記に、宣使劉仲祿、己卯の五月「在乃滿國兀里朶得旨」とあるは、太祖親發の前月なり。乃滿國兀里朶は、太祖の四斡兒朶の一なる乃蠻の斡兒朶、辛巳の六月長春の立寄りたる處に〳〵て、下文に「窩里朶漢語行宮也、其車輿亭帳、望之儼然、古之大單于、未有若此之盛也」と云へり。耶律楚材の雲中より至りたる行在所も、この斡兒朶なり。一二一八年(戊寅)の冬、斡兒朶を發〳〵たる(多遜の史)は、客魯嗹河の大斡兒朶に〳〵て、乃蠻の斡兒朶を發〳〵たるは、己卯の六月なり。翌年庚辰の二月、長春燕京に入りて「行宮漸西」と聞けるは、己卯の秋軍を進めたることなり。己卯の西征は、諸書殆ど異辭なし。然るに喇失惕の史には「兎の年、諸皇子將帥を集めて西伐の事を議り、軍中の法度を定め、龍の年亦兒的失河に駐夏し、秋、軍を進めて、斡惕喇兒城に至る」とあり、諸書に較ぶれば、一年後れたり。親征錄は「己卯、上總兵征西域」とは書ぎ出〳〵たれども、次に「庚辰、上至也兒的石河住夏、秋進兵、所過城皆克、至斡脫羅兒城」と云へるは、全く喇失惕に同じ、蓋修正祕史の紀年に一年の後れありしと見えて、己卯より癸未まで五年の間の事蹟は、親征錄も集史も皆一年づゝ後れたり。洪鈞曰く「帝駐也兒的石河、應是己卯夏、而西域史、辰年方至也兒的石河、與親征錄同、由是而見脫必赤顏之敘西伐、誤始龍年、元史既本之、而又考知他書始於己卯、據以增入、於是攻取蒲華薛迷思干兩城、一事兩記、譯西域史、乃知其病在此」この一事兩記は、錢大昕より疑ひ始めたる難題なりゝが、洪鈞の解說にて、その病の根本明になれり。阿喇亦は、卷八なる阿咪嶺に〳〵て、乃蠻の地より不黑都兒麻河の源に赴くに越ゆる所なり。然るに太祖西征の路は、不黑都兒麻河に向はず〳〵て、乃蠻の地より阿勒台山の東南幹山を

修正祕史の紀年の一年後れ

西征の路順

越えて、合喇額兒的失河に出でたれば、阿喇亦を越ゆと云へるは、いかゞあらん。耶律楚材丘長春の經たる路は、蓋大軍のに異ならざる故に、楚材の西游錄と長春の西游記とに依り、太祖の進軍を跡附くるは、頗る興味ある事なれば、語長けれども、こゝに補敘せん。まづ西游記に、辛巳五月中旬、陸局河(客魯嗹河)を離れてより西に行き、六月十四日長松嶺を越え、西北に行き、平地に出で、石河を見、高嶺に登り、海子に臨み、二十八日、泊窩里朶之東、宣使往奏稟皇后、奉旨請師渡河、其水東北流、玻塔紉は、長松嶺を康該山の東の枝なる溫都兒沙納(高き松)山に當て、石河を薛連嚩河の南の溉水なる赤羅禿(石ある)河に當て、高嶺の下なる海子を赤羅禿河の流れ出づる察罕諾兒(白き湖)に當て、乃蠻の斡兒朶を薛連嚩河の一源なる額帖兒河の邊に置けり。次に「七月九日、同宣使西南行五六日云云、又三二日歷一山、高峰如削、松杉鬱茂、而有海子、南出大峽、則一水西流、玻塔紉曰く「尖れる峰は、烏里雅蘇台の東なる康該の雪峰の一なる斡惕桓孩兒罕山なり。それの麓、孛固丁河の源に一の湖あり、峽より出でたる後、西に流るゝ河は、烏里雅蘇台河なり」と云へり。長春は、それより西南に行き、沙場を過ぎ、又五六日嶺を踰えて南し、田鎭海の城の北を過ぎ、二十六日、阿不罕山の北に鎭海來謁し、八月八日、大山に傍ひて西に行き、又「西南約行三日、復東南過大山、經大峽、中秋日、抵金山東北、少駐、復南行、其山高大、深谷長坂、車不可行、三太子出軍、始闢其路、約行四程、連度五嶺、南出山前、臨河止泊、從官連幕爲營、因水草便、以待鋪牛驛騎、數日乃行、渡河而南」ト咧惕施乃迭兒曰く「長春の過ぎたる山口にて大軍の過ぐる爲に路の闢かれたるを見れば、長春は、成吉思汗耶律楚材と同ド路を行きたることうつなし。苔必思騰苔班の山口は、阿勒台山脈を越ゆ

額帖兒河の邊なる乃蠻の斡兒朶

阿勒台の東南幹山